

ガールズ&パンツァー
GIRLS und PANZER
著 ひびき遊
原作 ガールズ&パンツァー製作委員会
VOL. 1
MF文庫J


GIRLS und PANZER
ガールズ&パンツァー
GIRLS und PANZER


「整列！」
凛とした一言を発したよ。
うわ!? 私たちは反射的に、全員がきちんと列を正して背筋を伸ばしちゃう。
「第一に、戦車道は礼に始まり、礼に終わるの。では一同、礼！」
言われるがままに、私たちはきびきびと頭を下げた。
それを見て、にっこりと蝶野教官が微笑む。
「よろしい。じゃあさっそく、練習試合やってみましょう！」
蝶野


ちょっと待ったー！
「麻子！　ねえ、操縦手お願ーい！」
「……なにを言っている」
ざくり、と一度足を止めてから、麻子がぶんぶん首を振るよ。
「そもそももう、選択科目は書道にしている」
「え〜〜〜」
「れ、冷泉さん！　冷泉さんがいてくれると、助かります！」
食い下がったのはなんと、みほりんだったり。
けれど。
「悪いが、無理」
麻子ったらほんと、素っ気ないんだから！
「それに今更、選択科目の変更はできないだろうし。残念だな」
「ああ、それなら無問題だよ〜」

キャラクター紹介
Character Introduction



Ⅳ号戦車D型
Panzer IV D Tank



沙織たち「あんこうチーム」が乗り込む戦車。ドイツ製。

秋山優花里
Akiyama Yukari



なによりも戦車が好き！　その知識はチームの助けになることも。みほに憧れてチームに参加した。

冷泉麻子
Reizei Mako



成績学年トップの天才。でも、朝に弱く遅刻の常習犯のため単位不足で、単位と引き替えに戦車道を履修することに。

武部沙織
Takebe Saori



世の中のすべてのことを恋愛に結びつけ恋愛に憧れている。戦車道を履修すればモテると考えて参加したが……。

五十鈴華
Isuzu Hana



華道の家元に生まれたけれど、自分の生ける花に物足りなさを感じ、戦車道を選んだ生粋のお嬢様。

西住みほ
Nishizumi Miho



西住流戦車道の名家に生まれ、戦車道から逃げるつもりで大洗女子に転校してきた。誰よりも友達想いの高校二年生。

MF文庫J

ガールズ&パンツァー

ひびき遊

原作：ガールズ&パンツァー制作委員会

口絵・本文イラスト●京極しん

CONTENTS

■プロローグ　戦車道でモテモテ、だよ！

『戦車道～！　それは伝統的な文化であり、古来より世界中で、女子の嗜みとして受け継がれてきました！』

ぱーぱぱぱーぱーぱぱぱー！

薄暗くなった体育館に、いきなり軽快な音楽が流れたよ。

そして床に座った私たちは、スクリーンで動く鉄の塊を見る。

……戦車？　みんな、ぽかんとするばかり。

けれど、もっとびっくりしたのは——その上で手を振る、軍服を着た女の子たちの姿だったりしちゃう。

わ！　か、かっこいい？

『礼節のある、しとやかで凛々しい婦女子の育成を目指す、武芸なのです！』

きゅらきゅらきゅらきゅら。

女の子たちの乗り込んだ戦車が、走り出した。

『戦車道を学ぶことは、女子としての道を極めることでもあります！　鉄のように熱く強く、それでいて無限軌道のようにカタカタと愛らしい！　そして大砲のように情熱的で、必殺命中！』

——ずどんっ‼

突然、スクリーンを揺らすほどの音がした。
戦車が、大砲を撃ったの！　うひっ、と思わずびくついたのは、私だけじゃないよー。
隣にいた友人の華（はな）も息を呑（の）み、他の女子生徒たちもどよめいてた。
『それが戦車道（せんしゃどう）をたしなむと、自然と身につくのです！』
けれども私は次の瞬間、思い切り目を見張っちゃう。
だって、だって、だって！
『戦車道を学べば、必ずや良き妻、良き母、良き職業婦人になれることでしょう。健康的で優しくたくましいあなたは、多くの男性に好意を持って迎え入れられるはずです！』
「！　それって……わ、わっ⁉」
スクリーンの光景が切り替わると、戦車に乗った女の子たちは、多くの若い男たちに囲まれてたよ！
彼らは熱狂的に手を振り、投げキッスまでしてる。
これって、まさか……。
モテるの？
モテモテになっちゃうのっ⁉



『さぁ、みなさんもぜひ！　戦車道（せんしゃどう）を学び、心身ともに健やかで美しい女性になりましょうー！』

私は思わず身を乗り出してた。

……そんなの、やるっきゃないじゃん！

だから私、武部沙織（たけべさおり）は勢いで、必修選択科目「戦車道」を選んだの！

うん、すぐに後悔することも、いろいろあったけどさ……。

だいたいこの大洗女子学園（おおあらいじょしがくえん）には、戦車道はずいぶん昔にあっただけで、長らく行われていなくて。

だからまさか、遺棄された戦車を捜し出すところから始めるだなんて……思うわけないじゃん？

ほんと、生徒会って行き当たりばったりすぎだよ！

この戦車道を復活させよう、だなんてそもそも思いついたのも、生徒会長たちなんだけれど――。

それでも広い学校の敷地のあちこちから、私たちは全部で五つの戦車を見つけたよ。

倉庫の奥で眠っていただけのものもあれば、池の中で水没していたのもあったり。なぜかウサギ小屋の中にあったのも。

どれもこれもどろどろで、洗うだけでも一苦労したよ！
ちょっと、イメージ違くない？
私、モテるために戦車道始めたんだけど⁉

†

「でも……ようやく、なのよね！　うんっ！」
朝の寮の自室で、私は朝シャンを終えて、姿見の前で身支度する。
いつもより気合いが入るのは、今日が特別な日だから。ふわっふわの髪は、念入りにブラッシングしてもうばっちり！
制服はあえて、スカートを魅惑的な位置にまでちょい上げしたり？
そこに黒のニーソックスを合わせるのが、私流だったりするんだよね〜。
「ちらっと太ももを見せるのが、男性のハートをきゅんっとさせちゃうんでしょ？　うん、間違いない！」
——ベッドに放り投げていた、折り目のついたファッション雑誌をも一度チェック！
……へへーん、完璧（かんぺき）じゃない？　私。
だって、だってだって。
今日ついに、戦車に乗っちゃうんだから！
「そして、来るのよね！　カッコイイ教官が！」

はうーん！　そりゃもうテンション上がりますとも、私ったら！
どんな人だろう？　イケメンかな？　イケメンだよね、生徒会長さんが「カッコイイ」って断言したんだし！
ああっ、もう！　惚れられちゃったらどうしようー！
――なんて綿密なシミュレーションをしていたら。
ぴんぽーん。寮のインターホンが鳴った。あ、もうそんな時間？
「はいはーい！」
相手は誰だかわかってる。1DKのキッチンの壁掛け時計に目をやれば、いつも通りの7時55分だもん。
携帯電話を鞄がわりのトートバッグに放り込むと、私は玄関で靴を履く。
そのとき玄関ドアの覗き窓越しに、大洗女子学園の制服を着た女子が見えた。
背が高くて、長い黒髪の似合う、おしとやかな雰囲気の女の子。
うん、やっぱり。誘いに来たのは隣の女子寮に住む、五十鈴華だよ～。
「お待たせ、華～！　おっはよう！」
「はい、おはようございます。沙織さん」
ドアを開けると軽く会釈して、華が出迎えてくれた。
その丁寧な空気は、大人っぽくてほれぼれしちゃう。さすがは華道の家元の娘、ってとこだよね？

一年生のときから友達だけど、二年でも同じクラスになったのをきっかけに、こうして一緒に登校するようになったんだよね。たまたま寮も近かったし！

ううん、一緒なのはそれだけじゃなくて――。

「今日からついに、戦車道（せんしゃどう）の練習ですね」

寮の階段を降りながら、華がほう、と学生鞄を胸に抱いて溜息（ためいき）を漏らした。

うらやましいくらい白い頬（ほお）が、いつしかほんのりと上気してる。

あれ、珍しく興奮してるの？

「わたくしたちが見つけて、きれいにしたあの戦車に、乗れるんですね」

確か華は、「華道よりアクティブなことがしたい」って戦車道を選んだんだっけ？

あー、なるほど。

「やっと戦車、動かせるんだもんねー」

「はい。……もちろん初めてのことばかりですから。正直、不安もあります。戦車のこと、なにも存じませんし」

「大丈夫だよ！　そのために今日、教官が来るんでしょ？　イケメン教官が！」

ぽん！　と階段の最後の段を飛び降りて、私は笑顔を華（はな）に向けた。

「それに、一人じゃないじゃん。私たち」

「あ……」

戦車は、一人で動かすものじゃないんだって。

それを私たちは、最初に知ったよ。びっくりしたけど、どうやらそういうものみたい。

だから今は私と華と、あと二人で一チームなのよねー。
「そうですね。そうでした」
にっこりと華も微笑む。
ま、私は頭数に入らないけどさ。戦車のことなんて、さっぱりだし。
でもチームの中には、戦車をよく知ってるコもいるもん！
「みんなでやれば、なんとかなるよ。きっと！」
「はい」
私たちは寮の外へと一歩出た。
って、わ！　すんごい快晴！　はあっ、と思わず見とれちゃうくらい！
うん、それはまるで今日の私たちを、祝福してくれてるかのようで。
「ようーしっ、恋に戦車に、がんばろー！」
「恋は……あまり関係ない気がしますけれど」
「もー、華ったら。女の子にとって、恋はいつでも突然なのよ？」
わかってないなあ。なんてしゃべりながら、私たち二人は通学路を歩いて行く。
ふわりと常に潮風のそよぐ、全長７ｋｍ以上もの「学園艦（がくえんかん）」――その中央につくられた私たちの学校、大洗女子学園（おおあらいじょしがくえん）へと。

1　イケメン教官、じゃないじゃん！

学園艦、っていうのは一つの学校を中心にできた、海に浮かぶ町のこと。
住宅街はもちろん、コンビニや公園だってあるし、なんと山林まで人工的に整備されてるの。
大洗女子学園のあるここは、一応茨城県大洗町の飛び地、って扱いになってるみたい。普段は陸から離れてるけど、定期的に大洗町の港に戻るんだよ。——そういえば、今週末にはまた大洗港だっけ？
ううっ、素敵なカレと出会えるチャンスがまた到来！　なわけよね？
……でもでも、今は目の前のイケメンよっ。
「えーと。今日はイケメン教官が来る日だから、丸一日戦車道、なのよね？」
「はい。直接、倉庫前に集合ですよ」
「そっか！」
私と華の二人は大洗女子学園の正門をくぐると、鞄を持ったまま校庭の方に回った。
普通の授業とかすっ飛ばしちゃうわけだけど、生徒会権限で、三倍の単位がもらえるんだっけ。あと、食券百枚とか、遅刻見逃し二百日とか。
もちろん私たち戦車道選択者以外は、今日も普通に教室に入ってく。
正門から伸びた、普通科と商業科の校舎に挟まれたメインストリート。私と華はそれを

行き止まりの被服科校舎まで進んで、体育館の方へと曲がった。

そこを抜けると、陸上競技用のトラックがあって――その広いグラウンドのずっと奥に、倉庫が並んでるのよね。

歴史だけは古い大洗女子学園の、いらなくなった備品を詰め込んできた、三角屋根で白壁の倉庫たち。長屋みたいに連なるその前に、何人かの生徒がもうちらほら集まってたよ。

私や華と同じく、戦車道を選択した女子たちだね。

だけど、私も華も「おはよう」の挨拶(あいさつ)さえ、息と一緒に飲み込んじゃった！

だって……。

「わあ！　整備、済んでるよ？」

「みたいですね！　……ほら、外れてた履帯(りたい)、でしたっけ？　それもきちんとはめられてますし！」

どどーん！　と並べられていたのは、五台の戦車たち。

どれも形がまちまちで、私たちが見つけて洗うまでは、蜘蛛(くも)の巣や埃(ほこり)や泥まみれだったけれど――。

今は、もう違う。

ぴっかぴか……とまでは、いかないけどさ。「ちゃんと動く」んだ、って雰囲気(ふんいき)を出してた。

そう。もう動くのよね、私たちの戦車って！

――それよりも先に満喫していたのは、くせっ毛頭の女の子だった。

「Ⅲ突カワイイ！　M3リーは、三段砲塔がカッコイイですよ！　……八九式は鋲打ちがステキです！　ああっ、そして愛しのⅣ号D型ちゃあああん！」

「って、ゆかりん⁉　な、なにしてんの？」

戦車にべったりくっついていた、恍惚の表情の彼女に、私は思わずツッコミを入れた。

この戦車道で友達になったばかりで、咄嗟に「ゆかりん」とかあだ名つけちゃったけど、いいよね？

「あ。おはようございます、武部殿！　五十鈴殿！」

倉庫の中から発見されたⅣ号戦車の上に立って、同じ二年の秋山優花里――ゆかりんが手を振った。

にっこり答えるのは、動じない華だったりする。

「おはようございます。秋山さん」

「見てくださいお二方～！　75mmの短砲身といい、もうこの、30ミリの装甲がたまりません！　くううっ」

そしてゆかりんは、戦車の大砲を抱きしめてそうまくし立てた。

……うん、なに言ってるかわかんない。

「ほんと、ゆかりんって戦車好きねー」

「はい！　戦車ラブです！」

ゆかりんが目をきらきらさせながら、きっぱりと告げた。
ちょっと変わったコだけれど、彼女はほんと戦車に詳しいのよね。行きつけの戦車道ショップがあるくらいだし。
たぶんこの学園に戦車道が復活して、一番喜んでるのが彼女よね。
そして。
「同じチームとしては、頼もしいですね」
ふと、華が私と同じことを考えてた。
「だね！」
私は頷く。
ここに集まったのは、ほんとに素人ばっかりだから、頼もしい限りだよ。——なんて、そろそろ数がそろってきたみんなをつい見渡しちゃう。
五台見つかった戦車に合わせて、とっくにチーム分けは済んでたり。
すべての言い出しっぺである、生徒会の三役。それと、バレー部のユニフォームに身を包む、四人組。……なんか四人しかいなくて、今は「元バレー部」らしいんだけど。
それから、制服にマフラーを巻いたり、軍服や羽織をそれぞれ重ね着したりする……歴女チーム。で、いいんだっけ？
なんかあの人たち四人とも、それぞれ本名じゃなくて「ソウルネーム」とやらで呼び合うから、よくわかんないんだけどね。
……。モテるなら、それもアリなのかな……！

まあそれはそれとして。あとは、六人でチームをつくった一年生たち。
そして最後に私と華（はな）、ゆかりんと――もう一人。
この中で一番頼れる、唯一、戦車道（せんしゃどう）の経験者の――。
って、あ、あれ？
「そういえば……みぽりんは？」

「お、遅れました。ごめんなさい！」
きんこーん。と始業のチャイムが鳴ってから、はあはあと一人の女の子がグラウンドを走ってきた。
いつもあわあわした様子の、西住（にしずみ）みほ。みぽりんだよ！
肩まである髪を振り乱し、とっくに戦車の前に整列していた、私たちのもとへとやってくる。
って、みぽりん。そんなに慌ててたら、また――！
「は、はわわっ！」
「わ！　危ないよ、みぽりーん！」
なんにもないグラウンドで躓（つまず）きかけて、みぽりんたら危うく転びそうになっちゃう。
セーフ！　今日はどうにか踏ん張った。「おおー」と感心して拍手までするのは、一緒に並ぶゆかりんだったり。
「さすがは西住殿！　体勢を崩しても、超信地旋回（ちょうしんちせんかい）のごとき動きで立て直されました！」

や、やはりそれは戦車道の極意だったりするのですか⁉」
「えっ？　いや、そんなんじゃ……」
いつも戦車と結びつけるゆかりんに、みぽりんはたじたじ。息も絶え絶え、「今日は、たまたまで」とごにょごにょ呟く。
そう、みぽりんって天然のドジっこなのよね！
うーん。そこが面白くていいんだけど。私と華が最初に声をかけたきっかけも、実はそんなところだったりするの。
でも……そのみぽりんって、実は実家が、戦車道の家元なのよ？
そして本人も、もちろん戦車道経験者で。
「なにはともあれ、ご無事でよかったです。みほさん」
こけかけるみぽりんをよく支える華が、ほっと胸をなで下ろした。
「遅いので、なにかあったのかと思いましたが」
「う、うん。大丈夫、だよ」
ようやく呼吸を整えて、みぽりんが汗を拭う。
「うっかり寝過ごしちゃっただけで……あは、あはは」
ほんと。ぜんっぜん、そんなふうには見えないけどね？
うん、ついこの間までは。
けど、戦車をこうして見つけてからは——ちょくちょく頼もしいところがあったり！
なんだろう。雰囲気が急に、引き締まるときがあるというか……。

『こらー！　西住みほ！　遅刻とはたるんでいるぞ！』
と、そこに、メガホン越しの一喝が飛んできた。
びくっ！　とみぽりんが小動物のように首をすくめる。
声を張り上げたのは、私たちのⅣ号戦車の隣。ちょっと小ぶりな戦車、38tとかいうのの前に並ぶ、生徒会の一人だった。
クールな感じに片眼鏡をかけた、生徒会の広報の人、三年生の河嶋先輩。
でも、いつもつい、その隣に目がいっちゃうの。
一緒にいるのは副会長の、おっとりとした小山先輩なんだけど――。
「ほらほら、早く並んじゃってね？」
そう手招きするだけで揺れるのは、胸。
おっきい……すごい。ごくり。絶対、男子ならイチコロな、巨乳の持ち主なの！
いいなあ。あれだけ大きいなら、モテるだろうなあ～。
やっぱり牛乳？　ヒケツは、牛乳なのかな⁉
……なんて私の熱い視線には気付かずに、副会長は胸を揺らして出席簿にチェックを付ける。
「これで全員そろったわね。ああ、よかった。さっきから桃ちゃん、ずっとかりかりしてたんだから」
『もっ、桃ちゃんって呼ぶなー！』
下の名前でかわいく呼ばれて、河嶋先輩が真っ赤になった。

その隙（すき）にみぽりんも、あたふたと私たちの列に並ぶ。
でも、そんなに慌てることもないのよね。
「主役は遅れてやってくる、ってことかな。さすがね、西住ちゃんー」
のんびり言うのは、生徒会三人組の最後の一人。
ツインテールの髪がトレードマークの、小柄な生徒会長、角谷（かどたに）先輩だよ。
この人が、戦車道（せんしゃどう）を復活させた仕掛け人なわけなんだけど……なんだか、いつもてきとーな感じなのよね？
普段からなにかと、干しイモ食べてるし？　学校にそんなオヤツ持ち込んでも、ＯＫなの？
今日も今日とて、雑務を副会長と広報の二人に任せて、一人だけ整列もせずに３８ｔの上に立ってるしさ。
そんな会長さんは、あふう、とあくびを一つして。
「それにしても……教官も、遅いわねー。ほんとの主役は蝶野（ちょうの）教官、ってとこかしら」
蝶野？
そ、それがイケメン教官の名前なのね！　心のメモ帳に、書き込み完了っ！
はあー、それにしてもここまで私たちをじらすだなんて……大人のテクニックだよね？
「なんか派手な登場をしたい、とか電話で言ってたけど。そのせいで遅れてるのかなー。
……ん、んんん？」
くおーん。

なにか空気を震わすような音が聞こえてきて、会長さんがまず反応した。
え、なに？　私たち他の女子も、音を追ってはたと上を向く。
あれは、飛行機？　でもなんか、ずいぶん低く飛んでいた。形や色がはっきり見える。
「航空自衛隊の、大型輸送機ですか？」
こういうことには詳しいゆかりんが、振り仰ぎながら判別した。……ふうん、そうなの？
ただその機影は、ぐんぐんこっちに向かって近づいてきて——え、ええええ？
なにか、落とした⁉
灰色の飛行艇が私たちの頭上を通り過ぎた瞬間、その後部からパラシュートが開いたよ！　ううん、パラシュートのくっついた、箱形のモノが引きずられて飛び出してきて——。
って……せ、戦車⁉
「１０式戦車（ヒトマルしきせんしゃ）？」
みぽりんが型式を言った。ですね！　とゆかりんが同意する。
「さすがは西住（にしずみ）殿！　日本の自衛隊が誇る、驚異の最新鋭戦車ですね！　それもLAPES（ラペス）仕様とはっ！」
「ら、らぺす……？　って、ちょっと。あんたたち⁉」
そんなこと言ってる場合じゃ——。
そのヒトマル式戦車とやらは、私たちの方へと真っ直ぐ落ちてくる。

危なーい！　思わず側にいた華とともに、私は頭を抱え込んだ！
ただし、戦車はグラウンドから少し外れて。
ごしゃんっ‼
……すごい音が、校舎横の駐車場の方からしたよ。
そこに、戦車は落ちたみたい。
滑るように着地を決めたその下には、なんか、「車だったもの」が遠目に見えるんですけど⁉
「あれは……も、もしかして学園長の車⁉」
副会長が胸を揺らして青ざめた。え、え？　それ、やばくない？
しかもあの車って、外車の高そうなヤツじゃん！
会長さんときたら、「あー、やっちゃったねー」なんて、落ち着いてるけども。
「一応、本番、訓練を問わず……戦車道での周囲の損壊は、きちんと補償されますが」
みんなと同様、あっけにとられながらも広報の人がそう呻く。あ、そうなの？
と、思ったとき。
べきべきべき！
ヒトマル式戦車が、その場で方向転換した。
下敷きになった高級車の残骸が、さらに潰れてポテチみたいになる。う、うわー。
誰もが口をあんぐりと開けて見守る中、戦車は駐車場からグラウンドへとやってきて。

やがて私たちの前で停止すると、その上の扉が開かれて、スーツにヘルメットをかぶった人が現れた。
もしかして。もしかすると、この人が！
「こんにちはー」
ヘルメットを脱いで、その人は明るくさわやかに挨拶した。
……あ、あれ？
「特別講師の戦車教導隊、蝶野亜美一尉です！　はじめまして、大洗女子学園のみなさん！」
やってきた蝶野教官は、短く切りそろえた黒髪がよく似合う……って、女の人じゃん！
えええええええええええ⁉

†

「よろしくお願いします。戦車道は初めての方が多いと聞いていますが、一緒にがんばっていきましょうね！」
「騙された……」
蝶野教官の挨拶を聞きながらも、私はつい、38tからぴょんと降りた会長さんを睨んじゃう。
「イケメンじゃない……話が違うよぉ」

「あの。沙織さん？　確か生徒会長さんは、イケメンとは一言もおっしゃってなかったような」
ぽそり、とそう呟いたのは私の前に並ぶ華だった。
え、そうだっけ？
「だってカッコイイ教官ってっ」
「はい。ですから、カッコイイ、とだけ」
「……！」
ほんとだ⁉　あああ、私の勘違い？
「でも、素敵な方には間違いありませんね」
頭を抱える私と違って、華はなんだかうっとりとした顔で、教官を見てた。
そういえば……確かに。私はようやく落ち着いて、やってきた蝶野教官を見つめる。
カッコイイ。うん、間違いない。
タイトスカートのスーツの裾を乱すことなく、颯爽と教官がヒトマル式戦車から降りてくる。
そして姿勢を正し、ぴしっ、と私たちに敬礼した。
はあ～。なんか、すごい？
戦車道やってるから、なのかな。……私も教官に指導してもらったら、あんな風になれるかなあ？

と、そんな教官の目が、ちょうど私に向けられて――。
「！　もしかして……西住師範のお嬢様じゃありません？」
違った。私じゃなくて、後ろに並んだみぽりんを、教官は見てたんだ。
敬礼を解いて、教官がにこやかに話しかける。
「間違いない、妹さんですね。あ、師範にはお世話になっているんです。直接ご指導していただくこともありますし」
妹？　意外な情報に、私も華も、一番前に並ぶゆかりんも反応した。
ということは必然的に、みぽりんにはお兄さんかお姉さんがいるってことで。
「お姉さまもお元気？」
教官が言った。
「は、はい……」
みぽりんが頷く。
ざわつくのは、私たち他の女子だけど。「師範？」「西住さんちって……有名なの？」
なんて誰かがしゃべった。
「西住流は、戦車道の流派の中でも、最も由緒ある名門なのよ」
説明したのはやっぱり蝶野教官だよ。おおお、とみんなは余計にざわざわする。
すごいんだね、みぽりんの家って！
「それにお姉さん、西住まほさんは去年、戦車道の高校生大会で優勝したの。確か国際大会の強化選手にも選ばれたのよね？」

そして教官は、みぽりんのお姉さんをベタ褒めした。……国際大会って、ち、ちょっとすごすぎない？

「勝利の秘訣『あきらめないこと、そしてどんな状況でも逃げ出さないこと』は、本当にいい言葉だわ！」

あっ、それって……！

私や華、それにゆかりんまでもが息を呑んだ。

その言葉を、私たちは知ってたから。

あれは……つい先日のこと。ゆかりん御用達の、戦車道ショップに立ち寄って――そこの店内に貼られてた言葉だよ。うん、間違いない！

それだけ、みぽりんのお姉さんはすごいってこと？

私はつい振り返って、みぽりんを見てしまう。でも、あれ？

お姉さんを褒められたみぽりんは、なぜかうつむいて、元気がなさそう？

そういえば――みぽりんって、最初は戦車道をやりたくなかったのよね。

それって、「いい思い出がないから」って言うだけで、詳しくは教えてくれなかったけど。

ううん。きっと訊いちゃいけないことだから、私も華も、あえて触れないようにしてて――。

……。ええい！

「はいはーい！　教官！」

私は唐突に手を上げた。だって雰囲気、切り替えてあげなきゃね！
「えーと、教官は、やっぱりモテるんですか⁉」
「……え？」
ぽかーんと、蝶野教官が口を開けた。
あれ？　そんなに変な質問だった？　この場にいた誰もが、教官と同じ顔で私を見てくる。
けど、さすが教官は大人だった。
「モテるというより、そうね。狙った的は外したことないわ」
なんて、にこやかに答えてくれる。おおお？
「撃破率は、120パーセントよ！」
「ひゃ、ひゃく⁉」
ほぉ〜！　と思わずどよめいたのは、私だけじゃなかったよ。
誰もが尊敬の眼差しで、蝶野教官を見つめる。みんな、乙女だもんね！
でも広報の河嶋先輩だけは、片眼鏡をきらりとさせて、私のことを睨んできたけど。
うっ。
『そこ、教官は恋の指導をしに来たのではないぞっ』
メガホンまで使って叱ってくる。は、はーい。
「そうね。ではさっそく、戦車道の訓練といきましょう！」

教官も気を取り直し、すうっ、と軽く息を吸い込むと。
「整列！」
凛とした一言を発した。
うわ⁉　私たちは反射的に、全員がきちんと列を正して背筋を伸ばす。
「第一に、戦車道は礼に始まり、礼に終わるの。では一同、礼！」
言われるがままに、私たちはきびきびと頭を下げた。
それを見て、にっこりと蝶野教官が微笑んだ。
「よろしい。じゃあさっそく、練習試合やってみましょう！」
なんて、いきなりなことを言いながら。
は、はいい？

「大丈夫よ。実践実践実践！　戦車なんてバーッと動かして、ダーッと操作して、ドーンと撃てばいいんだから！」
じゃあね、なんて告げて――河嶋先輩から譲り受けたメガホンを持って、教官はヒトマル式戦車に戻った。
きゅらきゅらと動き出した戦車が向かうのは、駐車場の遥か向こうにそびえる、鋼鉄製の高い塔――。
ううん。学園艦の、艦橋ってヤツ。
『戦闘の様子は、練習場を一望できるあそこから見てるから。で、今回は団体戦ルールで

いくわね？　要は、すべての車輌が動けなくなるか、最初に設定した根拠地を奪われた側が負け。でも今回は五輌しかないし、チーム分けも難しいから、根拠地はナシでいいわ。だからもう、簡単！』

びしっ、と戦車の上から教官が、練習場となっている学園裏の山林を指した。

『てきとーにフィールドにばらけたら、スタートの合図でガンガン前進して、バンバン撃つの！　それで自分たち以外の車輌をやっつければいいわけ。わかった？』

はい！　と去りながら教官は、ぱんぱんとメガホンを叩く。

『じゃあ早く乗り込んで！　あとは通信機を通して、おいおい指示を出すわよ。真っ先に、無線のスイッチ入れておいてね？』

え、無線？　私たちはみんな、顔を見合わせた。

というか……あの。乗り込むとか、なんのレクチャーもなしで？

けれども蝶野教官を乗せた戦車は、どんどん遠ざかっていった。

ええと、もう、やるしかない!?

「いやー、ずいぶんざっくりねー」

会長さんがけらけら笑って、真っ先に動いた。３８ｔ戦車に手をかける。

が、小柄な会長さんは、いつも一人じゃ這い上がれないのよね。すかさず広報の河嶋先輩が、名前を呼ばれて「は！」と踏み台になったけど……。

「会長に言われたくないんじゃ……」

なんて言いながら溜息とともに、胸を揺らす副会長も後に続く。
「どうやって動かすのー？」
「待って、戦車道やってた友達に訊いてみる！」
「ネットで訊いた方が早いんじゃない？」
わいわい言いながら、大砲がくっついた、五台の中で一番背の高い戦車に取りつくのは一年生たち。
あれって六人まとめて乗れるのよねー。
「ここでがんばれば、バレー部は復活する！　あの廃部を告知された日の屈辱を忘れるなー！」
「ファイトー、おーッ！」
気合いを入れているのは、元バレー部の四人組だった。
他のとは違い、足回りの横側に鉄板のついた戦車の前で、円陣を組む。
「初陣だーっ！」
今度は歴女さんたちが、張り切って声を上げてた。
「ここは車がかりの陣でいきますかね！」
「いえいえ、ここはパンツァー・カイルで」
「一輛しかないじゃん……」
なんだかよくわからないこと言ってるけど、そのまま一番背の低い戦車に向かう。

ゆかりん曰く、Ⅲ号戦車の突撃型、だっけ？　私たちのⅣ号より一つ古いタイプなんだって。

さて、で……私たちもⅣ号戦車に乗るしかないよね！

「……みんな、いきなり試合だなんて、大丈夫かな」

経験者のみぽりんが不安そうにしていたけど。

「どーにかなりますよ、西住殿！　さあ、みんなで乗り込みましょう！」

ゆかりんが元気に促した。

「ではまず、西住殿からどうぞ！」

「えっ。う、うん」

みぽりんがためらいがちに、でも慣れた様子で足をかけて、ひょいとⅣ号の上に登る。

うん、こういうところがさりげなく、頼りになるのよね。

私も真似て登ろうとしたんだけど……ううっ、なんでー？　うまくできない！

「って、と、届かないー」

洗車のときから、ずっとそうなんだけどね……。

「あ。武部さん、掴まって」

「はい、沙織さん」

みぽりんと、先に登った華とが手を伸ばしてくれる。後ろからはゆかりんが私を押してくれた。

んしょっ、と！　ふう、ようやく登れた〜。

「やっぱり、景色が変わりますね」

ふいにそんなことを言ったのは、華だった。え？

彼女の視線を追いかけて、私も初めて気付かされる。

うん、確かに。戦車を洗ってたときは、いちいち気にしなかったけど……なんだか違う！

見晴らし、いいのよね。って、見とれてる場合じゃなくてっ。

「とりあえず、通信機のスイッチ入れるね？」

そう言ってみぽりんが先に、戦車の上にある円い扉を開けて、中に入っちゃう。

続けて華が、ゆかりりんが入った。私は最後。よいしょっ、と！　狭いのよね、この、戦車の真上にある入り口ってさ。

「えーっと、私は……」

鉄臭いⅣ号戦車（よんごうせんしゃ）の中には、五つのシートがつけられてる。まともに背もたれがあるのは、ハンドルと操縦レバーのくっついた、左下にある操縦席。

それ以外は、狭い中を人が通り抜けられるように、棒みたいな背もたれが折りたたまれるようになってた。操縦席の右隣が、通信機のある通信席。んでそれ以外は、一段浮いたところに円形の床があって、その上に三つの席がまとまってるのよね。

その中でも上の出入り口を入ってすぐの、一番高い位置にあるシートに、私は座った。

いや、三人が下に行っちゃったから、自然と邪魔にならないここに陣取っただけなんだ

けどね。
で、同じ円形床にくっついた前方の席には、ゆかりんが。その彼女越しに見える、斜め下前方の操縦席に華、通信席にみぽりんが座ってた。
って、なんか薄暗くてよく見えないよ⁉
「相変わらず窮屈で……く、暗〜い！　えっ、窓が塞がっちゃってるよ、みぽりーん！」
中が狭いのはもう、仕方ないけど。もうちょっと明るくなかった？
原因はすぐにわかった。戦車のあちこちについてる小窓が、蓋されてる？
「洗車のときはここ、もっと開いてなかった？　なんか、細い隙間だけになってない？」
窓を塞いだ蓋には、細い隙間がつけられてた。そこからどうにか外の光が入ってくる、って程度だよ！
けど、みぽりんたら平然としていて。
「あ。だって、撃ち合いのときは……装甲シャッターを降ろしておかないと。いくら戦車道用の砲弾でも、最悪、防弾ガラスが割れちゃうから」
「えっ、そ、そうなの？」
「うん。だから、そこのスリットから外を見るの」
「えええええ？　こ、こんな隙間から？」
「みほさん、わたくしの座ったところは操縦席のようですけれど、やっぱりこの隙間から前を見て動かすのですか？」
奥まった位置にあるせいか、真正面に、つしか窓のない操縦席で、華が訊いた。

当然、とみぽりんは頷く。ひょえー。



「西住殿～！　しかし戦闘の行われる練習場までは、シャッターを開けて走ってもいいのでは？」

はいはい！　と挙手をして、ゆかりんが提案した。

けれど、「う、うーん。ダメ」とみぽりんが首を振る。

「確かに今は撃たれないから、平気だけど。でも……戦闘時には、この暗さになっちゃうから」

しゃべりながらみぽりんは、目の前にある機械をぱちん、と操作した。

たぶんあれ、通信機よね？　ぱぱっ、と小さな光が点された。

「今のうちに、目を慣らしておいた方がいいよ。慣れちゃうとけっこうよく見えるものだし」

「さ、さすがは西住殿！　実戦を積んできたからこその判断ですね！」

「そ、そういうわけじゃ……」

ゆかりんに感心されて、みぽりんが困ったような顔をした。あ、確かにさっきより目が慣れて、表情までわかるようになったかも！

――なんて私が思ったとき。

『各チーム、無線のスイッチは入ってるわね？　今回は練習だから、非暗号化モードのままでいいわ。要は近くにいれば、お互いの会話が混線して聞こえたりしちゃうけど、それも一興よ！』

唐突に、無線機にぶら下がったヘッドホンから、蝶野教官の声が聞こえてきた。わ、わっ。

『準備ができたなら返事なさい〜。ああ、声はヘッドホンと一緒にぶら下がってる、咽喉マイクを使って返してね。喉の振動を伝える、首にかける戦車専用のマイクよ』

「あ……は、はい。Ⅳ号戦車、聞こえています」

みぽりんがヘッドホンを片手に、その小型版みたいなのを拾い上げた。

それを首輪みたく装着して……へえー、それがマイクになっちゃうの？

続いて無線越しに、『もしもし、こちら生徒会チーム。38tも問題なし』『……マイクってこれ？　バレー部、えっと、八九式？　だっけ？　もバッチコイです！』『Ⅲ号突撃砲戦車、カエサル。賽は投げられた！』『ねえねえ、ここのスイッチでよかったみたい〜。あ、一年のM3戦車でーす。聞こえてますかあ？』などと、他のチームからの報告が入ってきた。

『よろしい。じゃあみんな、それぞれ役割を決めてくれる？　もうシートには座ってるわよね？　戦車は撃つ、走る、通信など席ごとにやることが割り振られてるの。最低限の三人乗りなら、操縦手と通信手、そしてリーダーとなる車長よ！』

シャチョー？　社長？　いきなりの教官の言葉に、私はついていけなくなる。

ううん、みぽりんやゆかりんがいるから大丈夫、かな？　あは、あはは……。

『四人乗りならそこに、砲手を加えるの。三名だと車長が射撃までこなすんだけど……撃つだけに集中する、専属スタッフに任せちゃうわけね。で、五人乗りだとさらに、装塡手

が加わるわ。弾は一発一発、込めなくちゃいけないから。その手間も、割り振っちゃうわけね？　ああ、そういえば六人乗りのM3中戦車リーがあったんだっけ。あれは、主砲が二つあるタイプだから、砲手を二人にすればいいわ』

い、いっぱい説明されても困るよぉ！

「……なにがなんだかわかんないー」

「わたくしたちの戦車、五人乗りですよね？　でも四人しかいないですから」

どうしましょう？　と華が小首を傾げた。

「じゃあ、わたしが、通信手と装填手を兼任するね」

経験者のみぽりんがそう言った。わ、やっぱり頼もしい！

でも「ええっ」と声を上げたのは、ゆかりんだったりする。

「そんな！　僭越ながら、西住殿がコマンダーをやらずに、どうするのですか⁉」

「えっ。そんな、別に……もう、シートに座ってる役割のままでいいと思うけどね？　なんて下にいるみぽりんが、ふいに私の方を見上げた。

あ、あれ？

「だから操縦席にいる五十鈴さんが操縦手で、秋山さんが砲手。そして車長は武部さん、で」

「社長が、私ぃ？」

「わたくし、操縦するのですか？　まあ」

「おおっ、わ、ワタシが砲手ですか？　そ、それはやぶさかではありませんが……くぅ

う！」
私は目を丸くしたけど、華はどこか嬉しそうで、ゆかりんときたら恍惚の表情になってたよ。
あー、うん。社長かー……ま、いっか！
「働く女性って、モテるんだよね～」
通信機からは他の戦車から、同じように適当に決めちゃってる声が聞こえた。生徒会なんて、会長さんが『長がつく役職しかやったことないから』とか言ってるし！
「わかった」
私は大きく頷いた。いちいち迷ってちゃ、恋だって掴めないもんね？
「いや、よくわかんないけど。でも、社長になるよ！　みんな、私についてきて！」
私はどん！　と胸を叩いた。
……でも社長さんと戦車って、なにが関係あるのかなあ？

†　†

と、いうわけで。
『決まったわね？　じゃあ、最後に上部ハッチを閉めて。発進するわよ！』
教官の合図で私は、真上の円い扉を閉めた。半円が二枚閉じ合わさる扉には、ロックがついてたから「ふんぬー！」って精一杯レバーを回して固定しておくよ。

って、うわ！　なんかもともと狭かったけど、いっそう窮屈に感じるう～！
「それに、暑苦しい……。こ、こんなのでドライブするのー？」
「ドライブじゃなくて、試合ですよ」
華が下から訂正してきた。まあ、そうなんだけどね。
『あとはやりながら慣れなさい！　その気になればなんとかなる、が戦車道魂よ？　さーて、全戦車、パンツァー・フォー！』
うん？　なに？　いきなり無線で、教官が吼えした。え、え？
「ぱ、パンツのアホー？　ってなにー？」
「……パンツァー・フォー。戦車前進、って意味なの」
無線機のヘッドホンを装着しながら、みぽりんが解説してくれる。へえ、そうなんだ？
「さすがは西住殿～！　ううっ、しかし、いよいよ戦車を動かすのですね……！」
ぶるぶる、となぜかゆかりんが震えてる。武者震いかしら。
ただ、いくら前進って言われてもさ。
「あの。どうやって動かせば？」
もっともな質問を、操縦席にいる華がした。そうよねー。
一応、マニュアルは用意されてたんだけど。華は薄暗い中で目を通そうと、太ももにマニュアルを置いて思案に暮れる。
だから横からレクチャーしたのは、経験者のみぽりんだった。

「まず、イグニッション入れて」
これ。と、みぽりんがなにやら華の手元を指し示したよ。
そこには……うん？　スイッチがついてる？
「はい、このボタンを押せばいいんですね？」
華が言われたとおりに操作した。
すると——ぎゅいいいいいん！　ぶほんっ！　ぼばばばばばばば‼
ちょっ、なになになにー⁉
「うわあ！　す、すごい音ー！」
私は思わず両耳を塞（ふさ）いじゃう！　えええ、これが、戦車の音？　エンジン音？
ううん、音だけじゃなくて……いきなり細かく揺れ出したし！　まだ動いてもないのに⁉
自動車みたいなモンだと思ってたけど、なんか、ぜんっぜん違うじゃん！
みぽりんはともかく、ボタンを押した華（はな）自身もびっくりしてた。なにかしゃべったようだけど、聞こえにくい。戦車の音がやかましくて！
かわりに近くにいるゆかりんの、奇声だけがはっきり聞こえた。
「ヒャッホー！　最高だぜー‼」
……。あの、ゆかりん？
さすがに私も華もみぽりんも、どん引きなんだけど……。って、性格変わってない⁉
「……パンツァー・ハイ⁉」

思わず、そんなことを言ってしまう。華は目を丸くして、みぽりんも絶句してたよ！
はっ、と我に返るゆかりん。
「あ……す、すみません。つ、つい〜。はあー、でもこれが本物の戦車の鼓動なんですね！　ついに中から聞くことができるだなんて、感動ですっ！」
ほんと、戦車ラブなんだから。ゆかりんったら。
まだちゃんと動いてないうちからこの様子だと、ちょっと先が心配だぞー。
で、華の方はみぽりんの助けを借りて、いざ戦車を動かそうとする。
シートの前に突き出るのは、二本のレバー。それが操縦桿だよね？　うーん、けっこう重そう？
身を乗り出したみぽりんに手伝ってもらって、華がどうにかレバーを引いた。――ごごごご！　ついに戦車が、私たちのⅣ号が動き出す！
けれども。
「うっわ!?」
がっくん！　と思い切りシートが揺れて、停車しちゃった。
ううん、エンジン音も同時に消えて――あ、あれれ？
「エンスト、ですか？　そ、そんなー！　戦車の鼓動が、鋼鉄の息吹が〜！」
ゆかりんが嘆く。エンスト？
「エンジンストップ、ってこと？　え、なんでー？」
「どうしてでしょう……？」

操作した華自身も、ちんぷんかんぷんみたい。でも、みぽりんが落ち着いて指示を出した。
「アクセル、倒しすぎだと思う」
「あ、これですか？　でもこのレバーを動かして、前進って」
「うん、だけど戦車のエンジンってすごいパワーだから。戦車道用にオートマチック仕様にされてるんだけど、クラッチにかかる最初の負荷がすごいの。加速するときは思い切り倒していいんだけど……始動時は、緩やかに触ってみて？」
「そんなことが……。わ、わかりました」
「五十鈴さん、ギアはニュートラル、最初の位置に戻してからで」
「はい。ええと、こうですか？」
ぶほんっ！　ばばばばば！　戦車が息を吹き返す。「おおお！」とゆかりんも目の輝きを取り戻した。
——だけど、わあっ⁉
今度はいきなり、シートに座る私たちの体がつんのめる。えええ？
「さ、下がってる！　下がってるよ、華～！」
バックしてる！　私は視線を上げるとすぐ見える、取り囲むスリットの窓から外を見てわめいちゃう。
けれども、みぽりんは冷静だった。
「ギアを入れ間違っただけだから。大丈夫、落ち着いて入れ直してあげて」

「は、はい」
華が答える。すぐにがくん、と一度止まって――Ⅳ号戦車がようやく前に進み出した。
おおおお！
って……お、お尻ブルブルするぅー⁉　うわわわわ！
「音だけじゃなくって、し、振動もすごーい！」
「力強く、たくましく！　これが戦車です！　……わわわ、五十鈴殿！　感激です！　右前方に障害物ありです！　回避行動をー！」
と、はしゃいでいたゆかりんが急に慌てた。
わ！　確かにスリット越しの視界に、迫ってきた校庭端の樹木が見えるよ！
「ちょ、ちょっとぶつかるよ⁉　左、左にいってー！」
私は必死に訴えた。けど……あああ。ばきばきっ、と木の枝がぶつかって、折れる音がはっきり伝わる。
やっちゃったー！
どうにか、幹はかわせたけれど。って、華ったらひたすら前に進まなかった？
「華！　左って言ったのにー」
「す、すみません！　はっきりと聞こえなくて……！」
「え？　なに？　ちゃんと聞こえなーい！」
あ、そっか。戦車の音がやかましすぎて、こっちの声が届かなかったの？
それはきっと、どの戦車も同じなんだろうね。だから。

「武部さん！　車長が、足で方向を合図してあげるの。操縦手から見えるのは、前方のほんの少しの視界だけだから」
　みぽりんが私の方を振り仰いで、そう言った。足で、合図？
「？　みぽりん、どうやるの、それ？　足って？」
「……えっと、車長席の足下に、二つペダルがついてるよね。それが、実は操縦席の背もたれについた板と連動してるから。つまり、こう」
　とんとん、とわかりやすくみぽりんが、自分の左右の肩を叩いたよ。ま、まさか……。
「そのペダルの右か左を、進む方向に合わせて蹴るの！」
「嘘!?　マジ？　そ、そんなの……できないよ!?」
　むしろただでさえ狭いんだから、目の前にいるゆかりんとぶつからないようにって、気を遣ってたほどだもん！
　けど、みぽりんは真顔だった。……ええええ、ほんとに？
「え、だって。聞こえないから、そうするしか……」
「私、男の人を蹴ったことも、蹴られたこともない乙女なのにー！」
「でも車長の役目は、蹴ってでも戦車を導くことだから」
「え？」
「ほら、キューポラ……車長席って一段高い位置にあるから、見晴らしがいいでしょ。そのためにぐるりと覗き窓がついていて、ときにはハッチを開けて頭を出して、周囲の状況

を把握するの。スコープだけハッチから上に出して、見るってこともするよ」
スコープ？　あ、もしかしてこれ？　私はシートの側に押し込められていた、L字に曲がった望遠鏡みたいなのを発見する。
って、そっか。戦車の方向を、私がうまく決めなきゃ、なんだね。
……社長だもんね！
なんて思ってたら。わ、わっ！　グラウンドから林へと出たとたん——今度は、横から他のチームの戦車が⁉
「あ、危なーい！　避けて避けて、華！」
「！　どちらへ、ですか？」
「えっと……」
「いいですから、思いっきり蹴ってください！」
華が凛として言った。——え、ええーい！
「じゃあ、右ー！」
どすん！　私の右足が、けっこう強く右側のペダルを踏んだ。
すると、下に見える華のシートで、背もたれの右端が動いた？　それはもちろん、華の右肩と勢いよくぶつかって——。
一拍おいてから、Ⅳ号戦車はぎょりりっ、と方向を変える。無事、他の戦車をうまくかわして、ぶつかるのをどーにか回避！　ふうー。
「やった！　やったよ、華！」

「はい……でも、もう少し、次からはお手柔らかにお願いします……」

「‼　ご、ごめーん！」

やっぱり痛かった？　私は華に平謝りしちゃう。

ほ、ほんと気を付けるよ。うん……。

それはそうと、さっき危うくぶつかりかけたのは、一年生の乗る戦車だよ。

大砲が二つもついてて背が高いから、隙間から見てもわかりやすいのよね。

どうやらマニュアルを見ながら、なんとか動かせてるみたい。あ、通信機での、教官からの指導もあったね。

残念ながらこのやかましさでは、ヘッドホンをつけてる人にしか聞こえないけどさ。

「教官から通信！　わたしたちはこのまま真っ直ぐ、でいいそうです」

通信を担当するみぽりんが伝えてくる。

——グラウンドを越えて出発した私たち五台の戦車は、いつしかばらばらになり、山林の奥へと入っていく。

ここが全部、練習場になるわけだけど……やがてぽっかりと、木々の間をすり抜けて、ちょっとした草原に出た。

窪地、なのかな？　たぶん、周りよりゆるやかに低くなってる場所だと思うけど。

そこでみぽりんが、「停車してください、華さん！」と声をかけた。戦車がゆっくりと停止して、ぶるぶるとエンジン音だけを震わせる。

「ここがわたしたちのスタート地点、だそうです」
「ということは、いよいよ戦闘開始、ですね！」
嬉々として食いつくのはゆかりりんだよ。
がちゃこん！　と音がした。なに、今の？　ゆかりりんがどうやら、戦車内部に突き出た機械を動かしたみたい。
たぶん、あれって外に伸びる大砲の、根元よね？
「砲弾の装塡は自動化されてないんですねー。す、すみません西住殿！　装塡手は西住殿の役目でしたが……つい自分でやってしまいました！　ううっ、だって、せっかくですからさっそく撃ってみたくて。とりあえず、どこかを狙って……」
「待って。でも砲手一人だと、手動での再装塡が遅れるから。わたしが装塡手席につくまでは、ムダ弾は撃たないでね？」
「あ。は、はい、西住殿！」
ノリノリなゆかりりんも、みぽりんにだけは絶対服従なのよねー。
でも装塡手ってのと通信を兼ねてるみぽりんって、なんか大変そう！
「それから、闇雲に撃っても、敵チームにこっちの位置を教えるようなものだから……気を付けないと」
そのみぽりんが慎重に言う。ふぅん、そうなんだ。
「まずは索敵。相手の位置を把握することが、戦車道では大事なの。同時にそれと、こっちの位置を知られないことが、すごく有利になるの」

「へぇー、さすがはみぽりん！」
「では、下手に動かない方がいいのですね？」
操縦レバーから華がぱっ、と手を離した。
「ねえねえ。動かなくても、この音だからわかっちゃうんじゃない？　どうせならエンジン切っちゃう？」
なんて、私は思いきったことを提案してみたり。
「そんな、乱暴ですよう。武部殿〜」
ゆかりんが、すごく残念そうな顔でこっちを見てくる。
「戦場で戦車を動けなくするだなんて、それではただの砲台とかわりません！　動いてこそ戦車なのです！　そもそも自殺行為ですよう」
「え。そ、そう？　ごめーん」
「……ううん、作戦の一つとしては確かに、そういうのもあるの」
へ？　ふいなみぽりんの言葉に、私たちはびっくりした。
「燃料の節約にもなるし、長期戦を想定したときには有効なの。でも、今回は短期決戦だろうし。そもそも戦車って、始動がどうしてもたつくから……。いきなりエンジンかけても、素早く動けないから危なくて」
「あっ、それって」
もしかして、最初にエンジンが止まったみたいに？
「戦車は確かに、動けなくなったら終わりだから。むしろ今回は、フィールドも広くない

し。動き回って、先に相手を見つけた方が有利になると思う」
「あ、じゃあ」
生徒会チームを捜そう！　私はそう提案しようとする。
だって……イケメンじゃなかったもん！　そもそも男の人でもなかったし、教官って！
騙（だま）された純真無垢（じゅんしんむく）な乙女の恨みは、怖いわよ～。ふっふっふ。
だけど――。

2　戦車って、なんかすごいよ！

ずどーん！

……大砲の音？　と思ったときには、私たちは衝撃を受けてた！

「きゃぁあああああ!?」

もちろん私たちの誰（だれ）もが悲鳴を上げる。撃たれた？　撃たれたの!?

そんなこと、たぶんわかりきってた。けど口から出てきたのは、「なっ、なにが起きたのー!?」なんて声のみ！

ううん、その中でみぽりんだけが指示を出した。

「五十鈴（いすず）さん！　動いてっ、止まってると狙（ねら）い撃ちされちゃう！」

「……は、はい！　でも、ああっ、煙で前が!?」

操縦席で華（はな）が叫んだとおり、窓の隙間（すきま）から見える景色は、どこも土煙で見通せない。けど。

「かまわないから！　だけど焦らず、始動時はゆるやかにアクセルを押し込んで！　パンツァー・フォー！」

「はいっ！」

華が言われたとおりに操縦する。Ⅳ号戦車（よんごうせんしゃ）が窪地（くぼち）の中を前に進んだ。

すると煙の中を突っ切ってか、窓の外がぱっと晴れる。……って、ちょっ!?

「なんか見えた！　今の、戦車っ？」
「！　右手ですね、武部殿っ！」
斜め前にいるゆかりんが、私の視線の先を追い、窓の隙間を凝視した。
そこから見えるのは、窪地を取り囲む雑木林――その間に、明らかに草木じゃないシルエットが見える！
やっぱり、戦車だよ、あれ！
「まだ遠くにいるけど、背が高くも低くもないから、ええと！」
「生徒会の車輌か、バレー部のってことになりますね！」
ゆかりんが補足してくれる。うん、きっとそう！
「たぶん、八九式！　バレー部の！」
ヘッドホンを押さえて、装塡手席へ移動しながらみぽりんが叫ぶ。
って、相手が誰でもどーだっていいよ！
また空気を揺るがす、すんごい音が轟いた。ひゃうっ⁉
「また来る〰〰〰！」
思わず頭を引っ込めた瞬間、衝撃にⅣ号がまた包まれた。
でも、これって……当たってない、よね？　近くの、地面を吹っ飛ばしただけ。上がえぐれて、ちぎれた草があたりに舞っちゃう。
けど、外れてるのに、こんなに揺れるものなの⁉
「も、もうやだ～！　逃げよ～！」

私は、情けないけど戦車の中でそうわめいた。
だって、だってだって！　しょうがないじゃん‼
だけど、それにみんな反対はしなかった。ゆかりんが「戦略的撤退！　撤退です！」と騒いで、華は無我夢中で操縦桿を握ってる。
で、みぽりんは……。
「車長の判断は絶対です！　離脱をっ！　五十鈴さん、斜面を上がるとき横から狙われるとまずいです。ジグザグに走って！」
「は、はい！」
言われたとおりに従う華。ううん、私が命令したとおり？
そうだ。私が、社長なんだもん。
そして、社長の一番のお仕事って——。
「外を見る！」
私は自分の役目を思い出した。そう、恋はつい盲目になりがちだけど……素敵なカレをゲットするにも、周りをよく見なきゃ始まらないもんね！
って、ええええ？　私は次の瞬間、愕然としちゃう。
「もう一台⁉　左からー！」
私は大声で警告したよ！　窓が前にしかついてない操縦席の華を除いて、ゆかりんもみぽりんも、はっと左の方を向く。
さっきの戦車は、逃げるこっちの後ろにいるから、間違いないよ。

そこに、確かに別の戦車が突っ込んできてた。あの背の低いシルエットは……歴女（れきじょ）チームの⁉　ええと、サントツとかいう……。

「Ⅲ号突撃砲F型ですよう！　挟撃（きょうげき）されました⁉」

ゆかりんが叫ぶ。「挟まれたのですか？」と華が焦った。

「ど、どうすればいいのでしょう⁉」

「ええと、あっち！　あっちに逃げよ！」

私はジグザグに走り続ける車内から、びっと真っ直ぐ指さしちゃう。

「聞こえません！」

でも、こっちを向く余裕すらない華から、必死な声が返ってきた。そうだった！

「右斜め前ッ！」

加減をしながら、でも鋭く、私は右のペダルを斜めに蹴（け）る。

それは華（はな）の右肩にも伝わって――ぎゅごごっ！　とⅣ号戦車（よんごうせんしゃ）がジグザグ走行をやめて、右に真っ直ぐ走り出した。

左からと後方から追い込まれてるんだから、こっちしかないわけだけど！

……ダメ。ぜんっぜん、振り切れてないじゃん⁉

斜面を駆け上がって森の中に突っ込んだけど、確かにはっきり、追いかけてくる他の戦車の音が聞こえるもん。

生い茂る木々に視界が悪くなり、姿は見えなくなったものの、二台ともついてきてる！

このままなにもできないまま、追い込まれちゃうの？　私たち！

逃げるので精一杯で、攻撃をする余裕もない。大砲を任されているゆかりんも、シートであたふたするばかり。ううん、大砲が前に向いたままなんだから、今は撃ちようがないのよね。

とにかく、体勢を立て直してから、どーにかするしか！

——だけど。

「待って！」

ふいにみぽりんが、鋭く言った。

「人がいます‼　危ない……！」

えっ。華が慌ててブレーキをかけた。けど、戦車は急に止まれない～！

うわわ！　私たちは斜めになってつんのめる車内で、あわやシートから投げ出されそうになっちゃう！

そのとき私も遅れて、その人影を認識した。

誰⁉　木陰にいたのは、女の子？　たぶん、私たちと同じ大洗女子学園の生徒！　制服のカラーだけは、窓の細い隙間越しにもどうにか見えた。

ただ、びっくりすることが起きちゃう。

……ひょいっ、て今、ジャンプして戦車の上に飛び乗っちゃった⁉

嘘でしょ？　そりゃ戦車はブレーキをかけて、思い切りスピード落としてたけれど！

「ええっ？」

さすがにみぽりんも慌てて、装塡手席の横の壁をまさぐった。そこにはそれぞれの席へ

直接出入りできる扉がついてるんだっけ。
そこをぱかんと押し開けて――「！　あなたはっ」なんて、みぽりんがいっそう驚く。
なに？　よくわかんないけど、また衝撃に車体が揺れて。
「きゃ――っ⁉」
止まりかけたところを、狙い撃ちされてる⁉
「五十鈴さん、走って！」
みぽりんがシートに戻ってきて、真横にいる華に言った。
もちろん華も、「はい！」と応じる。戦車がぐぐっ、とスピードを上げ始めたよ。
そして。
「あの、危ないから中に入ってください！」
うん？　みぽりんが一度、通信席へと戻って、上についてた扉を開けて外に向かってそう呼びかけた。
すると、制服姿の女の子が一人、私たちのいる狭い車内に入ってきたよ。
もちろんさっき、跳び上がってきたコだよね。すごい運動神経だったけど……あれ？
あれれ？
「ふ――……」
くたり。その女の子はみぽりんと入れ替わるように、円い床にくっついた装塡手席にまで這い上がり、だらしなく棒の背もたれに抱きついたよ。
白いカチューシャをつけた、このコって――！

「冷泉さん、大丈夫？」
みぽりんが名前を呼んだ。
そう、冷泉麻子ってゆー、二年生の女子で——って、あのね！
なんで、こんなとこにいるのよ⁉

†

「麻子じゃん！　また授業さぼってたわけっ⁉」
「……沙織か」
私より「なんでこんなとこにいる？」という意外そうな顔で、麻子が気だるく視線を向けてきた。
「え。お友達？」
目を丸くするのは、頭上の扉を閉めて振り返る、みぽりんだったり。
「うん、幼なじみ。小学校からのね」
だから麻子のことは、よーく知ってる。
すごく低血圧なとこも、ね！
「酸素が少ない……ここ」
彼女は背もたれの棒に頭を預け、ぐったりとしてた。さっき華麗に飛び乗ってきたのとは、大違いじゃん！

麻子ったら運動神経もよくて、成績も学年トップなんだけどさ。昔からとにかく、午前中はさっぱりで――。

「冷泉殿と言えば、『午後からの天才』という二つ名を聞いたことがありますが。ほんとに午前中は、低血圧でダメなのですね？」

狭い戦車の中、麻子と隣り合う位置になったゆかりんが、「噂の人物」を前に感心するよ。

まあ麻子ってば、有名人だもんね。

あれ。でも転校してきたばかりのみぽりんが、なんで麻子と顔見知りなの？

なんて思ってたら、みぽりんがぽろりと言った。ああ、なるほどー。

「今朝もつらそうだったけど、冷泉さん……」

「え。みぽりんって……麻子と今日、会ったんだ？」

「うん。ふらふらしてたから、一緒に学校の保健室まで」

だから戦車道の授業に遅刻したのね。私はみぽりんの言葉で、ようやく納得がいく。

「そりゃ遅刻魔の麻子に付き合ってたら、間に合わないってば！」

――なんて会話は、速度を上げた戦車の音で、すぐに掻き消されちゃったけど。

ううん、突然の麻子との遭遇で忘れてたけれど、私たちのんびり話してる場合じゃなくてっ！

ドーン！　ドーン！　また、砲弾の音がした。今度は、二発も！

って、追いかけてくる二台ともが、私たちを狙って撃ってる？

「も、もうやだー!!」
社長席から周りを見ると、隙間から見える外の風景に、確かに二台の戦車があった。
後方右側から……たぶん、バレー部の。んで、後方左からは、背の低いⅢ号突撃なんちゃらを動かす歴女チーム！
「逃げ切れない？　ど、どうすればいいのよー！」
「二輌も相手にするのは、明らかに不利です！」
激しいエンジン音の中、ゆかりんが言う。
「各個撃破に持っていくのがセオリーです、武部殿～！」
「？　各個って、一台ずつ戦わなきゃ、ってこと？」
……だからこの状況で、どうやって!?
だけど、そのとき――必死に周囲を見回していた私の視界に、あるものが飛び込んできた。
それは……。
「っ！　華、そっちじゃないよ！　迂回せずに、そのまま行って！」
私は叫ぶ。でも、操縦席にいる華には聞こえない？
えーい！
「ほい！」
私は左右のペダルを、同時に蹴った。
両肩を叩かれた華は、意味がわからずがくん、と戦車の速度を落としてこっちを仰ぐ。

「な、なんですか？　沙織さんっ」
「だから、真っ直ぐなのー！」
「え。でも……行けないですよ？」
　華が眉をひそめるのも仕方ないよー。だってⅣ号戦車の前方には、急に沼地が広がってたんだもん！
　だから華は戦車を操り、緑の藻だらけの水を避けようとしてたんだけど。
　私は前方、ちょい斜め左あたりを指し示したよ。
「いいから！　針路、あっちにして！　あの橋渡るよ！」
　そこに沼地の向こう岸へと続く、木造の橋があるんだよね。視線が高い位置にいる私からは、ワイヤーで吊られたその姿がよーく見えちゃう。
……たぶん、戦車一台が、ぎりぎり通れそうなヤツ！
「あれなら一台まとめて追いかけてこれないから！　あそこ渡って、先に追いかけてきたのと戦うわよ！　どう？」
　ブレーキがかかる車内で、私は咄嗟の思いつきを披露する。もーそれしかないってば！
　だけど、不安要素はもちろんあって。
「あれですか？　ええと、さすがに古すぎないですか、武部殿！」
「それに、かなり狭いです……。わたくしの腕前で、無事に渡りきれるでしょうか？」
　ゆかりんと華がためらいを見せた。でも、でもでも！

「そんなの、ファーストキスと一緒だよ！　やってみなくちゃわかんないー！」
「わたし、確認してくる！」
え？　ふいにそう告げたのは、みぽりんだよ。
彼女は砲塔横の扉を再び開けて、今度はするりと外に出ちゃう。えええええ？
「今出たら危ないです！　西住殿～！」
「……再装塡には少し時間がかかるから。二輌とも撃ったばかりなら、大丈夫！」
ゆかりんが止めるのも聞かずに、みぽりんたら速度の落ちた戦車から、あっさりと飛び降りた。窓に空いた隙間から、走って行く彼女の姿が見て取れる。
そのみぽりんは、実際に橋の上に立って、ぴょんぴょん跳ねた。あ、強度を確かめてるのかな？
そして、やがて大きくマルをつくった。
行けるってこと、よね？　「はい！」と私の足の下で、華が大きく頷いた。
ゆっくり前へ、って仕草なのかな？　みぽりんは橋の真ん中に立って、片方の手で制しながら、もう片方で手招きした。
華はもちろんそれに従い、速度をかなり落としたまま、戦車を橋へと突っ込ませる。
だけど――。
待って！　とみぽりんが両手で合図をするのと、ものすごい擦れる音がしたのとが同時だった。ワイヤーにぶつかったの？　わ、わわわっ⁉　やがてなんか、切れる音までして……がくん！　って戦車がいきなり傾いた！

「落ちる⁉」

華が慌てた。ゆかりんも必死にシートにしがみつく！

「脱輪ですかー⁉」

「やだーっ！」

私も青ざめるしかないじゃん！　けど、その瞬間——ものすごい衝撃が、私たちを跳ねさせた。

一瞬、なにが起きたのかわからなくなっちゃう！　ううん、当たったんだ！　追いかけてくる戦車の、弾が！

それは、車内のどこもへこんだりしてないから、掠めた程度なのかもしれないけど……あまりのことに視界がぼやけて、息をするのも忘れちゃった！

ゆかりんがシートから、体半分投げ出されてた。逆に棒の背もたれに押しつけられて、麻子が目を白黒させてるし。

そして、華は……。

「五十鈴殿、五十鈴殿～！　しっかりしてください！」

ゆかりんの声で、どうなったのかに私は気付いた。

華は操縦席に座ったまま、のけぞってた。……気を失ってる⁉

誰よりも早くゆかりんが、華の席の真上の扉を押し上げて、外のみぽりんに報告したよ！

「運転者失神！　運転不能ー！　繰り返します、運転不能です‼」

確かに、Ⅳ号戦車はそのまま見事に停車して……って、嘘でしょ⁉
それって、超やばいじゃんっ‼
「衛生兵ー！　……はいないですから、と、とにかく介抱です！」
ゆかりんがなにやら、華のシート脇をいじった。するとがくん、とその背もたれが後ろに倒れる。
気絶した華を、ちょっとでも楽な姿勢にしてあげようと、リクライニングしたんだね。
って、もう無理だよ！
私の頭に、「降参」の二文字が浮かんじゃう。そうだよ、華がこんな状態なのよ？　もう、そうするしか……。
でも、あっ！　私は息を呑まされる。
どうやって降参するの？　だって通信席は今、空席じゃん⁉
みぽりんは外で、ゆかりんは華の様子を必死に見てるし。だから。
「私が、やるしかっ……！」
思わず私は、シートから腰を浮かした。
けど——先に動いたのは、なんと麻子だったり。え、ええ？
でも麻子ったら、空いている通信席には向かわない。「かわって」とだけ告げて、華の体を押しのける。ううん、狭い車内じゃどうしようもなくて、仕方なくそのまま華の膝に

腰掛けた。

そして取り上げるのは、シート横に置かれてた戦車のマニュアル本だったり？

それをぱらぱらめくって、簡単に目を通すと――。

「なんだ、意外に簡単なのだな。……足は、どうにか届くか」

がこんっ、と麻子がレバーを倒した。すると斜めになった戦車がいきなり、バックし始める！　おおお？

「せ、戦車の運転ができるのですか？　冷泉殿！」

「ああ。今、覚えた」

「い、今!?」

ゆかりんが唖然とした。さ、さすがは学年主席ってとこ？　ふえー。

って、その前に！

「でもなんか、後ろに下がってるけど！　麻子ー!?」

「わかってる。これでいい」

「？　えっ」

その意味を、私はすぐに理解する。……戦車の傾きが、もとに戻った！

そっか、一度バックして立て直したのね？

その様子を外から見るみぽりんが、「真っ直ぐ！」とまた手招きするのが、窓の隙間越しに見て取れた。

たぶん、麻子の操縦は見事なんだと思う。Ⅳ号戦車は、狭い橋の上をしっかりと前進し

――みぽりんが安心してか、戦車に取り付いて、戻ってきた。
「操縦手失神って聞いたけど、かわりに誰が……れ、冷泉さん？」
「ああ」
通信席に座ったみぽりんが、隣の操縦席にいる麻子に驚いた。
だけど麻子ったら、親指を一本立てて。
「西住さん、だったか？　今朝の借りは、これで返した」
だって。……な、なんかカッコイイじゃない？
けど、私たちに感心してる余裕はなくて――。
また、ドーン！　と砲弾の音がした。すぐ真横の水面に落ちて、おっきな水しぶきが上がる！　ひゃあ！
もうもうと水蒸気が立ちこめて、私たちの戦車を包んだ。ああっ、また周りが見えなくなっちゃった⁉
「大丈夫、いい煙幕になるよ、これ！　今のうちに……秋山さん、砲塔を回転させて！」
みぽりんが言ったよ。えっ、とゆかりんは一瞬、ぽかんとしちゃうけれど。
「……砲手の出番、というわけですか！　西住殿！」
「うん！　こっちを追いかけて、無防備に直進してきてる一台を、順番に撃つの！　この煙幕が晴れるのはすぐだから、それと同時に！」
「了解！」
ゆかりんがにんまりして、華の側を離れて自分のシートに戻ってくるよ。

すると、なんか……回ってる？

「わ、わっ？　私も？」

モーターの音がして、視界から気絶したままの華や麻子、みぽりんが横に動いた。

ううん。動いてるのはたぶん、私とゆかりんの方だよね！

「ふおおおお、中から見るこの景色、たまりません～！」

興奮するゆかりんが、手元のハンドルを動かしてた。水平についた円盤みたいなそれで、戦車の大砲がついた部分だけ、回してるの？　ううん、円い床とくっついた――私とゆかりん、それとさっきまで麻子のいたシートの、三つの席ごと！

うん、ゆかりんは大砲を、真後ろに向けようとしてるんだね！

すると目に飛び込んできたのは、今にも橋を渡っておいかけてきそうな、背の低い歴女チームのⅢ突で。

「って、向こうも狙ってる感じだよ！　は、早く回って～！」

狙いを付けて！　座ってるしかない私は、ゆかりんにお願いしちゃう。

「旋回速度は、こ、これが限界です！」

ハンドルを操作するゆかりんが訴える。わ、わかってるけど！

「撃たれる前に撃っちゃってよ～！」

「慌てないで、秋山さん！」

でも、みぽりんが鋭く制した。装塡手を兼ねてる彼女は通信席から這い出てきて、狭い戦車内を動いて、ゆかりんへと手を伸ばした。

両手でみぽりんが持ってきたのは、うわ！　でっかい砲弾だよ！

「装填は……そっか、さっき秋山さんが一発入れてあるから。じゃあこれは次弾で。発射用意！」

きびきびとみぽりんが指示を出す。こんなときでも落ち着いてるのは、やっぱ経験豊富だから？

「この距離なら、砲はほぼ水平で十分！　左右だけきっちり合わせて！」

「合わせました！　行けます！」

ゆかりんがハンドルの動きを戻して、唸るモーターを止めた。

と、同時に。

「撃て――――っ！」

やかましい戦車のエンジン音に負けない声で、ゆかりんが吼えた。ひゃあっ？

でも直後、ばっ！　と閃光が窓の外を塗りつぶして――もっとすごい轟音が、私たちを包み込んじゃう。

――きーん、ってなった！　耳が！　戦車が一度、沈み込むように大きく揺れたよ！

あまりのことに気絶していた華さえも、飛び起きるくらい。そりゃ、寝てられないよね、これ！

「すごっ……」

もうもうと、車内に白煙が立ちこめた。ただ、それは小うるさく回りっぱなしだった、換気扇を通って吐き出される。

がちゃんっ！　って激しい金属音が、たぶん聞こえた。まだ耳鳴りがやまないからわかんないけど……ゆかりんのシートの真横にぶら下がってた、大きな金属のカゴの中に、金属の筒みたいなのが吐き出された。

これ、焦げてる？　さっきの弾の、一部よね？　あ、先っぽのとがったとこだけが飛び出る、ってこと？

私は自然と、窓の外へと目をやった。

水しぶきのもやなんて、もう完全に吹き飛んじゃってた。むしろ空気が、熱で揺らぐ？　そんな視界越しでも、追いかけてきていたⅢ突（さんとつ）の姿がよく見えたよ。

……うん？　白い旗がなんか、上がってる？

「も、もしかしてやっつけたの？　当たった!?」

ようやくじーんとした耳のしびれも取れて、私はみんなに報告した。一緒に確認するのは、大砲の照準から外を見るゆかりんだよ。

「白旗です！　命中です！　目標車輌（しゃりょう）、行動不能！」

「今のが、こちらの砲撃ですか……？」

麻子（まこ）と一緒に操縦席に座る華が、うっとりしてた。

「なんだか……気持ちいいです。すごく」

「今度は八九式！　秋山さん！」

みぽりんだけが緊張感のある声で、がしゃんっ、と持っていた砲弾を装填した。

わ！　そーだよ、まだもう一台、別の戦車がいるんだった！

「は、はい！」
ゆかりんが慌ててハンドルを握り直した。
そこにみぽりんが手を添えて、微調整の手助けをする。
「二発目は、もともと自重で下がり気味の砲身が、熱膨張して真っ直ぐになるんです！　だから少しだけ、相手より下を狙わないと！」
「！　さすがは西住殿！　……狙い、下側につけました！」
「じゃあ、撃って！」
「はい！」
また、轟音と白煙が車内に満ちたよ。
でも私たちも、一度目よりは慣れたもん。咄嗟に耳を塞ぐこと、忘れないよ！
そして……当たった！　ハチキュー式――バレー部の戦車から、白旗がぴょこんっ、と上がる。やったあ！
だけど、喜んでいられたのも束の間で。
「今度は前から来てるぞ！」
華の太ももに座る麻子が、前を睨んで警告してきた。
え？　後ろ向きになってる私やゆかりんが、振り向いて確認する。
Ⅳ号戦車の進む橋の、その先。沼の対岸にひょっこりと姿を見せた、あれは……！
「３８ｔです！」
ゆかりんが言ったよ。……ってことは。

「生徒会ー！　あれ、生徒会の戦車だよ！」
「再装塡します！　砲手は、すぐに砲身を０時位置に反転！」
新しい弾をみぽりんが取りに行って、ゆかりんが「はい！」とハンドルを動かした。
「が、がんばれゆかりん！」
焦ってもしょうがないんだけど、私は手に汗握っちゃう。ゆかりんと一緒に戦車内で回りながら、生徒会の戦車、３８ｔとかいうのついを睨んだ。
あっちは……まだ撃ってこない。かわりに私たちの方へと、真正面から突っ込んでくる！　こっちが大砲を向けるまで、攻撃できないってわかってて、近づいてきてる？
つまり絶対に外さない距離から、当てようとしてて――。
「早く、早くうー！」
「秋山さん、次は二発目とは逆に、熱がこもりすぎて砲身が垂れるの！　それどころか砲弾の飛び方にもばらけ具合が出ちゃうから……気を付けて！　とりあえず照準は、今度は少し上気味に！」
そう言って、がちゃんっ！　とみぽりんが弾を込めた。
その頃にはようやく、ゆかりんが大砲を正面に向けきって、狙いを付けて！
「撃てッ‼」
みぽりんが合図した。
耳を震わす音が、車内をびりびり震わせる。でも、それは……二つ？
向こうも同時に撃ってきたの⁉　窓の隙間からの視界に、発射の直前、もう一つの炎が

見えた。

生徒会の戦車の、攻撃⁉　思わず首をすくめたけれど、あれ？　……Ⅳ号戦車が衝撃で、激しく揺さぶられはしなくって。

あ、当たらなかったの？

「相手は？」

社長の私は必死に目を凝らし、正面を見直した。

こっちの砲撃の煙が晴れて――そこにはまだ、生徒会の戦車がいるじゃん！

でも、あっ！　その上には！

「白旗⁉　白旗よー！　みんな！」

私はゆかりりんにみぽりりん、華と、麻子に報告した。

やった、勝ったんだね！　肩で息をするゆかりりんが、「直撃です！」と外を確認して笑顔になったよ。

「ふー……。やれやれだな」

華は相変わらずうっとりしていて、その彼女の胸に麻子が、こてんと頭をくっつけた。

「まだ！　これで三輌だから……終わってない！」

けど、みぽりんが一人、そう告げて通信機の前に戻っちゃう。えっ？

「あ、そっか。全部で戦車は五台いるから」

私たちのⅣ号を除いて、あと一台残ってる？　私は大慌てで、戦車の外を見回した。

「これだけの撃ち合いをしたんだから、こっちの位置はばればれなはず、なの！」

みぽりんが戦車から出るとき放り投げた、ヘッドホンをつけ直す。
あ、もしかして通話の内容で、位置を確認できるのかな？
――なんて思っていたら、「えっ」と急にみぽりんが身じろぎした。
なに？
「どしたの、みぽりん？」
「……。終わり、みたい」
「へ？」
最初、みぽりんがなにを言ってるのか、他の誰もわからなかった。戦車の音がやかましくてよく聞こえなかったし。私もゆかりんも華も、麻子までもがぽかんとする。
あの、とみぽりんがちょっとためらってから。
「自滅した、って教官から連絡が。残った、一年生のM3戦車は」
「えええ？　な、なにそれ？」
「急反転した際に履帯が切れて、走行不能になったたって」
「まあ」
みぽりんの報告に、華が口を手で押さえた。
「やはり、いきなり動くのはダメなのですね！」
う～ん、まあ、なんでもいいけどさ。
ただ……つまり、これって。
「私たち、勝っちゃった⁉」

きゅらきゅらきゅらきゅらきゅら、ずごごごご。
私たちを乗せて、Ⅳ号戦車(よんごうせんしゃ)がただ一台、学校のグラウンドに戻ってくる。
他の戦車は動けないくらいダメージを受けたから、後で学校の自動車部が、回収車を派遣するんだって。
だからグラウンドの隅の、倉庫前には――先に待ってた、蝶野(ちょうの)教官とヒトマル式戦車がいるのみだよ。
戦車を降りた他の生徒たちは、息を切らせて走ってきてた。
「私たち、勝っちゃったんだねー」
戦車の中でちょっと申し訳なく思いながらも、私はあんまり実感できない。
ううん、車内の他のみんなだって、そうかも。
勝ったというか、他のチームが脱落した、って感じだしね～。
でも、勝ち負けはともかく。
「これが……戦車道(せんしゃどう)なんだね」
Ⅳ号戦車が停車して、私たちはそれぞれ、手近な扉を押し開けて外に出た。
戦車って脱出用に、一つのシートごとに出入り口がつくられてるのよね。
なんて、今日はもう、初体験なことばっかり！

それはきっと、たまたま勝っちゃった私たちだけじゃなくて。
――集まってきた生徒たちは、煙のすすで顔や制服が汚れてた。うん、私たちもだけどさ。
って、こんなのでモテるの？　ほんとに？
『みんなグッジョブ、ベリーナイス‼』
だけどヒトマル式戦車の上から、メガホンを手に教官がベタ褒めしたよ。ええっ？
『初めてでこれだけガンガン動かせれば、上出来よ！　特に、Ⅳ号戦車チーム！　ちゃんと、動き見てたわよ』
ぱちん、と蝶野（ちょうの）教官はウィンクまでする。
『最初こそ、うっかり奇襲に遭っちゃったけれど……逃走する際、砲撃を受けないようジグザグに走ったのは、なかなかだったわ。視界の悪い戦車でのスラローム走行って、意外に難しいのよね』
はっ、と頬（ほお）を紅潮させるのは、最初に操縦してた華（はな）だよ。
『橋を渡ったときはどうなることかと思ったけど、そのまま砲を反転させて一発で当てたのも、見事よ。あれが逆転の布石になったわね！』
「い、いやー。そんなことは」
砲手のゆかりんが照れた。
『あと、橋の上から動きが変わったわね？　渡りっぷりはすばらしかったわ！』
二番目の操縦手、麻子（まこ）は素っ気ない様子で、私の後ろに隠れてたけど。

『そして二輌、三輌と連続の撃破。それは車長を中心として、しっかりとそれぞれが機能した証ね！』

え、私？

……そりゃあ、まあ。社長ですから！　えっへん。

だけど一番の立役者は、もちろん。

『やっぱり、西住流の力、といったところかしら？』

「えっ」

唐突に名指しされ、みぽりんは戸惑った顔になった。

かわりに、「ほう」と頷くのは、横に並んでいた生徒会の面々だったり。

「やはり西住みほに戦車道を履修させたのは、正しかったですね、会長」

「作戦通りだね～」

広報の河嶋先輩が片眼鏡を直し、会長さんがにやりとする。副会長の小山先輩は、おっきな胸を揺らしてた。

作戦？　まあ確かに、みぽりんってば戦車道の才能、あるのよね！

『さて、今回の訓練はここまでとします。どのみち四輌の戦車を再整備しなければ、動かせないしね』

と、教官が話を区切って、メガホンを河嶋先輩に返した。

そして整列した私たちの前で、背筋を伸ばしてきびきびとかかとを合わせる。

「あとは日々、走行訓練と砲撃訓練に励むように。今日わかったと思うけれど、走って撃つ、が基本よ？　またちょくちょく指導にはくるつもりだけど、わからないことがあったらいつでもメールしてね？　あ、メアドは」
「こちらで受講者に、配布しておきます」
河嶋先輩がぴしゃりと言った。お願い、と蝶野教官が目配せして。
「さーてっ、締めはまた、礼よ？　最初に言ったでしょ、戦車道は礼に始まり、礼に終わるって。一同、礼！」
「「「ありがとうございました！」」」
敬礼した教官に向かって、私たちは誰もがしゃんとして、頭を下げる。
……うーん、やっぱりカッコイイよね。蝶野教官って！

「とりあえず生徒会特権で、合宿所の大浴場とランドリー室を押さえた！」
教官が戦車に乗って帰ってすぐに、河嶋先輩がそう切り出した。
「ご苦労〜」
隣で会長さんがねぎらいつつ、干しイモを齧りながら、真っ先に歩き出して。
「ってことで、みんなでついでに、親睦を深めよっかー」
——もちろん私たちの誰も、逆らわない。だって、すごく汚れちゃったもんね。
いつもきれいにしておくのも、乙女のたしなみだし！

グラウンドから直結する、体育館脇の講堂——。その地下が、体育会系のクラブが事前に申請して使える、合宿施設となってるのよね。そこに私たちはぞろぞろと、興奮冷めやらぬままにやってくる。
そういえば部活に入ってないから私、ここにくるの初めてだっけ。
「……って、すっごい設備じゃん！」
「わあ。大洗女子学園に、こんなところがあったんですね」
転校生のみぽりんも、目を丸くしてる。だって……超きれいで、広いんだもん！
地下につくられた合宿施設は、なんだかまるで旅館みたい！
私たちは大浴場へと直行したけど、通ってきた通路脇には、畳の敷かれた部屋がいくつもあったし。それに、お風呂！　お風呂がすごーい！
コインランドリーみたく大型の洗濯機が並ぶ、脱衣所にも驚いたけど、ガラス戸の向こうはまさに「スーパー銭湯」って感じ！
大きな大浴槽が一つと、その横には檜風呂が別にあるし。んで、他にも打たせ湯からジャグジーから、一人用のジェットバスまでなぜかあるよ？
あ、向こうにあるドアは、ミストサウナ室ぅ⁉
もちろん私たちのテンションは、嫌でも上がるよね！
ぱぱっと汚れた制服を、下着も一緒にドラム式洗濯機に放り込んで——備品のタオルを一枚持って、さあレッツお風呂タイム！
「ふう～、気持ちいいー！」

もちろん湯船に浸かる前に、洗い場のシャワーで体をぴかぴかにするよ。ふわふわの髪も、シャンプーとリンスでしっかりとね！
ただ、なんだろ。……シャワーのお湯より、なんだか体が火照ってた。
そういえば、まだ心臓がどきどきしてる？
「……すごかったよね、戦車道って」
ね？　私は洗い場の左右にいる、華やみぽりんに言った。
「なんか、告白されるよりどきどきしたかも！」
「あら。されたこと、ありましたっけ？」
うっ。え、えーっと。
大洗女子学園の中等部から一緒の華が、長い髪をまとめながら目をぱちくり。
「お、お父さんはいつも私のこと、大好きだって言ってるもん！　電話で！」
「そういえば毎日かけてくるのでしたっけ、沙織さんのお父様は」
「うん、心配性なのよねー。私にいつカレができるかって。もー。それはむしろ、歓迎すべきことじゃない？」
「ふふ。いいお父さんだね」
体を泡だらけにしたみぽりんが、にっこりと微笑んだ。
いや、そういう話はよくってね？
「今日は大変、充実した日でした！」



うわ？　って、誰？　……ああ、癖毛が濡れて別人みたいに見えちゃったけど、ゆかりん？

「初めて戦車砲も撃てましたし、感無量です！　あれはクセになりますよ～！」

「確かに、すごくわくわくしました」

華がうっとりした顔になる。

うん、だよねー。私なんかいきなり社長で、あたふたさせられっぱなしだったけどさ。

「そーだ。やっぱり社長ってさ、次からはみぽりんがやってよ～」

「え？」

意外だったのか、みぽりんが黄色い桶を持ったまま固まった。

けど、そう思ってたのはどうやら私だけじゃなくて。

「そうですね。やはりわたくしたちでは戦車のこと、よくわかりませんし」

「同感です！　西住殿なら、頼りになりますしー」

華とゆかりんが同意した。

こーん！　みぽりんが桶をうっかり落として、大浴場に大きな音が響き渡る。

他のみんなの視線が集まり、みぽりんがいっそうあわあわした。

「わ、わたしがっ？　そんな、わたしなんてぜんぜん、頼りになんか……！」

「そんなことないよ！　みぽりん、すっごく的確に指示出してくれたじゃん～」

「ええ。よろしくお願いします」

ぺこり。華が隣で頭を下げた。
「よろしくお願いいたします！」
ゆかりんもお願いする。もちろん、私だって！
「よろしく！」
「……は、はいっ。こちらこそ……！」
瞳をうるうるさせて、みぽりんが何度も頷いた。やったあ！
——んじゃあ、あとの問題は。
「で、私はどうしよっか？　みぽりんと入れ替わって、通信手とか？」
「あと、装塡手というのも空いていますよね？　わたくしたちの戦車だと」
あ、そっかそっか！　華の言葉で、みぽりんが兼任してた役割を思い出した。
「どっちが私に向いてるかな～」
「えーと……ほら。武部さんは誰とでも仲良く話せるから、通信手はどう？」
そう言ったのはみぽりんだよ。え、そーかな？
「うん、それいいかも！　メール打つの私、超早いしね！　カレを一秒でも待たさず返信できるように、鍛えてるんだ～」
「それは、関係ないのでは」
華がなぜか苦笑する。と、彼女はこほん、と咳払いして。
「あの、それと。……わたくしは、砲手をやってもいいですか？」
ちらり、とゆかりんを見た。へ？

「華が、砲手ぅ？」
「あのじんじんしびれた感じが忘れられなくて……。それに、なんだか、私の求めてた強い自分になれそうなんです」
いいですか？　華は訴えるような目をつくった。う、これは本気だ～！
「じゃあ、ワタシは装塡手をやります！　今回砲手は楽しんじゃいましたし、いろいろやってみたいんですよー」
　にこにこしながらゆかりんが、あっさりと了承した。
　華はぱあっ、と笑顔になって。
「ありがとうございます！」
「じゃあ、あとは……操縦手？」
　残りのポジションを指折りながら、みぽりんが数えた。
　それは、たぶん決まってるよね⁉　みんな、自然と麻子を捜しちゃう。
　……いたよ！　飛び込み参加の形になっちゃった麻子だけど、一緒にすすだらけになったから、当然大浴場にやってきてて。
　って、なんか隅っこにある、一人用のジェットバスに入ってたけど……。
　その麻子ったら、私たちと目が合うと――湯船からさっと出た。タオルを巻いてそそくさと、ミストサウナ室へと向かおうとする。
　ちょっと待ったー！
「麻子！　ねえ、操縦手お願ーい！」

「……なにを言っている」
ぎくり、と一度足を止めてから、麻子がぶんぶん首を振った。
「そもそもう、選択科目は書道にしている」
「え〜〜〜〜」
「れ、冷泉(れいぜい)さん！　冷泉さんがいてくれると、助かります！」
食い下がったのはなんと、みぽりんだったり。
けれど。
「悪いが、無理」
麻子ったらほんと、素っ気ないんだから！
「それに今更、選択科目の変更はできないだろうし。残念だな」
「ああ、それなら無問題だよ〜」
と、ふいに話に割り込んできたのは、ツインテールをほどいた生徒会長だった。
タオルも巻かずに腕組み一つで、なぜか檜風呂(ひのきぶろ)の縁の上で、仁王立ちしてた。……それでも会長さんはちっちゃいから、ぜんぜん私たちを見下ろせてないんだけどね？
だけどかまわず堂々と、会長さんは麻子(まこ)を見やって。
「受講登録してない顔が一人いるから気になってたんだけど、そっか。途中でⅣ号戦車(よんごうせんしゃ)の動きが変わったのは、きみが操縦したからなのねー。でも、ぜんっぜんオッケー！　そんなもん生徒会から手を回して、あっさり変更させたげるから」
「な、なに？」

麻子がさすがに動揺した。文句を言おうと、口を開きかけたけれど。
「小山ー、そーゆーことだから」
「あ、はい。後で処理しておきますね」
ばよん。大きな胸を弾ませて、檜風呂で半身浴してた、副会長の小山先輩が返事する。
……うっわ、なに、あれ。お、大きすぎない⁉　お風呂場で見る裸の副会長ときたら……その。なんか、も、ものすごいよ！
麻子もそのボリュームに気圧され、なにも言えなくなったみたい。そ、そうよね。無理よね、あんなの……。
……わ、私くらいのサイズが、男子にはちょうどいいとは思うんだけどね⁉
それでも麻子ったら、どうにか気を取り直したみたいで。
「やる理由がない」
素っ気なくそう告げて、ミストサウナ室のドアに手をかけた。
「冷泉さん！」
そこに華も声をかける。
「お願いします！　あなたの運転は……わたくしと違って、見事でした！」
だけど、麻子は止まらない。ばたん、と中に入ってドアを閉めた。
あ〜〜〜〜〜、もう────！
「麻子！　遅刻ばっかりで単位足りてないじゃん！」
髪をきゅっ、てタオルでまとめて気合いを入れて、私が言った。そーだよ、勉強はでき

る麻子だけど、単位数はぎりぎりだったはずなのよね。
「戦車道取れば、いろいろ特典あるのよ？　えーと、えーと……」
「単位は三倍だぞ、冷泉麻子！」
ぴしゃり、とそう補足したのは檜風呂で片眼鏡を曇らせた、河嶋先輩！
「あと、会長の決定に従わない場合は……どうなるかわかっているな？」
……。ど、どうなるんだろ？
って、そんなことより、そもそも！
「このままじゃ留年しちゃうよ、麻子！　私のこと、沙織先輩って呼ぶんだよ？」
それでいいの？　私は小学校からの幼なじみに、そう訴えかけた。
すると――。
「……それは、嫌だ」
しばらくしてミストサウナ室のドアが開き、ちょっと上気した顔の麻子が出てきた。
「わかった、やろう。戦車道。やるしかないのだろ」
もしかして、けっこうヤケになってる？　それって……私のこと、先輩って呼びたくないから？　もー。
でもみぽりんはぱあっ、て表情が明るくなり――華も微笑み、ゆかりんも「わあ！」と騒いだよ。
「これで我が隊は安泰ですね！　改めて、よろしくお願いします！　冷泉殿～」

確かに、五人そろったんだし。麻子の操縦は確かだし、心強いったらないよー。

でも……。

「私って……役に立てるのかなあ？」
その日の夜。寮の自分の部屋に戻って、私は寝る前にケータイをいじってた。
ううん、いつもなら乙女のお肌に悪いから、なるべく夜更かしはしないんだけどさ。
……つい、夜食がわりに買い置きのお菓子を食べちゃうし？
だ、大丈夫。「五分できれいになれるヨガ」は、かかしてないよ～。
ただ、でも。どうしても調べておきたかったんだよね。
パジャマ姿で部屋のベッドに寝転んで、コンタクトレンズ外して眼鏡をかけて、仰向けでネット検索するのは――「通信手について」だよ。
「通信手って、昔は暗号の解読とかやってたんだ？　でも戦車道だと、ラジオみたいに周波数を合わせるだけで、仲間とだけ連絡が取れちゃうみたいだし」
その周波数は、変更しちゃうと仲間と通信できなくなるから、別にいじる必要がないのよね。ってゆーか、むしろ、いじっちゃダメみたい？
「……じゃあ私、なにをすればいーんだろ」
思い出すのは戦車内での、みぽりんの姿だけど。
あれはちょっと違う気がするー。それに、あんなにきびきび判断して動くなんて、きっと私にはできっこないし。うーん。

「やるからには、みんなの役に立ちたいのよね」
ごろん。私は寝返りを打って、うつ伏せになった。
どうしよう？
って、まずなにをどうすればいいのかさえ、わからないのよねー。
やっぱりみぽりんに、いろいろ訊いた方が早いのかな。
「あ……そーだよ」
そういえば。私はふと、あることを思い出した。
ケータイの画面に、一通の受信メールを表示させる。それは今日、生徒会から届いたもの。
あの蝶野教官のメアドが載った、一斉送信メールだよ。
よーし！
「ぴきーん！　ときたら即行動、だもんね。恋も！　ええと……」
夜分おそれいります、本日お世話になりました、大洗女子学園二年の武部です——っと。
私は素早く文章を打って、「通信手ってなにすればいいですか？」メールを送った。
うん、これでオッケー！
さーて、じゃあゆっくり寝て、明日は……。
なんて思いながら眼鏡を外して、部屋の明かりを消すリモコンに手を伸ばそうとしたとき。

「⁉」
へ？　ベッドのヘッドボードに置いたケータイが、激しく振動を始めた。電話がきたことを示す、長めのバイブ？
私はもちろんリモコンのかわりに、ピンクのケータイを掴み取る。誰だろう？　華？　それとも、みぽりん？　眼鏡やコンタクトなしだと、近づけないとわかんなくて……って、知らない番号じゃん。
「はい、もしもし！」
じゃあ見知らぬイケメンの可能性も、あるよね？
『武部さん？　特別講師の、蝶野です』
「！　あっ、は、はい！」
教官だ！　私はベッドの上で跳ね起きて、そのままなぜか正座をしちゃった。あはは。
『さっきのメール、読んだわよ～。で、返信するより電話の方が手っ取り早いから、かけちゃった。生徒会からみんなの名簿ももらってたし』
「あ、そうなんですか？」
『それで……通信手について、よね』
「はい」
『そんなに難しく考えなくてもいいわよ？　戦車がなぜ、一人で動かせないかわかる？』
「？　え、えーっと」
わかんない。私は答えに困った。

『やることが多すぎて、一人だとてんてこまいになるからよ。だから、ダーッと撃つ人！　ドババババって操縦する人！　ビシビシっと命令する人！　って具合に、役割を単純化したの。要は、目と頭脳を車長が。腕を砲手、足を操縦手、といった具合ね？』

「あ……」

『基本はこの三人。そして装塡手は、砲手を助けるもう一つの腕、って考えればいいわ。で、通信手だけれど』

「つ、通信手は？」

『……耳、ね』

「耳？」

『そう、耳に徹するの。戦車の一部として。……いい？　車長は目で、見える範囲の敵や味方の動きを把握するわ。でも、それ以外は？』

「えっ」

『戦況全体がどうなっているのか把握できるのは、通信手しかいないの。だからといって、判断する必要はないわ！　ぱーっと耳に入ってきた情報を、きちんと車長にぺぺっ、と流すの。正確にね。だって耳が聞き間違いなんかしたら、大変でしょ？』

「な、なるほど～」

『まあその正確に、ってのがけっこう難しいんだけれどね。なんにでも言えることだけど、戦車道では自分流のやり方を見つけることが大事よ。みんなそれぞれ、持ってるものが違うんだから』

「自分、なりの？」
『そして、「あきらめないこと、どんな状況でも逃げ出さないこと」よ』
――その言葉って、みぽりんのお姉さんの？
ふふ、とケータイの向こうで教官が笑ったのがわかった。
『大丈夫。初めて戦車を動かした日に、質問メールしてくるだけの気持ちがあれば、できるわよ。きっと』
じゃあ、お休みなさい。そう告げて、教官が電話を切った。
私は、しばらくベッドの上で正座したまま、ケータイを握りしめてた。
耳になる？　私にできる、やり方で？
ようし。いろいろ、やってみようじゃん！
「って、あ、足しびれたよ～！」
ぼすん！　私は勢いよく立ち上がろうとして、そのまま枕に沈んじゃったけどね。
……ううう。

†

私のやり方。
うん、ちょっと思いついたことがあるのよね。
だから次の日、放課後に――チームのみんなを誘ってセーラー服のまま、学園からほど

近いホームセンターにやってきたよ！
「なんでここなんだ……」
カートをからから押しながら、麻子が言う。
ですね、と一緒に手伝うゆかりんが同意した。
「てっきり、戦車道ショップへと行くのかと～」
「だって、もうちょっと乗り心地よくしたいじゃん？」
私は笑って、真っ先にお目当てのコーナーへと向かった。
そこは……じゃーん！　クッションコーナー！
ここ、前から目を付けてたのよね～。だって奥の棚一面が、全部クッションだらけなんだよ？
わあっ、てみんなもつい見とれる。へへーん。
「ね、種類も豊富でしょ？　それに、けっこうお安いしー。……やりくり上手な女の子って、いいお嫁さんになるよね？　よね？」
「えっ、クッション？」
きょとん、とするのはみぽりんだった。
でも、他のみんなは「なるほど！」って、すぐに納得してくれて。
「戦車の座面に、クッションを敷くのですね？」
華が頷く。そーそー！
「だって、乗ってるとお尻痛くなっちゃうんだもん」

「え、えええええ？」
けど、やっぱりみぽりんがびっくりしてる。あれ？
「？　ダメなの、みぽりん？」
「え、ええと……ダメじゃない、けど。戦車にクッション持ち込んだ選手、見たことないから……」
へえー、そうなんだ。なんでだろ？
「みんなもやればいいのにね？　あ、これ、かわいくない？」
ほらほら。私はハート型のクッションを思わず手に取った。
その横の段にあった、花柄のクッションに目が行くのは、華だよ。
「これもかわいいですね。あと、シンプルな座布団もいいかもしれません」
「わ！　こっちにカモ柄のがあります！　あっちには、白黒の都市迷彩仕様も！」
ゆかりんが、まだら模様のを見つけて興奮する。
「猫……」
いつの間にか麻子は、猫型のクッションを抱きしめてた。
「猫はいい。いつでも好きなときに、好きなだけ眠れて」
そんな理由？　まあ麻子らしいっちゃそうだけどさ。
さて、私は他にもチェックするものがあって――。
「あとは、100円ショップとかの方が安いかなあ？　でもスリッパとか、こっちで買う方がデキはいいのよね～」

「……スリッパ？　スリッパって、なに？」
みぽりんが食い入るように見つめてきた。うん？
「あのね、土足厳禁にしない？　戦車の中さー」
「え……」
「だって、汚れちゃうじゃない。ね？」
「いや、土禁はやりすぎだ」
言葉を失うみぽりんにかわって、麻子が呟く。え〜〜〜〜？
「スリッパだと、ペダルを踏むとき、滑る。たぶん」
あ、そういうこと？　確かに……操縦手の麻子が言うんだから、そうなのね。
「ふーん。そっか、ペダルとかハンドルとかレバーとか、そこに関係するとこはいじれないんだね」
ということは、逆に。
「じゃあさ、色とか塗り替えちゃおっか？」
これなら問題ないよね！　私はみんなに提案する。
はうっ、となぜだかみぽりんが、息を詰まらせちゃったけれど。
「ダメかな？　ピンクとか、スワロフスキーでデコったりとか、かわいいと思うんだ〜」
「だ、ダメです！　絶対に！」
全力で首を振って否定したのは、ゆかりんだよ。
「戦車はあの質実剛健な、迷彩色がいいんですから！」

「そ、そう？　うーん、じゃあやっぱ、やるなら中か～」
「……あ、芳香剤とか置きません？　お花の香りの」
華がとってもいいことを提案する。うん、そっち方向かも！
なら、私は。
「鏡とかも欲しいよね～。外に出るときに髪とか身だしなみとか、ぱぱっと直すのに！
他には、ドライヤーとか使えないかな？　コンセント、ついてたっけ？」
「ない、よ」
戦車に詳しいみぽりんが、ぽつりと言う。えー、ないの？
「コンセントないんだ？　あったら、ケータイの充電もできたのにな～」
けっこう不便なのね、戦車って。ま、いいや。
――足りないところは自分たちなりに、補うしかないってね！

結局、けっこういろいろ買っちゃった！
その足で私たちは、買い物袋をひっさげて、一度学校へ戻ることにした。
もうすっかり日も暮れて、学園空母の街並みは、茜色から紺色に染まってく。そろそろ校舎にも施錠される頃合いかな？
でも、体育会系クラブのために、グラウンドはまだ開放されてるのよね。
そして今日は戦車道こそなかったけど、昨日やられた戦車たちの整備で、倉庫もたぶん開いてるはず――。

そう思ったから私たち五人は、荷物だけでも置いてから帰ろうと、やってきたわけなんだけど。……わ、わっ？
「みんな⁉　って、なにこれー！」
グラウンド奥の倉庫へと、歩足を踏み入れると、そこはとんでもないことになっちゃってた！
どうやら整備の方は、とっくに終わっていたようだけれど。かわりに戦車に取り付いていたのは、他の戦車道受講者たち。今日は戦車道、お休みだったはずなのに？
——その理由はすぐわかった。
たぶん、私たちと同じなのよね。だって……。
「おや。Ⅳ号戦車チームも来たのかー。どうだ、派手だろう！」
えっへん！　と38t戦車の上に仁王立ちするのは、体操服姿の生徒会長、角谷先輩。
だけど私たちの目が釘付けになるのは、変わり果てた戦車の方で——。
「き、金ぴか⁉」
みぽりんが絶句した。す、すごいよね⁉
そう、以前は無骨なカラーだった38tは、金色に塗装されてたの！　倉庫内の照明を、なんかきらきら弾いてるよ？
砲塔の横にはでっかく、大洗女子学園の校章まで描かれてるし！
ううん。それは、生徒会チームの戦車だけじゃなくって。
「やっぱピンクだよねー」

「かわいー！」

空のペンキ缶が転がる中、ジャージ姿の一年生たちが、ピンクに塗った背の高い戦車を見上げてた。あ、いいな～！

さらにバレー部チームの戦車は……うん、すっごくわかりやすいことになってる。

「これでアピールは万全！」

ふい～、って汗を拭って、バレー部の人がハケを置く。

色はもとのカラーだったけど。足回りの真横についた鉄板とかに、でっかく『バレー部復活！』の文字が書かれてた。

あとはバレーボールのイラストまで。……いつもバレーのユニフォーム着てるし、ほんとブレないなあ。復活できるといいね！

で、最後は歴女チームの戦車だけど。

……派手。超、派手だよ!?

「いいねー。かっこよくなったね！」

「これが我々の、砂漠の狐だー！」

真っ赤に塗られた戦車の前で、いつもどおりな妙ちくりんな恰好をした四人組が、最後にノボリをつけてく。

風林火山とか、新撰組の羽織模様とか、うひー！

背が低い戦車なのに、ものすごく目立つよ！　うん。

「私たちも色塗り替えればよかったじゃーん」

ねえ？　って私はつい唇をとがらせた。
だけど――「あああああっ」ってゆかりんが、癖毛の頭を抱える。
「さ、38tが！　Ⅲ突が、M3が八九式が……なにかまるで別のものに～～～～！」
あー、戦車ラブのゆかりんとしては、許せないみたい。
「あんまりですよね⁉」
なんて、みぽりんをすがるように見つめちゃうし。
でも、そのみぽりんの方はというと。
「……ふふ」
最初は呆然としてたんだけど、ふいに私たちに笑顔を見せた。
「に、西住殿？」
「だって、戦車をこんなふうにしちゃうなんて。考えられないけど……でも、なんか楽しいね。こんなの、アリなんだ」
けど、急にはっとした顔になった。ん？
「楽しい？　わたし、そんなこと……」
「？　みほさん、どうかしました？」
華が訊いた。うん、とみぽりんが頷いて。
「わたし、戦車を楽しいなんて思ったの、たぶん初めてで……」
「あれ？　そーなの？」

意外。私はきょとんとした。

……ま、そのあたりはいろいろあるんだろうけどね。

「いーじゃんいーじゃん、楽しもうよ！　ね、麻子？」

ほら。と、私は一緒に買い物袋を持っていた、麻子を誘う。

もちろん足を向けるのは、私たちのⅣ号戦車！　そのあちこちにある扉から、私たち五人は中に入ってく。

私は、今度は通信手だから……左前方の席だよね。

「あれ？　麻子～。そっちに私のクッション、入ってるぅ？」

「ない。こっちは猫クッションと、芳香剤と一輪挿しだ」

「冷泉さん、その一輪挿しをくださいな。砲手席の前に、この造花を飾りますので」

「こっちには、鏡ですかね。……なんだかすごいことになってきました」

「ほ、ほんとだね。あれ？　武部さん？」



わいわいといろんなものを取り付けていく中、ふいに私はみぽりんに見つかった。
うっ。あー、もうばれた？
「それ、ホワイトボード？　そんなの買ってたっけ」
「えへへ。実はこっそりと、１００円ショップでね？」
他にも蛍光カラーのマグネットとかを出してきて、私はホワイトボードにくっつけた。
それを通信機の側に、両面テープでしっかりと固定して。
「ほら、通信手って、戦車の耳なわけでしょ？　仲間といろいろ話をして、敵の位置を正確に掴まなきゃいけなくて……んー、でもさあ。そういうときにメモとかできればいいんだけど、戦車の中って暗いじゃん？　だから」
これで、こう。私はみんなの前で、光るマグネットをしゅっ、と動かす。
「うん、これならちゃんと見えるよね！　で、たとえば私たちの戦車を緑色で表して、えーと。他の仲間の戦車は、ピンクに黄色とか使ってさ。ほら」
「！　ホワイトボードをフィールドに見立てて、位置情報をマグネットで記すのですね！」
おおっ、とゆかりんが手のひらを打った。そーゆーこと～！
「まあ私、数学とか苦手だからさ、こうやって大ざっぱな方がわかりやすいかなーって。……あ、でもでも、家計簿くらいはつけられるよ～」
「武部さん。すごい……！」

え？　みぽりんがなんだか、感激してた。
「これ、普通に有効な手段だよ。戦車全体を指揮するときに、こうやってコマを動かして、戦況を分析したりしたの！」
「へっ？　そ、そーなんだ？」
ぜんっぜん知らなかったけど。
私は私にできそうなこと、やっただけだしね。
「知ってます知ってます！　指揮官が、将棋みたいに動かして戦況分析するヤツですよね～」
ゆかりんが装塡手席から身を乗り出してくる。
ふーん、と操縦手のシートで猫クッションを抱いて、麻子が振り返った。
「けっこう考えてたのだな、沙織も」
「あ、あのね？」
「最初から沙織さんは、誰よりもやる気がありましたし」
華が砲手席で、うんうんと頷いた。
そりゃ、だって。モテるためならなんでもやるよ！　……けっこう汚れるし、汗だくになっちゃうし、思ってたのとはかなり違ったけどさ。でも。
「私、好きになっちゃったもん。戦車道のこと」
みんなもそうでしょ？　私は華、ゆかりん、麻子を見る。

それと、最後にみぽりんも。

「だって、みんなが一緒だもんね！　がんばっちゃお！」

おー！　って拳を大きく上げたいとこだけど、狭い戦車の中だから、ちっちゃく上げた。

でも、みんなも苦笑いしながら、それに続いてくれる。ゆかりんは元気に、華は上品に、麻子はちょっと気だるそうに。

そしてみぽりんが、はにかむように笑顔になったよ。

「そうだね。みんなが、一緒だから……楽しいんだねっ」

ごんっ。直後、一人だけ勢いよく拳を突き上げて——真上の鉄の扉にぶつけて、「はうっ！」と涙目になったけどね。

だ、大丈夫ぅ⁉

† †

翌日——体操着姿で集まった私たちは、また丸一日練習に明け暮れることになった。

『はい。一列縦隊ー！』

五台の戦車でやってきたのは、学園艦内につくられた、戦車の教習所ってところ。練習場の敷地の奥にあった、沈み込むおっきなリフトから、一段下に降りたのよね！

そこにはすっごく広い、土で固められた空間があって……ぐるりと一周、戦車用のコー

スがつくられてたの。
さっそく先頭を、待ち構えてたヒトマル式戦車が走り、無線で蝶野教官が指示を出す。
えーと。
「イチレツジュウタイ、だって！」
Ⅳ号戦車の通信席に座った私は、ヘッドホンから届いた声を、四人のチームメイトに伝えた。
「はい。一列縦隊！　このまま、パンツァー・フォー！」
やかましいエンジン音に負けずに、みぽりんが叫ぶ。
動きで応じるのは、操縦手の麻子。おおお。Ⅳ号戦車はぶるぶると震えながら、コースを前進し始める。
うん、お尻、痛くない！　やっぱクッションは正解だよね〜。
でも……なに？　今、ごーんっ、ってすごい音しなかった⁉
『はいはーい、M3は遅いし、Ⅲ突は早いわよ。だからぶつかっちゃうのー！　もっと動きをピシッと！　ピシーッとね！』
無線で状況が入ってくる。あ、M3……は一年生のピンクの戦車で、Ⅲ突はⅢ号突撃戦車だから、歴女チームのノボリ付きのヤツだよね。
「位置は、先頭が生徒会の金ぴかで、次がⅣ号。で、バレー部で、歴女で一年だから……」
ああ、後ろの二台がぶつかったのね？　戦車の壁に貼り付けたホワイトボードで、縦に

並んだマグネットを見ながら確認する。うーん、やっぱりわかりやすいや！
それにしても、麻子の運転ってすごく安定してた。前の金ぴか38tに、つかず離れずついてくよ。やっぱり適任だったってことかな！
『一列横隊ー！』
「あ。今度は、イチレツオウタイだって！」
「はい、一列横隊！……冷泉さん、前の38tの右側に！」
私からの報告を受けて、みぽりんが右のペダルを踏んだみたい。隣にいる麻子のシートで、背もたれについてる右の板が、ぽんと彼女の右肩を叩いた。
麻子がそれに従って、丘のようになっている場所で、少し戦車の速度を上げる。
前しか見えない彼女にかわって、私が身を乗り出して、窓の隙間から左を見た。うん、そこに並んだ金ぴか戦車の姿が見える。
「そっか、オウタイって……横並びになることじゃん」
と同時に麻子が、戦車の速度を元に戻して併走させた。
おっとっと。私はホワイトボードのマグネットを、縦から横に並べ替える。
……もっとも右側に目をやれば、他の戦車たちはこっちを追い越したり、ぜんぜんついてこれなかったりしてるけどさ。
うーん、まだまだってことよね？
『はーい、そのまま進みながら、お互いの間隔開けてー。で、合図したら停車よ！』
そんな私たちに教官の指示は飛び続けて、やがて五台の戦車は並んで止まる。

『標的確認！　順番に、撃ち方用意ー！』
そこはちょうど、空母の壁がなくなった、青い海を見渡せる位置で。
標的？　「……ターゲット、確認しました！」って、装塡席からゆかりんが言った。
照準のついた専用の覗き窓で、真っ直ぐ前を見てるみたい。正面？　私も通信席から確かめてみる。
すると……わ、あった！
「あれかな？　浮かんでるよ？」
見えたのは海の上にぷかぷか漂う、的の描かれた板。ゆっくり移動する空母から、浮きをつけられてロープで引っ張られてるのかな？
そこに向かって――ずどん！　まず、生徒会の戦車が撃った。
けど、当たらないよ？　板とはまるで別の位置に、どばんと水飛沫を上げたくらいで。
『続いて、Ⅳ号戦車！　発射用意！』
「あ。私たち、出番みたい！」
「はい！　五十鈴さん、距離は？」
「え、ええと……シュトリヒが4、ですか？　それだと計算は……」
「僭越ながら報告します！　的が戦車サイズ換算の6メートルで試算すると、距離、1500メートルです！」
もたついた華にかわってゆかりんが、活き活きと補足した。
シュトリヒ……なんか照準についてる、単位なんだって。三角のマークが並んでて、そ

の隙間を1として、計算して――。
あー、うん。数学苦手な私にはさっぱりだけど、どうやらそれで、大砲の角度を決めるみたい。その報告を参考に、砲手の華がハンドルを動かし、狙いを付けた。
「五十鈴さん。海面への打ち下ろしだから、弾が放物線を描いて落ちて行くのをよくイメージして？」
「はい、じゃあ、少し上に角度をつけておきますね」
みぽりんの指示で、さらに華がハンドルを多めに動かす。
そして、ゆかりんががちゃんっ、と弾を込めた。
「装塡完了！　いつでもいけます！」
「周囲確認、準備よし！　……発射！」
「はい！」
ずどおんっ!!　みぽりんの声を合図に、華が大砲をぶっ放した。ひょえー、やっぱり耳がきーんとなっちゃう！
だけど、残念ながら……弾はぎりぎり当たらなかったみたい。板の端っこをかすめて、的を大きく揺らして終わった。
「お、惜しいよ、華!?」
「……もっと集中が必要ですね」
華はでも、納得がいかないみたい。
「1000メートル以内なら当てやすいんだけど、それ以上となると難しくなるの」

って、みぽりんがフォローするけれど、華はすごく悔しそうな顔してた。平静を装ってたけど、長い付き合いだから私にはわかるのよね。

——でも他の戦車も撃った弾は、結局どれも外れちゃった。

一番惜しかったのは私たちなんだけど……きっと華は、満足しないんだろうなあ〜。

その後私たちは一日中、教習所での訓練に明け暮れたわけで。

『土煙をもくもく上げれば、敵に見つかるわよー!』

『拓けた場所はササッと遮蔽物を利用するの! 小回りがきく車輌には有利よ!』

『不用意に稜線を越えないで! 敵の的になっちゃうわよ?』

『斜面は越えられそうかどうか、ちゃんと調べが必要よ? もしくは斜めにダダダーッと駆け上がって!』

……とにかく、いろんなことをさせられて。

海と空が真っ赤に染まりかけた頃、やっと終了となった。ふうー。つ、疲れたああ。

「今日の訓練、お疲れ様!」

一緒に付き合って戦車を走らせてた蝶野教官だけは、まだ元気だったけどね。

五台とヒトマル式戦車を載せて、ゆっくりと上昇するリフト。その上に立ち、汗だくで整列した私たちの前で、教官は平然と笑ってる。

私たちは「お疲れ様でした〜」って、一礼するので精一杯だよ……。

ううん。一人だけ——疲れたからだに鞭打って、ぴしりと背筋を伸ばす人がいて。

「これで今日の訓練は終了だが、みんなに一つ、告知がある！」
前に出てきたのは生徒会の広報の人、河嶋先輩だった。な、なに？　お知らせ？
「えー、急ではあるが、明後日の日曜日。練習試合を行うことになった！」
はい？　え、えええええ？
もちろん突然のことに、みんなも「えー？」とざわついた。だ、だよね!?
だってまだ、私たち戦車道始めて一週間も経ってないし！
だけど河嶋先輩は、かまうことなく。
「相手は、聖グロリアーナ女学院だ」
対戦相手の名を告げた。……はっとしたのは、みぽりんとゆかりんの二人だったり。
「？　どしたの？　知ってるの？」
「……聖グロリアーナ女学院は、全国大会で準優勝したこともある強豪校ですよー！」
ゆかりんが教えてくれた。じ、準優勝ぅ!?
「む、無茶じゃん！」
私は思わずツッコミを入れた。華がごくり、と喉を鳴らす。
ううん、この場にいたみんなは誰もが青くなって。
ただ、教官だけは「へえー」とにこにこしてたけれど。
「よく聖グロと練習試合なんて取り付けたわね～」
「そこは、それ。生徒会の人徳のなせる技、ってことでー」
自慢げに胸を張るのは、会長さんだ。

……でも、あの。どうしても横にいる、副会長のおっきな胸に視線がいっちゃうんだけどね。
「ま、ドーンと胸を借りてらっしゃい！」
なんて教官が言うから、それこそ余計に……。でも。
「というわけで。明日の土曜は一日、休養日とする。日曜は学校へ、朝六時に集合だ！」
河嶋先輩のその一言で、私はようやく巨乳から目を離した。え……ろ、六時⁉
それって――！
「無理だ」
ぼそり、と呟いたのが一人。
私と一緒に並んでた、麻子だよ！
ずっと我関せず、な感じだった麻子だけど……誰よりも真っ青な顔でふらふらしてた。
「やめる」
ついにはそんなことまで言っちゃうし！　「はい？」と彼女の後ろに立つ華が、目を丸くする。
「なにをですか？　冷泉さん？」
「……やっぱり戦車道、やめる」
あああ。このコったら、もー！
意味がわからず華は絶句し、ゆかりんなんて「もうですか⁉」って唖然とした。

「麻子は、朝が弱いんだよ……」
それも、ものすごく。私の言葉にみぽりんが「あ」と、短く息を呑む。
たぶん一度、麻子の遅刻に巻き込まれたのを思い出したのかな？



――なんてことを考えてると、リフトの動きが止まった。「じゃあ今日はここで解散！」って、蝶野教官が手を振りながら、ヒトマル式戦車で去っていく。

私たちもとりあえずそれぞれの戦車に乗って、学校に戻ることになったんだけど……。

「短い間だったが、世話になった」

五台の戦車を倉庫内に停車させると、それだけを告げて、麻子がすたすた去っていく。

ちょっと、待ってー！　私たちは大浴場に行く足を止めて、慌てて麻子に駆け寄った。

「って、どこ行くの麻子⁉　体操着のままで帰っちゃうの？」

「……別に。もう関係ない」

茜色に染まるグラウンドに出て、麻子は振り返りもせず首を振る。

「ま、待って、冷泉さん！」

みぽりんがそう声をかけても、麻子は足を止めなくて。

「六時は無理だ……絶対に」

「冷泉殿！　では、モーニングコールさせていただきます！」

今度はゆかりんが交渉した。

「うちまでお迎えに行きますから！」

華もそこに加わった。さすがに麻子も、ようやく私たちの方を見る。

けど。

「朝だぞ？　人間が、朝の六時に起きられるか！」
「いえ、思うんですけど六時集合ですから……起きるのは、五時くらいじゃないと」
って、ゆかりーん！　今その現実、突きつけちゃダメえ！
ふーっ、と麻子がそのまま倒れそうになった。
「……人にはできることとできないことがある」
信じられない、って顔で麻子が言った。あ、あのねー！
「麻子がいなくなったら、誰（だれ）が運転すんのよー。それにいいの、単位！　このままじゃ進級できなくて、ほんっとに私たちのこと、先輩って呼ぶようになっちゃうよ？」
「それは……」
ぐっ、と麻子が押し黙った。……相当嫌みたい。うん、あともう一押し？
けれど、そのとき。
「こら、お前たちなにをしている！」
倉庫から河嶋（かわしま）先輩が顔を見せて、私たちを睨（にら）み付けた。わ、わっ？
「どうかしたか？」
「あ……だ、大丈夫です」
なんでもありません、とみぽりんが誤魔化した。
そうだよ、言えないよ～。今更、麻子（まこ）が抜けるだなんて、生徒会の人たちには。
その河嶋（かわしま）先輩は、ふいにみぽりんを手招きした。
「西住（にしずみ）みほ。これから各車長（しゃちょう）のみで、試合のフォーメーションの確認をする。そのままの

恰好でいいから、生徒会室へ行くぞ。ついてこい！」
「え、え？　……は、はいっ」
おたおたしながら、みぽりんは断ることもできず、河嶋先輩の後ろを追いかけてく。
——その隙に、麻子が動いた。一人、やっぱり私たちから離れるために。
「あっ、麻子！」
「……。なんとかしたい気持ちはある、でも。こればかりは体質だ」
麻子がたっ、と駆け出した。
私もゆかりんも華も、もちろん後を追ったけれど——寝ぼけてない麻子の足に、追いつくことなんてできないよー！
「麻子……！」
あっさりと、彼女の背中を見失った。
私たちは学校のメインストリートで、夕焼け空を哀しく眺めるしかなくて。
息が上がった三人の影だけが、正門まで長く真っ直ぐ伸びていた……。

□4　練習試合開始、だよ！

「あ、あうー。なんか、体痛い～～……！」
翌日の土曜日、私は寮の自室で、昼過ぎまでベッドに寝転がってた。
たぶん、昨日の練習のせいだと思う。クッションはしてたけど、お尻がカチコチなのよぅー！
私、せっかく安産型なのに!?
「ほんと、今日が休みでよかったよぅ……。土曜だから授業もないし」
みんなも同じ状態かな？　なんてちょっと思ったり。
――あの、麻子も。
結局、昨日は追いかけきれないまま、私たちは解散しちゃった。
ううん。麻子の寮までは行ったんだけど、出てきてくれなかったのよね。
んで、かわりにメールも電話もしてみたんだけど……今のところ、まったく麻子から返事がなくて。はあ。
なんて、思ってたとき。
「！　わ、わっ？」
パジャマ姿で寝返りも打てない私の側で、ケータイがぶんぶん鳴った。
電話？　……麻子から？　私はもちろんケータイを取る。

けれども。
「あ……みぽりん？」
『もしもし。あっ、武部さん！　今いいかな？』
電話をかけてきたのは、昨日会議に連れて行かれたまま会えなかった、みぽりんだよ。
さすがは戦車道経験者？　声に、疲れた様子がまったくなかった。
もちろん電話をしてきた件は、わかってる。
「いいよ。……麻子のこと、だよね」
『う、うん。昨日は会議で遅くなって、メールに返事できなくてごめんね？　で……今日も、連絡つかない？』
「ダメ。もー、ぜんっぜん！」
『そう……』
さすがにみぽりんの声のトーンも落ちた。
でもそれは、他にも原因があったみたいで。
『実はね。わたし、昨日の会議で、大洗女子学園の隊長に決まっちゃって』
「！　すごいじゃん、みぽりん」
ま、みぽりんの実力からすれば当然よね？
けど、みぽりんたら、どーにも気が乗らないみたい。それは……。
『だけど、絶対、勝つようにって。負けたら罰ゲームとして、大洗あんこう祭で「あんこう踊り」を踊るように、って』

はい？

……。あんこう、踊り？

まさか、あの⁉

私の脳裏に、すんごく嫌〜な、踊りの振り付けが浮かんだ――。

転校してきたばかりのみぽりんは知らないだろうけど……あああ、あんなの想像もしたくない！

「そ、そんな〜！　恥ずかしすぎる！　あんなの踊っちゃったら、もうお嫁に行けないよ！」

『え？　そ、そんなにあんまりな踊りなの？』

「うん！　絶対ネットにアップされて、全国的なさらし者になっちゃう！　一生言われちゃうよ〜‼」

私はさーって青くなった。

か、勘弁してーー！

「つか、勝とうよ！　そう、勝てばいいんでしょっ」

『でも相手は、聖グロリアーナ女学院だし……』

「そりゃ、強いとこだってのはわかってるけど！」

『……冷泉(れいぜい)さんがいないから』

ぽつり、とみぽりんが漏らした。

あ……そっか。そうよね。

ようやく私たち五人、みんなで一つになれたのに。
勝つためにはきっと、麻子の力が必要なのに……。
どうすれば？
――そんなの、決まってるじゃん！
「麻子を迎えに行こ、みぽりん！　みんなで！」
私は思わず提案した。『うん！』とみぽりんも電話の向こうで頷く。
ただし、今すぐってわけにはいかなくて。
痛たたたたた！　起き上がろうとしたけれど、私はそのままベッドに倒れる。う、動けない～。
『？　武部さん？』
「あー、だ、大丈夫ー。ちょっとお尻がバキバキなだけで。あはは……って、行くなら明日の朝だよね？　六時より前に、麻子んちの前へ！」
そのときまでにはなんとかするよ……。なんて思いながら、「あ」と私はあることを思いついた。
そう。そーだよ！
『じゃあ五十鈴さんや、秋山さんにも連絡しないと』
「待って、みぽりん！」
『え？』
「ふっふっふ。実は……超いい考えがあるんだけど～！」

で、どうにかお尻の痛みも引いた、日曜日の早朝。
六時よりずいぶん早く——私とみぽりん、華(はな)にゆかりりんの四人は、セーラー服姿で学校に来た。
今日の朝は、ちょっとこの学園艦(がくえんかん)に吹く風が違う？
たぶん、八時には港に接岸するからかな？　真っ平らなグラウンドからは見渡せないけど、学園艦の端につくられた公園とかからは、たぶん陸地が見えてるはずだよね。
それに合わせて学園艦(がくえんかん)も、ちょっと速度を落としてるのかな。甲板につくられた地面が、なんか揺れてる気がするのよねー。
その証拠に、学校に来るまでの道路は、早朝ということ以上にガラガラだった。たぶん、揺れを気にして車を走らせないようにしてるみたい。
今日の私たちにとっては、それがむしろ好都合なんだけどね？
「準備は？」
グラウンドの奥にある、倉庫の扉に取り付きながら、みぽりんが確認する。
「万端です！」
ゆかりりんが元気に答えて、持ってきたリュックの中身を見せた。
そこには、麻子(まこ)を叩(たた)き起こすためのラッパが！

「やはり起床を告げるなら、これでしょうー！　ちゃんと練習もしてきました！」
「わたくしは、朝食のおむすびを握ってきました。目が覚める、大粒の梅入りですよ」
華が風呂敷から包みを取り出し、にっこり。
んで、私は。
「冷やしたペットボトルの水と、洗面器〜！　やっぱ冷水で顔を洗えば、しゃきっとすると思うのよね！　あと、歯ブラシも！」
ずしっと手提げ袋が重いけれど、ええい、大したことじゃないよ！
そして。
「わたしは、昨日のうちに、ほら」
みぽりんが「朝一番に開けますから」と言って、職員室から借りてきた倉庫の鍵を、ポケットから出してくる。
あとは、倉庫に入るだけ。ごろごろと大きな扉をみんなで開けて、私たちは中にあったⅣ号戦車に取り付いた。
さーて！
「じゃあ行きます！　冷泉さんを迎えに！」
みんなが乗り込んだのを確かめて、みぽりんが言った。
そう、これで行くの、私たちは！
……大砲撃ってでも、麻子を起こしてやるんだからね？
ぎゅいいいいん！　ぼばばばばばばばば！　――いない麻子にかかわって、今日はゆかりん

が操縦手だよ。エンジンをかけただけで、「イヤッハー！」ってまた、パンツァー・ハイになっちゃったけど⁉

でも、運転は意外と慎重だったり？　「微速前進！」って、そろそろと戦車が前へと動き出した。

「って、こんなに視界が悪いんですね、操縦席って！　し、指示をお願いします！」

「はい。わたし、頭を出すから任せて！」

ゆかりんの言葉を受けて、みぽりんが円い扉を押し開けて、そこから上半身を外に出した。

あー、そっか。戦闘中じゃないから、半分外に出ても大丈夫なのね。

「そのまま前進！　学校の、メインストリートから正門を出て、右に！」

「了解です！」

みぽりんの指示に従って、ゆかりんがⅣ号戦車を学校の外へと運ぶよ。

さすがに音がやかましいのか、「なんだなんだ」と朝の散歩の人たちとかが、道路に出た私たちに気付いて驚いたけど。

「すみません、お邪魔していますー！」

上半身を外に出したみぽりんが、謝りながら進んでいくと――。

「あら、Ⅳ号。久しぶりに動いてるの見たわねぇ」

道路に水をまいていたおばあさんが、笑顔になってた。ありゃ？

「すごーい、せんしゃー」

犬を連れた小さな女の子が、目を丸くしてる。
「戦車道、復活したってほんとだったのね」
「試合かー？　がんばれよー！」
その他にも道行く人たちは、なんかけっこう楽しんでる？
みぽりんはずっと、ぺこぺこ恐縮して頭を下げてるみたいだけど。
って、応援もされちゃったし！
「こりゃ、勝たないとねー」
私は通信席で、苦笑した。
「そうだよ。あんこう踊りだなんて、みぽりんにさせらんないしさー！」
「もちろんです！　たとえ負けても……ワタシもあんこう踊りをやります！　西住殿一人に、辱めは受けさせません！」
「わたくしもやります！」
お、おおお？　ハンドルを握るゆかりんが、勢いに乗って宣言しちゃった。ま、マジ？
そこに、砲手席にいる華も加わった。ひょえー。
ええい！　そんなら、私だって！
「みんなでやれば恥ずかしくないよ！」
うん、私たちはチームだもんね？
「ありがとう……」
みぽりんが戦車の中を覗き込みながら、なんだか瞳をうるうるさせてた。あはは、感激

してる？
でも、ここにはその「みんな」の一人が足りないのよね。
ううん。負けてあんこう踊りをするために、迎えに行くんじゃない！
私たちは――勝つんだもん！
「あ。そっちの信号を左……でよかったっけ、武部さん？」
「はーいはい、ちょっと待ってね。ええと」
みぽりんに麻子んちの道順を確認され、通信席にいる私は窓から外を見る。今日は蓋がされてないから、けっこう見やすいのよね。
「うん！　そこを左折だね！　そうしたら直進してすぐ、二階建ての寮が見えて……」
そこの二階が麻子の部屋だよ！　って言おうとしたとき。
あ、あれえー？
「麻子？」
「冷泉さん⁉」
私と、外に顔を出していたみぽりんが、同時に見つけた。
はい？　とゆかりんや華も、蓋のない窓から外を見て、唖然とした。
だって、だってだって！　まさか！
そこにはセーラー服をだらしなく着て、ふらふらと寮から出てきた、麻子の姿があったんだもん！
もちろん即座にゆかりんが、Ⅳ号戦車を停車させる。同時に私たちは、それぞれ手近な

扉を押し開けて——。
「麻子！」
真っ先に私が、麻子のもとに駆けつけた。
ただし麻子ったら、「ね、眠……眠い」と寝ぼけ眼だよ。もー！
けど、起きてる！　学校に行こうとしてたんだ！
「冷泉さん！　自分で、がんばって起きれたの⁉」
みぽりんが感激しながら、麻子に抱きついた。って、勢い余って押し倒しかけちゃうけど！　ありゃりゃ。
そこを私やゆかりん、華がどうにか抱き留めた。あっぶなーい。
でも、でもでもっ！
「やればできるじゃーん！　麻子〜！」
「ううう。昨日一日寝だめしたのだが、なぜだ。ぜんっぜん眠い〰〰〰」
麻子が目をしょぼしょぼさせて、みんなの腕の中で呟く。
「って、麻子！　だからメールしても電話しても、折り返してこなかったの？」
「しょうがないだろう。こんな時間に起きるには、そうでもしないと不可能だからな……」
「！　私たちと一緒に、戦車に乗るため？」
「……。ああ」
こく、と小さいけれどはっきりと、麻子が頷く。

だね！
もちろんその言葉を喜ばない者なんて、誰もいないよ！
「もう大丈夫、冷泉さん。学校まではⅣ号戦車で運ぶから！」
みぽりんが笑顔で、麻子の手を引いた。
もちろんみんなでわいわいと、麻子と一緒に戦車へと戻る。
はい！　と砲手席でさっそく包みを開けるのは、おむすびを持ってきた華だよ。
「まずは朝ご飯にしましょう～。どうぞ？」
「んで、食べたら顔洗って歯を磨こうね！」
通信席のシートに座って、私は洗面器の用意をする。
「それでもシャキッとできない場合は、ワタシが起床ラッパを披露します！」
操縦レバーを握って戦車を後退させながら、ゆかりんが言った。
って、その前に。
「まず制服、きちんと着ないと。冷泉さん～」
麻子を装填席に引っ張り上げたみぽりんが、はだけそうになる麻子の恰好にあわあわした。
もっとも、あれ？
「って、麻子？　おーい！」
「くー……」
肝心の麻子ときたら。いつしか安心したような顔で、シートで寝ていたり？

こ、こらー！

「……はっ！　な、なんだ？　どこだ、ここはっ？」

麻子が完全に目を覚ましたのは、ゆうに八時を回ってからだったりする。

って、びっくりしたのはこっちだよ⁉　私も、華もゆかりんもみぽりんも——Ⅳ号戦車の中にいたみんな、麻子の声でびくん、ってなった。

だって。

「ちょ……まだ起ききってなかったの、麻子⁉」

「？　なんのことだ。ここは、戦車の中か？」

「あ、あのねえ。さっきまで一緒に、どうにか目を開けて、整列してたじゃん？」

私は、六時に集合してからのことを話した。

そーだよ、まずは六時きっかりに学校のグラウンドで、生徒会に点呼を取られて。

んで、今日のスケジュールや戦略を長々と聞いて、ようやく全チーム戦車で学校から出たのよね？

「そんな馬鹿な。記憶にない」

麻子はジト目で、私たち他の四人を順番に見てくる。

いえ、と否定するのは麻子の後ろにいる、砲手の華だよ。

「だって、今まで操縦していたのは、冷泉さんですし？」

「まさか……。って、操縦席か、ここ！」

麻子が二本のレバーを握ったままの自分に気付き、声を上げた。
んもー、ほんっと、寝ぼけてるんだから！
「それってでも、今まで寝ながら運転してたってことですかね？」
ぶるり、と震えたのはゆかりりんだった。うわ、ほ、ほんとだー！
あは、と軽く笑うのは、円い扉から顔を出してたみぽりんだったり。
「でもちゃんと、わたしの指示に従って操縦してた、よ？」
みぽりんは戦車内に頭を戻して、私たちにそう言うんだけど——引きつってる。みぽりん、ほっぺた引きつってるよ？
「人間とは時折、超越した力を発揮するもの、と聞いたことがありますが……」
華が一人、なんだか感心しちゃってた。そ、そういうもん？
って、当の本人の麻子ったら、次は「うわ！」って窓の外を見て騒いだ。
「陸地だ……！」
あ、うん。そーなのよね！　私たち他の面々も、今は蓋の開けられた戦車の窓から、前方の光景を目にしてた。
——ここは学園艦の、昇降用ドックってとこなのよね。
いつかの教習所みたく、空母内のリフトを使って移動した、最下層なの。水面に近い位置につくられた広い空間には、エンジンを切って停車する、私たち五台の戦車だけじゃなくて——他に乗用車や、バスの姿もあった。
海の向こうに見えてきた、茨城県は大洗町の港へと、降りるために！

その姿はまだ遠くて、「陸だ！」ってことしかわかんないけどさ。
「久しぶりの陸だよね～！　アウトレットで買い物したいなー」
またかわいい、モテ系ファッション買わなくっちゃ。あと、素敵なカレとも会えるかなあ？
なんて思ったけれど。
「試合が終わってからですね。今夜はあんこう祭がありますから、月曜の放課後になりますか」
華がぽつり。えー。
「ま、まあそっか。うー、昔は学校って、みんな陸にあったんでしょー？　いいなー、私、その時代に生まれたかったよ」
ほんとに、なんでわざわざ海に隔離しちゃったのかな？
「ワタシは海の上がいいですー。気持ちいいし、星もよく見えるし」
意外にも乙女チックなのは、ゆかりんだよ。うっ、こ、これは見習った方がいいかも？
だけど一人きょろきょろみんなを見ていたのは、みぽりんで。
「？　どうしたのだ、西住（にしずみ）」
めざとく見つけた麻子（まこ）が、声をかけた。
あっ、とみぽりんたら少し言葉を詰まらせて。
「わ、わたし……大洗（おおあらい）の町は、初めてだから」
「ええ。みほさんは、転校してきたばかりですもの」

うんうんと華が頷く。そっか、歩いたこともないのよね？
「学校は明日からしばらく港にいるから、じっくり案内したげるよ、みぽりん！　……って、そーいえばみぽりん、どこ出身だったっけ？」
「わたしですか？　わたし、実家は熊本です」
「そうなの？　にしては……ぜんぜん熊本訛り出ないよね～」
「えっ。は、はい」
「……わたくしたちも茨城ですけど、『よがっぺー』とか言いませんもの。普通ですよ、普通」
くすくすと華が笑った。ま、そっかな？
「子供が正しく標準語を使えるよう、学校が海上に離された、という話もあるな」
そこを麻子が補足した。ふーん。って、こういうことはほんと詳しいね、麻子ったら！
――そうこうしているうちに、学園艦はぐんぐん港に近づいた。
その姿が肉眼でもはっきりと見えてきて――。
「あっ‼」
すると突然ゆかりんが、大声を上げた。わ、なに？
って……私たちの誰もがすぐに、その意味を理解した。だって、なに、あそこに停まってるの⁉
「すごく、大きい……！」

みぽりんがシート脇のL字型望遠鏡をひったくり、頭上の扉から身を乗り出した。

「学園艦？　学園艦だよ、あれ、あれ？」

私も思わず座席から腰を浮かせる。戦車の小さな窓越しでも、十分にそのシルエットと大きさがわかった。

港の半分を占拠するその学園艦は、私たちの学園艦より、倍以上もあるかも！　規模が違うよ～！

ってことはそれだけ、お金持ちの学校ってことよね？　ひょええ。

「あれが、聖グロリアーナ女学院の……」

ごくりと喉を鳴らすのは、華だよ。ううん、操縦席では麻子も息を呑んでる。

「ワタシたちの、初めての対戦相手ですね！　相手にとって不足なし、です！」

ゆかりんがさっそく装塡手として、砲弾を持ってきた。って、まだ早いってー！

ごごん！　と重い音を響かせて、港に着いた学園艦がタラップを降ろす。

それはもちろん中にいる、私たちの戦車や車を吐き出すためのもの。鋼鉄の橋がかかり、先に乗用車やバスが降りてった。

そして、私たちもみぽりんの「全車、イグニッション！」を合図にエンジンをかける。

まちまちのカラーに塗られた五台の戦車が、ゆっくりと前進して、縦・列でタラップを踏んだ。

すると――。

「！　あの戦車っ」
え？　外に頭を出していたみぽりんの声に、私も気付く。
窓の外、タラップのその先に、もう相手の戦車が並んでた。
私たちのチームとは違って、ほとんどが同じ塗装で統一された、なんか威風堂々としたのが！
その数は、こっちと同じ五台だよ。
「イギリスの歩兵戦車ですね！」
ゆかりんが分析する。さっすがー。
「マチルダⅡ戦車が主力で、それに一つだけカラーの違うのがチャーチルですね！　……くうぅ～、たまりません！　動いてるとこをナマで見られるだなんて！」
「し、幸せそうだね、ゆかりんって。あはは」
ふーん、よくわかんないけど、二種類で構成されてるってこと？
色だけじゃなくて、なるべく同じのでそろえてきてるなんて、ほんとうちとはまるで違うのね。
って、あ、あれ？　なんか、それだけじゃなくて。
「お姉さまー、がんばってー！」
「キャー！　ダージリン様！」
「アッサム様よ！」
「オレンジペコ様～！」

なに、あの。……よく見たら戦車の周り、女の子ばっかりなんだけど⁉
その声がなんと、近づくとこっちの戦車の中にまで聞こえてくる。
「全部、聖グロリアーナの生徒ですね？」
華（はな）がそう察した。あ、だよね。私も、取り囲む女子たちが、全員同じブレザー姿なのに気付いた。
――そんな彼女たちが熱狂する相手が、イギリス戦車から姿を見せる。
赤い制服を着た、なんだか優雅な雰囲気（ふんいき）を纏（まと）った女の子たち？
うわ、いいなー！　こっちは普通の、セーラー服のまんまなのに。
「はー、なんか、華やかですね」
ゆかりんがぽかんとなった。うん、それは恰好（かっこう）のせいだけじゃなくて……相手は全員すっごくきれいで、まるで歌劇団のスターみたい！
美人さんが中心、ってだけじゃなくて。美形、ってゆーのかな。なんだか「男役」が似合いそうな人もいるし？　煌びやかなんだよね。
あー、これは、人気出るはずだわ～。
「一瞬、戦車道（せんしゃどう）やってるからモテてるの？　とか思っちゃったけど、これって違うよね……？」
「あれだけ綺麗（きれい）どころが集まっていれば、な」
麻子（まこ）が私にトドメを刺した。ううっ、わかってるよぉ。


ST·G·GC

その人気はほんとにすごくて、私たち大洗(おおあらい)女子のみんなが戦車を停めて、わらわらと外に出ても——誰(だれ)も気にも留めないほどだよ！

むしろ一年生チームなんか、「うそー、すてき！」「もー負けちゃう、絶対負けちゃうー」なんて、きゃっきゃとはしゃいじゃってたし。

だけどそんな中にあって、負けじと前に出る人がいた。

「大洗女子学園(おおあらいじょしがくえん)の戦車道(せんしゃどう)チームだ」

片眼鏡をきりりと直した、広報の河嶋(かわしま)先輩！　うわ、さすが～。

「本日は急な申し込みにも関わらず、試合を受けていただき、感謝する」

「構いませんことよ」

ダージリン様、だっけ？　みんなにそう呼ばれていた、金髪碧眼(きんぱつへきがん)の美人さんが、上品に微笑む。

しゃべるだけでまた周りが、「きゃー！」ってなっちゃうくらい！　うわ、ほんっと、美人ってすごい……！

でも、なんで？　ダージリン様ったら……紅茶のカップを手にしてた。

ううん。それが違和感ないくらい、優雅に口を付けるんだけど。……あのカップ自体も、なんか高そうなのよねー。やっぱブランド品かなあ？

そして、そんなダージリン様が、さっと小さく片手を上げると——嘘(うそ)みたいに、周りのコたちが静かになった。

す、すごすぎる。もう、いろいろと！
だけど、並んでいるこっちの戦車をちらりと眺めて。
「それにしても……ええと、個性的な戦車ですわねぇ」
ずばり、言った。……まあ、そうよねー。ピンクとか金色とか、かわいすぎるし！
「失礼」
こほん、とダージリン様は咳払いして。
「ですが、聖グロリアーナ女学院はどんな相手にも全力を尽くしますの。サンダース大付属高校や、プラウダ高校みたいに下品な戦い方はいたしませんわ。ここの紅茶のように、芳醇で優雅に……一滴たりともこぼさずに、戦って差し上げましょう」
え？　こぼさない、って。まさかその紅茶のカップを持ったまま、戦車に乗り込むの⁉
た、確かに、さっきもカップ片手に戦車から出てきたけどさ……。
でも、それって。
「す、すごい自信ですね」
ゆかりんが、私の隣で呟いた。
「挑発だな」
そう言うのは、眠そうな目を見開いた麻子で。……うん、よね！
けどきっと、そう言わせるだけの実力があるんだと思う。私はなんだか、相手チームと向かい合って整列して――ひしひしと肌で感じた。
「それではこれより、聖グロリアーナ女学院VS大洗女子学園の試合を始める。一同、

礼！」
――聖グロリアーナのブレザーに、「JUDGE」のプレートを胸に付けた女子生徒が場を仕切る。
私たちはもちろん、一斉に頭を下げて。
「騎士道精神でお互い正々堂々、がんばりましょう」
ダージリン様が最後にそう告げて、颯爽と私たちに背を向けた。
もちろん、その手に紅茶のカップを携えて。……ほ、ほんとにそのまま乗っちゃうのね⁉

† †

『両校、所定の開始位置に！』
Ⅳ号戦車の無線機を通して、ヘッドホンをした私に、審判の声が届く。
それに従って私たちと聖グロの戦車は、大洗町の市街地を抜けて、北に広がる砂地の丘へ――。
そこで東と西にわかれたよ。東側が聖グロで、私たち大洗女子は西！
『練習試合の形式は、事前に通達があったとおり、殲滅ルールとなります。それぞれ五輛ずつの戦車が全滅した方が、敗北です』
審判がきっちりルールの説明もしてくれた。

こっちは五台の戦車を動かすのがやっとで、人数の余ってる聖グロ側から審判を出してくれたんだけど。……最初は「公平じゃないかも？」なーんて思っちゃって、ごめーん。たぶん、すごくちゃんとしてくれてると思う。
それってダージリン様みたく、「騎士道精神」が徹底されてるからなのかな？
——って、感心してる場合じゃなくてっ。
「ええと、確認！　今回はこの砂の丘陵地がメインだけど、さっき通ってきた大洗の町もフィールドに含まれてるよ！　ただ、観客席になってるアウトレット手前までだから、商店街ばっかりで……戦うにはごちゃごちゃしすぎてるかも、だよ？」
私は今朝、生徒会からもらった地図をホワイトボードの上に貼って、みんなに告げた。
とりあえず地図の大半を占める砂地の上に、五個ずつ合計十個のマグネットを、東西の端に並べる。
大洗女子を示すのはばらばらの蛍光カラーで、聖グロは光らないヤツ、色だよ。
私がどれだけ役に立つかはわかんない。つい、車内にいる華やゆかりん、麻子、みぽりんを見渡した。だって私は戦車を走らせるのにも、攻撃するのにも関係ないポジションだから。
でも、精一杯やるだけだもん！
……うー、なんか、どきどきしてきた？
それはどうやら、私だけじゃないみたいで。
「いよいよ、は、始まるんですね！」

装塡席でゆかりんが、興奮を抑えられない顔をしてた。
その横にいる華も、今から砲手席のハンドルに触れて、大砲を左右に動かしたりしてる。
麻子は麻子で、まだ眠そうだったけど——ぱちん！　って、自分でほっぺたを叩いてた。き、気合い入ってる？
だけどみんな、どこか肩の力が入りすぎてるような？
なんて、思ったとき。
「ね。終わったらみんなで、アウトレット行こうね！」
ふいにみぽりんが、一番上の席からみんなに言った。
ね？　と私、ゆかりん、華、麻子を順番に見るし。……くすっ、て最初に笑ったのは誰だったかな。
ううん、気が付けば全員、笑顔になってたよ！
もちろんみんな、了承する。華が「ええ」と会釈して、ゆかりんはびしっ、と敬礼を返した。
麻子なんか振り返らずに、親指だけを肩越しに立ててみせた。
んで、私は。
「明日、絶対にね！　みぽりん！」
男子だったら一発ノックアウトな、ウィンクをして見せた。
そして、ついに青空に、一筋の白煙が上がった。ぱっ、とそれは昼間でもわかるくら

い、強烈に輝いて——。
『試合開始！』
照明弾の光とともに、私のヘッドホンに審判の合図が聞こえた。
「パンツァー・フォー！」
みぽりんが叫ぶ。うん、もっちろん、麻子が戦車を前進させた！
さらに横並びになってた、カラフルな仲間の戦車もついてくる。
だけど。
「各チームに通達します！」
みぽりんが、私のと同じヘッドホンをつけて、喉に当てたマイク越しに通話した。
こっちのチームの隊長だからって、みぽりんが直接通信できるよう、特別に生徒会から渡されたのよね。
「今回の敵は、イギリスの歩兵戦車です！　あれって、すごく装甲が厚くて……１００メートル以内に接近しないと、こっちの攻撃が効かないの。ううん、事前に話したとおり、Ⅳ号の短砲身７５ミリでぎりぎりで……。３８ｔや八九式なら、もっと近づかないと無理かも。でも向こうは、こっちに比べて足が遅いから。そこを突きます！　作戦どおりに、Ⅳ号以外の戦車は丘陵地を登り切る手前で待機！」
『了解～！　がんばってね、隊長ー』
『こちら一年。わっかりましたぁ』

みんなからの返事がくる。で、やがて私たちを残して四台の戦車が、その場でゆっくり停止した。

「こそこそ作戦発動です！」

みぽりんが作戦名を口にした。……って、そんな名前になったんだっけ？

「な、なんでこそこそなの～？」

「え。だって、まともにぶつかったら勝ち目はないし……。だから罠（わな）を仕掛けて、誘い込んで一気に叩（たた）くしか」

「へー！　なんか勉強になる～。モテモテの男子を射止めるときみたいっ」

「ただ……向こうもきっと、それくらいは予想してくるとは思うんだけど」

ごにょごにょ、とみぽりんが戦車のエンジン音に掻（か）き消（き）える声でなにか言う。

うん？　聞こえないー。

「と、とにかく。私たちⅣ号戦車（よんごうせんしゃ）は、これより単独で偵察に向かいます！」

――ってなわけで。ほいほいっ、と私はホワイトボードのマグネットをいじった。

敵がどう動いてるかはわかんないから、ブルーのヤツは西側に横一列のままだけど。

こっちは東に四つを残し、Ⅳ号を示す白いマグネットを、地図の真ん中へと進めてく。

けど、その途中で「全車停止！」って、みぽりんが両足のペダルを二度踏んだ。

肩を叩かれた麻子（まこ）が、戦車を小高い砂山の手前で停める。

「わたし、敵の状況見てくるね？」

「わ、ワタシも行きます！　西住（にしずみ）殿～！」

みぽりんとゆかりんが、二人で戦車の外に出てく。「気を付けてくださいね」って華が心配した。

でも、こっちの姿を隠したまま偵察するなら、確かに戦車を置いていくのが一番なのよね。

で、すぐに二人が帰ってきた！

「こちらに向かってマチルダⅡ四輌とチャーチル一輌、前進中です！」

みぽりんが真っ先に報告してくれる。きたの？　私は慌てて、ブルーのマグネットを五つ全部、一つだけの白に寄せた。

ごくりと唾を飲み込んだのは、ゆかりんだよ。

「き、きれいな隊列でした！　五輌とも、見事に横一線です！　距離はまだありますけど……」

「うん、あれだけ速度を合わせて隊列を乱さず動けるなんて、さすが練度が高いとしか」

うっ。みぽりんがそう言うんだから――ほんとにすごいのね？

「とにかく、エンジン音が響かないように注意しつつ、後退！」

席に戻って、みぽりんが指示を出す。

でも、あれっ？

「麻子さん？　あの、寝ているんですか？」

ゆさゆさと華が手を伸ばし、操縦席で突っ伏していた麻子を揺さぶってた。って、待機

してる間に、なに寝てんの⁉
「ちょっと？　寝ちゃダメだってば、麻子～」
「うぅ……今日はあり得ないほど、朝が早かった……」
「寝だめしたはずじゃん！　ほら運転、運転！」
私は隣の席なのをいいことに、麻子をつんつんつついてやった。「ん」とどうにか反応して、麻子がレバーを操作する。
さて、ここからが勝負だよっ！
まだ寝ぼけてても、腕は確かだね！　Ⅳ号戦車は、ほんと静かに後退を始めた。
「あの、わたくしたちはこのまま囮になるのですよね？」
華が砲手席の真後ろにいる、みぽりんに確認する。
はい、とみぽりんが頷いて。
「攻撃を仕掛けて相手を誘い込む予定、なんだけど……うまくいくかな」
でも、ちょっと不安そう。
けれども華は、なんか堂々としてた。
「こちらは初めての試合なんですし、精一杯やるだけです。がんばりましょう！」
「だね。やるっきゃないじゃん！」
私も華に同意する。うん、とみぽりんも笑顔を見せた。
「そっか。そうだよね。じゃあ、まずは……」

5　あんこう踊りは……想像もしたくないよ！

ずどおんっ！　Ⅳ号戦車（よんごうせんしゃ）から、一発の砲弾が発射された。

ひー！　相変わらず音も煙も、すんごいっ。

それはやってきた五台の戦車の、一台を狙（ねら）ったもの。ダージリン様の乗る、一台だけ色と形の違うリーダー戦車だよ。

けど……うーん、残念。外れちゃった！

「すみません……」

きっちり狙ったつもりの華（はな）が、肩を落とす。「大丈夫」と後ろのみぽりんが慰めた。

「目的は撃破じゃないから。じゃあ、冷泉（れいぜい）さん！　反転して、逃走！」

「わかった」

「！　って、全車輌（しゃりょう）の砲がこっちに向いてる⁉」

麻子（まこ）に指示を出したみぽりんが、出していた頭を引っ込めて、円い扉を慌てて閉めた。

同時に――撃ってきた⁉　どどどどんっ！　って、一斉にすんごい音が！　きゃー！

「ジグザグに走行して！　こっちは装甲が薄いから、まともに食らったら終わりかも！」

みぽりんがペダルを蹴（け）って、麻子に意思を伝えた。

でもその前から操縦手の麻子は、戦車をジグザグに操ってた。おかげで……砂が周りで

巻き上がったけど、ぎりぎり回避した⁉

さっすが麻子！

しかもどうやら、闇雲に走ってるわけじゃなくって。――起伏のある砂山の陰とか、ときどき見られる大きな岩や木々なんかを、うまく盾にしてるみたい。って、操縦席からの視界はすごく狭いのに、ほんとにすごいじゃん！

でも、たぶん敵もすごいんだと思う。狙いはかなり正確で、Ⅳ号戦車はずっと轟音に揺らされっぱなしだもん！

それに、撃ってくるときは必ず、五発まとめて音が聞こえる。五台の戦車が息をそろえて、攻撃してきてるってことよね？

練度が違うって、こういうこと……？

それでも敵を引き連れて、私たちは仲間の待機してる場所へと向かった。

「こちらⅣ号戦車！　敵を引きつけつつ、待機地点にあと五分で到着します！」

みぽりんがそう無線で伝え、私も地図上のマグネットを動かした。

待ち構えるカラフルな四つのもとへ、ついに白、つとブルー五つが接近して――。

『戻ってきたぞ！　全員、戦車に乗り込め！』

『あたしのトランプ、貧民さんがちゃんと持ってきて～！』

『こらー！　バレーボールを粗末に扱うな！』

どたばたした声が、無線を通して聞こえた。……な、なにやってたの？

みぽりんも、さすがにちょっと呆れたように、一瞬言葉を詰まらせたけど。

「……あと500メートルで敵車輌、射程内です！」
誰よりも冷静に後方を確認して、みんなに伝えた。
だけど。
『撃て撃てー！』
河嶋先輩のそんな威勢のいい声が、無線機から返ってきた。
え？　ちょっと待って？
ずどんっ！　砲撃の音がして――って、なんかこっちの戦車をかすめなかった⁉
今！
「み、味方を撃ってどうすんのよ～！」
「いえ、もうこのままで！　冷泉さんは、味方の砲撃が敵側面に当たるよう、うまく回り込んで！　五十鈴さん、それに合わせて砲を回転、迎撃に加わって！」
私の悲鳴を掻き消して、みぽりんが冷静に指示を飛ばす。
「了解だ」
麻子は真っ直ぐ仲間のもとに向かってた戦車を、急に右の方に曲げた。
ちょうど、仲間からの攻撃を避ける位置につけたのかな？　と、砲台を回すのは華だよ。「再装塡します！」ってゆかりんが両手に弾を持ってくる。
「全車輌、攻撃！」
そしてみぽりんが合図した。どーん！　華が撃っちゃった！

それに合わせて、仲間の戦車も攻撃する。でも……。
「あ、当たってるけど、撃ち抜けてません～！　装甲厚いです！」
ゆかりんが敵を確認して、慌てふためいた。えええええ？
『もっと撃てー！　次々、撃てー！　見えるものはすべて撃てー！』
通信機越しに、河嶋先輩の叫びが聞こえた。だけどみぽりんが、「待って！」って焦る。
「そんなにバラバラに攻撃しても！　やるなら履帯を……戦車の横から、足下を狙ってください！」
そっか、攻撃を集中させた方がいいのね？
……だから聖グロってば、いつもそろえて撃ってきてるんだ！
そして、その差がついに出た。
『きゃ～！』
『すんごいアタック！　だ、ダメええええ！』
無線機からパニックになった声が聞こえてきた。これ、バレー部？
「落ち着いてください！　攻撃をやめないで！」
隊長のみぽりんが必死になって訴えるけど――。
『無理です～！　もういやー!!』
『あっ！　に、逃げちゃダメだってばー！』
今の、一年生？

すると直後、審判から無線が入って。
『大洗女子、M3戦車！　乗組員六名全員が交戦中に外へ出たため、車輌放棄とみなし白旗判定とします！』
「え？　なに？　M3って一年生の戦車だよね？　車輌放棄して、白旗ぁ？」
得られた情報を、私は車内のみんなに伝えるけど……そ、それって、戦闘放棄ってこと？
だけど麻子も華もゆかりんも、いちいち驚いてる余裕がないみたい。みぽりんだけが一番上のシートで、「そんなっ」って身じろぎした。
「誘い込んで攻撃するはずが、向こうの一斉攻撃に圧倒されてる……！」
『隠れてるぶん、こっちの方が有利なはずだ！　慌てるな、撃て！』
一方、焦りながらも相変わらず威勢がいいのは、河嶋先輩くらいで。
――だけど。
『し、しまった⁉』
ぎゅごががが。すんごい音が、河嶋先輩の声を掻き消した。えっ、今のは？
『動けない？　ど、どうなってる⁉　弾は当たってないぞ！』
はいー？　いったい、なにが？
「武部さん！　各車輌の状況を確認して！」
無線機の前で呆然としちゃってた私に、みぽりんが訊く。そ、そーだよ、私の役目はっ。

「ええと……バレー部チーム！　どうですかー？」
『……こちら、バレー部。な、なんとか大丈夫です！』
混乱から立ち直ったバレー部から、返事が来る。
「歴女（れきじょ）チームは？」
『うむ！　命の心配をしていては、真に生きていることにならない！』
……。なんか変なのが返ってきた。
ま、まあ元気そうなのはわかったから、いっか！
「一年生チーム！　……は、みんな逃げちゃったんだっけ？」
その問いかけの応答は、一つもなかった。じゃあ、最後は。
「生徒会チームは、どう？　動けないってほんとですかあ？」
『今河嶋が外に出て確認したけど、履帯（りたい）が外れちゃったみたい～。38tって外れやすいみたいなんだよねー』
河嶋（かわしま）先輩のかわりに、会長さんが通信に出る。えええええ？
それらの会話を聞いてたみぽりんが、「一輌（りょう）が行動不能？」って呻（うめ）いた。
「勝負は見えたな……」
ぼそりと言ったのは、麻子（まこ）だよ。
確かに、五台いるうち、もう半分近くもやられちゃって！
『こらー、無事な車輌は撃ち返せー！』
通信に河嶋先輩が戻ってくる。私はつい、みぽりんを見た。

「河嶋先輩は、撃てって言ってるけど！　みぽりん？」
「……」
みぽりんはしばし、なにも答えてくれなかった。やかましい戦車の中で、こっちの問いかけが聞こえなかった？
ううん。しばらく考え込んでたみたいで。
「このままここにいても、やられるだけ……」
やがて、おもむろに口を開く。
「どうしましょう!?」
ゆかりんが装塡の手を休めずに、後ろのみぽりんを見た。
ううん、それは彼女だけじゃなくって。
『わたしたち、どうしたら!?』
『隊長殿、指示を、指示を！』
通信からも同様の訴えが届いた。それをヘッドホンで聴いてるみぽりんは、苦悩するように瞼を閉じて。
「隊長は、みほさんです」
どんっ！　って撃ちながら、華が言った。
……そーよね！　だから、私もそれに続いて。
「私たち、みぽりんの言うとおりにするよっ」
「！」

みぽりんが瞼を開いて、首に付けたマイクをしっかり押しつけた。
「決めました！　生き残っている車輌は全部、わたしたちのあとについてきてください！　移動します！」
そして、麻子に「前進！」って指示を出した。
前進？　それって……。私は蓋をされて、細い隙間だけになった窓から真正面を見た。
そこにあるのは、大洗の町！
「名付けて、もっとこそこそ作戦です！　みなさん、わたしの指示通りに動いてください！」

†

――私たち、生き残った三台の戦車は、みぽりんの決断で町に向かった。
足は、こっちの方が速いもん！　バレー部のハチキュー式だけ遅いけど、それでもイギリス戦車の方がまだのろいみたい。
だから私たちはどーにか先に、細い路地の入り組んだ、商店街の中に入れたよ。
で、ここからどうするかと言うと……。
「武部さん、地図で捜して！　戦車がうまく隠れられそうなところ！」
「へ？　わ、私ぃ？　……あっ、もっとこそこそって、そういう……！」
「先に陣取ることができた、地の利を生かしたいの！　わたしたちが身を隠せれば、きっ

と敵は少なくとも、二手にはわかれてくれるはず。そうすれば五輛まとめて相手にする必要がなくてっ」

「！　勝ち目があるってことだよね？　わかったよ！」

私はすぐに、ホワイトボードに貼ってあった地図をひったくった。

ええい、今はマグネットなんてまどろっこしいよ！　それより、えーっと。私は薄暗い戦車の中、商店街の様子とにらめっこする。

戦車が隠れられそうなとこ、ってゆーと……。

「とりあえず、公園があるよ！　商店街のど真ん中！　それから……この大型スーパーの立体駐車場、使えないかな？　ここなら戦車、入れるよね？」

ほら！　って私は地図にくしゃっと印を付けて、間にいるゆかりん経由で、離れてるみぽりんに渡してもらった。

これで二カ所！　みぽりんはうん、って頷いて。

「わたしたちⅣ号は、公園を占拠します！　あと一輛は、この先のスーパーの立駐を利用してください！　……向かい側に地下駐車場の入り口もあるので、そっちに隠れてもいいです！　どちら、行きますか？」

『えー、地下側で、レシーブしたいですー！』

無線から、バレー部の人の返事がした。

じゃあああと一輛、歴女チームは？　って思ったけど。

「あ！　そーいえばみぽりん！　歴女チームの戦車って、派手なノボリ付きだよね？　あんなの隠せるとこなんて、よくよく考えとかないとっ」

私の言葉にみぽりんも、はっとなった。地下駐車場の方に、歴女チームを行かせた方がいいのかも？

でも、その判断を下す前に。

『こちら、その歴女チーム！　道中に、薬局のノボリ群を発見！　ここに停車して、うまく身を隠す！　ハンニバルを待つローマ軍がごとく！』

威勢のいい声が届いたよ。なら、これで……。

「では二輌とも、うまく潜伏してください！　作戦の成功を祈ってます！」

みぽりんがそう言って、頭上の扉を開けて、外へと身を乗り出した。風にあおられる地図を片手に、「こっちは前進！」って叫ぶ。

うん、確か公園は、ずうっとこの先にあるのよね。

私たちのⅣ号戦車は、そこで息を潜めて待つ——。

……勝てるかな？　なんて言葉さえ、喉の奥に張り付いた。

胸が、恋してるみたいにどきどき痛いよぉ。でもそれは、もしかしたらここにいるみんながそうかも。麻子も華もゆかりんも、口を開かない。みぽりんも、無線に指示を出してからは押し黙ってるし。

位置的には先に、他の二輌が敵と当たって——私たちは最後になるけど。ううっ、どーなっちゃうの!?

だけど、やがて。
『こちら審判です。大洗女子、聖グロリアーナを一輌撃破！』
審判からの報告が入ったよ。うわお！
そして歴女チームからも連絡が。
『こちら、歴女の誇るⅢ突！　至近距離からの攻撃で、敵戦車の白旗を確認！』
「やった！　やったよっ、一台倒したって！」
私は嬉々として、車内のみんなに伝達する。
ううん、どうやら倒せたのは一台だけじゃないみたいで。
『……バレー部のスパイク、決まったぁ！　直撃ぃ～！』
続いてそんな声も、無線に届いた。わ、わっ！　二台もやっちゃったの!?
もちろん私はそのことも、みぽりんたちに告げようとしたけれど。
「！　待って、バレー部チーム！　審判から白旗判定が出るまでは、気を抜かないで！」
みぽりんが、喉につけたマイクに向かって警告した。えええ？
でも……それは遅かったみたい！　『きゃあー！』ってバレー部チームの悲鳴が？
「って、バレー部？　今の、バレー部だよね？　どーなったの!?」
私は咄嗟に聞き返した。
でも、返ってきたのはバレー部からのものじゃなくて。
『審判です。聖グロリアーナの反撃で、大洗女子の一輌を撃破！　白旗、確認しました！』

……嘘ぉ⁉

ううん、事態はこれで終わらない。続いて、混乱した歴女チームからの声が！

『やばいっ、見つかった！　……下がれ下がれ、下がれ！　って、なんで下がれないの？　ああ！　さっき倒した敵の車輌が邪魔に⁉　うわー！』

そして――ものすごい音がして、通信がぷつんって途切れちゃう。れ、歴女さんたちー⁉

『またもや聖グロリアーナが、大洗女子を撃破！　一輌が白旗です！』

審判からの正式な判定が、最悪の事態を告げた。

え、だって。これって、もう……。私はホワイトボードの端に追いやってた、マグネットの残りを確かめてみると。

「みぽりん……残ってるのって、私たちだけになっちゃったよ⁉」

敵が一つ減って、ブルーが四つ。こっちは……やられたのが三台で、動けないのが一台だから、Ⅳ号戦車を示す白が一つのみ⁉

「‼　向こうは何輌ですか？」

ゆかりんが確認してきた。私はホワイトボードで淡く光る、ブルーの輝きを数えて。

「四つ！　四台も残ってるよ！」

「……四対一か」

隣の操縦席で、麻子が言った。

圧倒的不利だよね？　私はつい、みぽりんのいる席を見上げる。

だけどみぽりんはいつの間にか、L型望遠鏡で外を見てた。
ううん、私も遅れてはっとなる。——エンジン音？　ゴゴゴ、って……他の戦車が、近づいてきてる⁉
「敵、接近！　囲まれたらまずい！」
みぽりんが車内に告げた。
「冷泉さん、とにかく敵を振り切って！　全速前進！」
「わかった」
うわお⁉　公園に隠れていた戦車が、麻子の手で急発進！　私は自分のシートにしがみついてるのがやっとだよ！
だけどその間にゆかりんは弾を込めて、華が「いつでも撃てます！」って準備をして。
「まだ撃たないで！　まずは……足で、敵を攪乱してから！」
そーだよ。こっちの強みって、もう速さしかないのよね？
そして操るのは、麻子なんだから！　——って、いきなり敵の一台と、鉢合わせしちゃったけど⁉　わわわっ！
「急旋回！」
みぽりんがペダルを踏んで、それに麻子がすかさず反応！　ぎゅがごごっ！　ってすごい音を立てて、Ⅳ号が回る。か、壁に、押しつけられるう～！
でも次の瞬間、外でなにか破壊音がした。撃った、んじゃないよね？
え？　真横で敵の戦車が、どっかのおうちに突っ込んでた！　うわ、いいのっ？

あ……補償が適用されるから、大丈夫なんだっけ。あは、は。
「いける！　いけるよ、冷泉さん！」
みぽりんが窓の隙間から、家を壊して動けなくなった戦車を見やる。
だけど、次の路地に入った瞬間。
「！　行けないぞ！」
「行き止まりじゃん！」
麻子が急停車させた。えええ？　これ――『工事中』の看板⁉
私はつい叫んじゃう。もちろんすぐに引き返そうとするけれど……あ、あれ？　なんかがんがん、戦車が周りの壁とぶつかってるし！
「狭いのですか？　大砲の先も、当たってます！」
前進と後退を続ける中で、華が慌てる。
「ちょ、超信地旋回ですー！」
難しい言葉を使うのは、ゆかりんだよ。でも「ダメ！」ってみぽりんが言った。
「Ⅳ号の性能じゃあ、その場で回転はできないの！　Uターンするしか！」
――そうこうしてるうちに、戦車の音がなんか、たくさん？
「しまった……！」
誰よりも周りを確認できるみぽりんが、外を見回して息を呑んだ。なに？　私は、いやーな予感しかしない。

状況は、すぐにわかった。だって看板で塞がった袋小路と反対側の、来た道に――敵の戦車が三台もいるんだもん!!

そして全車が、私たちのⅣ号に向かって、狙いを付けて。……ああっ、逃げられない⁉

ずどどどんっ!　って、一斉攻撃の音が、空気を揺るがして――。

でも。

『生徒会、38t参じょ……うわぁあああっ⁉』

私たちのⅣ号戦車が、がくがく揺れることはなくて。かわりに突然、そんな通信が入って途切れた。

なにが？　私もみぽりんも、唖然としながら巻き上がる砲煙の向こうを見ると。

あ、あれって!

「38t!」

みぽりんが、派手な金色のカラーを見て声を上げた。わ、わっ？

「生徒会チームです!　履帯を自分たちで直したのですか⁉」

そう察したのはゆかりんだよ。だけどその車体からは、ぴょこんっ、と白旗が出て……。

ああ、今のでやられちゃったの？

だけど、その確認なんていちいちしてる余裕がないよ!　ううん、復活した生徒会チームは、すぐやられちゃったけど……麻子が、どうにか反転するだけの時間を与えてくれ

て！
「撃ちますっ！」
言って、華が発砲した。それは３８ｔをかすめて、敵の一台にヒット！　うわ、やった？
だけど、まだ二台も残ってる！　ゆかりんがすぐさま次の弾を装塡して、華はハンドルで狙いを変えた。
その隙にも麻子が、３８ｔを盾にして、その脇をすり抜ける。袋小路から見事に脱出！
だけど。
「まだ引きつけて！」
みぽりんが指示を出した。もちろん敵の戦車が、私たちを追いかけてきてる。でも、撃たないよう華に命じて。
「今！　撃てー！」
「はい！」
華が、タイミングを合わせて撃つ！
ぐしゃんっ！　ってなにかが吹っ飛んだ。……ガードレールじゃん⁉
それはでも、弾が当たったわけじゃなくて。弾を食らった敵の戦車が、その弾みで突っ込んだみたい。みぽりん、これ狙ってた？
なんか足下にガードレールが絡んだ敵は、動けなくなったっぽい？　すごいっ。
残ったのは最後の一台、なんか……他の戦車とは、色と形が違うヤツ！

「あとはチャーチルです！　敵のリーダー戦車ですよ！」
ゆかりんがまくし立てた。リーダー？
あっ、そーいえば。あれってダージリン様の乗ってる戦車だよね？
そのチャーチルとかいうのから、Ⅳ号戦車は一度、距離を空けようとしたんだけど。
「また行き止まり⁉　……冷泉さん、全速後退！」
「後退？　わ、わかった」
麻子がみぽりんに従って、戦車をすごい速さでバックさせた。同時にみぽりんは、「砲を回頭！」って華にも告げる。
だって、真っ直ぐ下がったその向こうには――追いかけてきたチャーチルがいるんだもん！
「って、みぽりん⁉　どーするの！」
「……あっちが狙いを付ける前に懐に飛び込むの！　それで、超至近距離からの攻撃で、叩くっ！」
みぽりんはただひたすらに、チャーチルだけを見据えてた。
おお！　って反応するのはゆかりんだよ。
「ゼロ距離射撃、ですね！　くぅう〜！」
「歩兵戦車の分厚い装甲を抜けるかどうかわからないけど……やってみる！　お願い、五十鈴さん！」
「わ、わかりました！」

華はとっくに大砲を向けきってたけど、まだ発射しない。みぽりんからの合図を待つ。
それは、いつ？　……ぐんぐん接近する敵との中で、まるで時間がスローモーションに感じられた。
けれども確実に時は過ぎて、向こうの大砲も、ついには私たちを向いて。
――二つの轟音が、生まれた。
「って、きゃぁあああああ!?」
直後、私たちは戦車の中でシェイクされた。直撃だよ！　それがわかっちゃう揺れだった。
でも、こっちも当てた？　白煙が窓の外を包み込み、よく見えないけど。
相打ち、よね？
ううん――。ようやく晴れた煙の向こうにいたチャーチルは、少しへこんでいたけれど、どこにも白旗を上げてなくて。
『……大洗女子学園、先ほどの一輌と合わせて、最後の一輌も敗北！　白旗です！　全車輌走行不能。よって聖グロリアーナ女学院の勝利！』
やがて聞こえた審判からの無線が、私たちの敗北を教えてくれた……。

††

負け、ちゃった。

コンクリートで固められた大洗町の船着き場で、私たちのⅣ号戦車が、牽引されて運ばれてく。

ううん、Ⅳ号だけじゃなくて。

生徒会の38tも、バレー部のハチキュー式も、歴女チームのⅢ突もそこに続いた。

……一年生のM3だけは、自力でその後についてったけど。

確か途中で全員逃げちゃったから、壊されなかったんだっけ。戦車の扉を開けて顔を出す一年生が、しょぼんと肩を落としてた。

——それはもちろん、バレー部も歴女さんたちもそうだし、牽引を仕切ってる河嶋先輩とかも同じこと。

そして私やみぽりん、華、麻子にゆかりんも。汚れたセーラー服姿のまま、横並びで立ち尽くしてる。最初の訓練のとき、Ⅳ号だけはどーにか勝てたから……これが私たち五人の、初めての敗北なのよね。

けっこう、きついかも……。

「そりゃ、私たちは初心者だから……準優勝した学校に負けるなんて、普通なんだろーけどさ」

学園艦に運ばれてく、ぼろぼろの戦車たちを眺めながら、私はついそんな愚痴をこぼした。

あー、もー！　すごく今更で、みっともないだけなのに！

でも――。
「悔しい、ですね」
ぽつりと華が言って、きゅっと唇を噛み締めてた。
「当てましたもんね、五十鈴殿は！　あれは腕の差ではなく、車輛のスペック差です！」
ゆかりんが興奮気味に、瞳をうるうるさせた。
「……装甲が厚いぶん、敵は重くて遅かった。こっちのやれることは全部やったぞ」
けど麻子が冷静に言う。うぐ、ってゆかりんは黙っちゃう。
うん。ほんとはみんな、そんなことわかってて。
「それに聖グロリアーナは、結局四輛も残ってたから……」



みぽりんは、運ばれてくⅣ号たちに背中を向けてた。

そこには無事な、聖グロリアーナ女学院の戦車が四台、並んでて——遠巻きに大勢の人たちが、祝福の声を上げてた。

今の私たちには、絶対に得られないもの。ううん、中には「大洗もよくやったぞー！」なんて励ましもあったけどさ。

結局、こっちが倒せたのは、歴女チームが撃った一台きりだったみたい。

……Ⅳ号が引っかき回して、民家に突っ込ませたり、ガードレールにぶつけたりしたけど。それは別に、有効打にはならなくて——。

最後にこっちの弾を跳ね返したチャーチルから、ダージリン様が笑顔で声援に応えてた。

それはとても慣れた態度みたいで。だ、だよねー。きっと、いつもこんなふうに、圧勝してきてるんだろな～。

聖グロリアーナの四台の戦車は、広い港をゆっくりと行進する。きゃーきゃーファンの女の子たちがはしゃぐ姿は、まるでパレード？

だけど。

え？　チャーチルだけがそこから外れて、なんか私たちの方へ？

「隊長さんは、あなた？」

そして停まった戦車から降りて、ダージリン様が訊いてきた。真っ直ぐ、みぽりんに向

かって。
「あ、はい……」
ちょっとおどおどしながらも、みぽりんが頷いた。
と、ダージリン様はいきなり、ひょいと両手の平を見せてくる。な、なに？
「わたくし、この戦いでティーカップを壊してしまいましたの」
えっ。……あ、そーいえば！
戦車に乗り込むときも持ってた、あの紅茶のカップがない？
「まさかあなた方との試合で、こんなに追い込まれるとは思いませんでしたわ」
くす、とダージリン様は優雅に微笑んだ。
「あなた、お名前は？」
「に、西住……みほです」
「！　もしかして、西住流の……？」
答えたみぽりんに、ダージリン様がちょっと驚く。
はい、ってみぽりんはまた頷いた。ふえー、ほんとに西住流って、有名なんだね。
「そう。わたくし、あなたのお姉さまと戦ったことがあるけれど、こんな妹さんがいたとは……」
そして、みぽりんのお姉さんもだよ。ダージリン様がまた笑った。
「ずいぶんお姉さまとは違うのね」
「！」

でも、その言いように、みぽりんがなんだか体を強ばらせたみたい？　停車した
ダージリン様は振り返って、なんか軽く手を叩いたけれど。合図かな？
チャーチルの中から、赤い制服を着た一人が降りてきた。
手にはなんだか、重そうな籠を抱えてたけど……あれは？
「紅茶の缶？　そ、それもたくさんあるよ？」
私はついびっくりした。だ、だって。
「あんなに、戦車に積んで戦ってたんですか？」
ゆかりんも目を丸くしてた。だよねー。
「いつなんどきも、薫り高く戦うのが聖グロリアーナの信条ですもの」
でもダージリン様にとっては、当たり前のことみたい。
その籠を、なんとみぽりんに手渡した。え、ええええ？
「今日はありがとう。あなたのお姉さまとの試合より、面白かったわ。これは、その感謝の印」
「あ……」
「また公式戦で戦いましょう。ごきげんよう」
そう告げて、颯爽とダージリン様はチャーチルに戻っていく。
……プレゼント？　わざわざ、敵に？
その格好良さに、私たち五人はただ、呆然と見送るしかできなくて――。
「やるわね～」

って、そこにひょっこり現れるのは、生徒会長の角谷先輩だよ。わっ、いたの⁉
「聖グロリアーナ女学院は、好敵手と認めた相手にしか、紅茶を贈らないって話よー」
「そ、そうなんですか？」
みぽりんが籠を手に、あたふたした。へー、じゃあすごいじゃんっ！
「ええ、確かに……わたくしたちは負けましたけど。みほさんの指揮は、実に的確でしたもの」
華がようやく笑みを見せる。
「……敵を素直に認めるというのは、なかなかできないことだ」
麻子は、ダージリン様を褒めた。うん、確かにそーかも。
「昨日の敵は今日の友、ですね！」
ゆかりんが感激した様子で、拳を握った。
「次は勝ちましょう！　西住殿～！」
「そう、だよね」
みぽりんがぎゅって、重そうな籠を抱きしめて。
「次は……勝ちたいです！」
「ま～、その次ってのは、すぐだけどねー」
はい？　って、なに？　会長さんがみぽりんの横で、にやにやしてた。
「だっていよいよ、公式戦が始まるから。戦車道の全国大会！　もちろんエントリーはし

てるから。西住ちゃんには、抽選会にも出てもらうよ～」
「ええっ？　わ、わたしが、ですか？」
全国大会ぃ？　……いきなりの情報に、みぽりんも私たちも唖然とする。
「ところでそれとは別に、約束通りやってもらうよー。アレ」
ただ、その前に——。
会長さんが意味深に言った。アレ？
ま、まさか……。
「あ、ん、こ、う、踊、り！　あ、それとこういうのは連帯責任だからー」
……。は、はいぃぃぃ!?

『♪あ、アンアン。あ、アンアン。あんこう食べたきゃ大洗』
どどんがどん！
って、太鼓の音が鳴り響くよ～。
日が落ちてから——大洗の町で、ついにあんこう祭が始まった。
いつもならさ、華とかと夜店であんこう鍋食べ歩いたり、素敵なカレからのお誘いを待ったりするんだけれど。
……あああああああ！　やっちゃったー！
「も、もうお嫁にいけないい～！」

町の、Ⅳ号戦車で乗り込んだ公園。そこに簡単な櫓が組まれて、私たち五人はあのあんこう踊りをさせられてた。
ダサい！　ダサいよ！　音頭自体もそーだけど……振り付けも、そして恰好もー！
なんでっ、全身黒タイツで頭にちょうちんつけないとダメなのおお!?
乙女なのに、体のライン出ちゃうし！　……って、問題はそこじゃないけどー！
「これは、これはっ」
初めて振り付けを覚えたみぽりんが、さっきから真っ赤になってぎくしゃくしてた。
うん、みぽりん。踊り、全部左右逆になってるよ……。
「し、仕方ありませーん！」
ゆかりんが何度目かの、「仕方ない」発言をした。
「恥ずかしいと思えば、余計に恥ずかしくなります！」
吹っ切ってるのは華くらい。なんか、すごく真面目に踊ってる！　うあー、そ、そうなんだけどお〜。
一方、麻子ときたら無言で、てきとーに流して踊っちゃってたけれど。
ううん。こんな恥ずかしい踊りをさせられてるのは、私たちだけじゃなくて。
「な、なんで自分たちまで……！」
「それは、会長命令ですから……」
河嶋先輩と、副会長の小山先輩までもが、一緒に輪になって踊ってた。

もちろん恰好だっておそろいだよ！　でも河嶋先輩は無表情で、振り付けは完璧！
小山先輩も意外とうまかったりする。……目線は常に、ばいんばいん跳ねてるおっきな胸にいっちゃうけどさ。
で、自主的に楽しんでる人が、なんと、一名。
「あんこうの構えはこうだぞー。こう～」
構えって、なに⁉　生徒会長の角谷先輩が、ノリノリで踊ってた。しかも相変わらず、干しイモを齧りながら！
ほんと……自分から進んでこんな恰好するだなんて、それだけでも奇特だってばー。
――なんて、思ってたんだけれど。あ、あれ、あれ？
あれは……。



「あの、西住隊長！」
私たちと同じく、全身黒タイツにちょうちんをつけたコたちが、見物客の向こうから走ってきた。
一年生の六人と……バレー部に、歴女さんたちもいる？　ひー、ふー、みー。……たぶん、全員⁉
そのうちの一年生の代表者が、みぽりんの前で「せ、せーのっ」って合図して。
「すみませんでした！」
六人が一斉に、ちょうちん頭を下げた。
えっ、てみぽりんは踊りの途中で固まっちゃうけど。
「戦車を放り出して逃げたりして……今日はほんとに、迷惑かけました」
「先輩たち、かっこよかったです」
「すぐ負けちゃうと思ってたのに……」
「わ、わたしたちも次はがんばります！　だから！」
一年生の女子たちが、口々に言ってから、「きゃあ！」と気合いを入れて輪に入った。
このコたち、わざわざ、一緒にあんこう踊りを？
ううん。一年生だけじゃない。バレー部も歴女さんたちも、そこに加わる。そのために、同じ恥ずかしい恰好をしてきたんだもん！
「今度はすごいブロック、見せちゃいますよ～！」

「必勝の信念を持つのは、勝利の機会を得ること！　まさに名言！」
……歴女さんの言ってることは、やっぱりよくわかんなかったけどさ。あは、は。
でもきっと——私たちの気持ちは今、一つだよね？
「次はもっとがんばるよー。大会でリベンジだー！」
会長さんが踊りながら、おーっ、って頭のちょうちんを揺らした。
だね！
私もみぽりんも、華（はな）もゆかりんも麻子（まこ）も、もちろんみんなも笑顔になる。
『♪あ、アンアン。あ、アンアン』
この間抜けな踊りさえなければ、もっと締まったんだけどね……。
お願い。こんなこと、一度も考えたことなかったけど……今だけは絶対、イケメンさんと出会いませんよーに！

■6　ついに一回戦、だよ！

聖グロリアーナのでっかい学園艦は、早々に大洗町の港を離れていっちゃったけど――私たちの学園艦は、補給のため数日間停泊する。
だけどその最終日になって、私とみぽりんとゆかりんの三人は、生徒会の三役と空の上にいたり？
――生徒会がチャーターした、自衛隊の大型ヘリコプター。セーラー服のままそれに乗って、なんと隣県にまで来ちゃったの！
そこは海のない、埼玉県。で、ヘリはでっかいスタジアム前の、広場に降りた。
他にもたくさん、同じようなヘリコプターで占拠されたそこは……。
「来たよ！　さいたまスーパーアリーナ！」
ヘリからぴょんと外に出て、私はのびをしながら銀色でガラス張りの施設を見上げた。
「うー、お尻痛ーい！　戦車のクッション持ってくればよかったぁ～」
「ですねー。でもけっこう都会ですし、近くで買えそうですよ？」
ほら、と近くの駅ビルを指すのは、デジカメ片手のゆかりんだよ。……もっとも彼女はさっきから、ずらりと並ぶ他のヘリを夢中で撮ってたんだけどさ。
「そこ、遊びに来たのではないぞ！」
そんな私たちを見咎めるのは、やっぱり河嶋先輩だったり！　片眼鏡をくいっ、て直し

て睨んだ。ひょえー。
その横で資料を手に、胸を揺らして入り口を確認するのは、小山先輩だった。
「あっちが正面入り口ですね。まもなく始まりますし、急いで受付を済ませましょう」
「は、はーい」
そーでした。私たちは素直に従って、スーパーアリーナへと向かった。
入り口の自動扉の脇には、『第63回戦車道全国高校生大会』の看板が！
そう。私たちは今日、ここで行われる「組み合わせ抽選会」に来たのよね。
って、私やゆかりんは単に、付き添いってだけなんだけどさ。
抽選会でくじを引くのは、我らが戦車隊の隊長、みぽりんで――。
「や、やっぱり、やめません？　わたしが、代表だなんてっ」
そのみぽりんたら、ぎくしゃく歩きながら、泣きそうな顔で会長さんにすがりついていた。
「だってわたし、くじ運悪くて」
「どこと当たってもいいよー。勝てばいいんだからさ～」
緊張するみぽりんとは逆に、生徒会長の角谷先輩ときたら、ずっとこの調子なんだけどね。
……だから結局、私やゆかりんに目で助けを求めてくる。
「もーしょーがないなあ。行こっ！」
はい、と私はみぽりんの手を取ってあげた。

さらに背中を押すのは、ゆかりりんだった。
「大丈夫ですよ、西住殿～！　うちのチームに西住殿ほどふさわしい代表はいませんからっ」
「ううっ、そ、そうじゃなくてぇぇ……助けて、五十鈴さん！　冷泉さーん！」
終いにはみぽりんたら、ここにいない二人にまですがろうとする。
残念ながら、華は大洗町にある実家から、急に人力車で迎えが来ちゃって。それで、どーしてもついてこれなかったのよね。
んで、麻子の方はというと、最初から来なかったよ。……出発が、朝だったもん。うん、まず起きてくるわけがないよー。
そんなこんなで、私とゆかりりんの二人で、みぽりんをつれて会場入りしたんだけれど。
わ、わっ⁉
「……人、多いね～‼」
スタジアムの中は、けっこうな人だかりじゃん！
数百人くらいいると思う！　それぞれが私たちみたくセーラー服かブレザー、もしくは専用の戦車道の制服姿だった。
私は思わず見回して。
「うわお。イケメンいないかな～……って、女の子ばっかりじゃない⁉」
「それは、そうですよ。だって戦車道の抽選会ですし」
もっともなことをゆかりんが言った。あー、だよね。戦車道は乙女の、競技だもん

ね……。
　そして大勢の女の子たちが取り巻く真ん中で、ステージが組まれて、抽選が始まるみたい。取り仕切ってるのは主催の、日本戦車道連盟の人たちかな？　でっかいボードに番号だけを割り振ったトーナメント表を貼り付けて、くじの箱を用意してた。
　あそこに代表者が上がって、抽選するわけねー。私もゆかりんも、生徒会の人たちも初めてのことだから、ついきょろきょろした。
　さっきまであんなに騒いでたのにね。
　だけど、みぽりんは……うん？　不思議と、ぼーっとしちゃってる？
「どしたの、みぽりん？」
「あ……。う、うん。またここにこれたんだ、って」
「？　一回来たことあるの？」
「……。うん」
　って、みぽりんが小さく頷いたとき。
「まさかとは思ったけど……また、ここで会うなんてね」
　ふいに、みぽりんに声をかけてきた人がいた。
　え？　私もゆかりんも、みぽりんと一緒に反応しちゃう。
　そこにいたのは——黒いジャケットの制服を着た、女の人。
　私やゆかりんの知らない人、なんだけど。なんだか、その顔にどこか見覚えがあったのよね。……みぽりんに、似てる？

「お姉ちゃん……」
その答えをみぽりんが口にした。お、お姉さん!?
じゃあこの人が、国際大会の選手にもなった、戦車道の達人で――!
名前は確か、まほさん？　そのお姉さんの前でみぽりんたら、すごく萎縮しちゃってる？　顔も見れなくて、ずっとうつむいたままだよ。
なにか言ってあげたかったけど、どーにもそんな雰囲気じゃなくって。
かわりにまほさんが、側にいる私たちのこと、ちらりと見た。
「大洗女子……。そう、無名校に行ったのよね」
手にした紙にも目を通して、私たちのことを確認する。あ、受付でもらった参加者名簿、だよね。
でも。
「腕に覚えのない学校は大会に参加しないのが、戦車道の暗黙のルール……だなんて、うちの副隊長のエリカあたりは言うでしょうね。『無様な戦い方をまたして、西住流の名を汚さないように』とか」
「!」
びくん、ってみぽりんが震えた。
なに？　そんな言い方って、いきなりないじゃん!?
「ち、ちょっとおねーさん!　いくら姉妹だからって……失礼だよ!　みぽりんは私たちのチームで、一番なんだからね!」

だから、気付いたときには噛みついちゃってた。あ、あらー？　みぽりんもゆかりんも、びっくりして目を丸くしてる。ええい、もう、いくとこまでいくよ！

「なにがあったのかは知らないけどさ！　……もしそっちと当たったら、絶対、負けないから‼」

「た、武部さんっ。あの！」

「？　なに、みぽりん。みぽりんもさ、こーゆーことはちゃんと言い返して」

「お姉ちゃんの学校、黒森峰女学園は……去年の、準優勝校だから」

「へ？」

「それに、その前までは九連覇してて。それを止めちゃったのが……」

わたしで──なんて、みぽりんがごにょごにょ言った。え、えっ？

それは初めて聞く事実。でも、なにかあったんだろーな、って漠然と感じてたこと。

私は、なにも言えなくなった。だってみぽりんがほんとに、泣きそうになってたから。

だから最初、あんなに戦車道を嫌がってて、お姉さんの話題にも触れなかったの？

でもそのお姉さんは今、目の前にいて。

だけど、ふいって背中を向けた。

「がんばりなさい」

それだけ告げて、すたすた去っていく。

私もみぽりんもゆかりんも、なにも言えずに見送るしかできなくて。

「こら！　ちゃんとついてこい！　大洗はア行だから、もう呼ばれるぞ！」
　かわりに、いつしか離れていた生徒会の三人が返ってきた。河嶋先輩がみぽりんの腕を掴んで、ステージへと引っ張ってく。
『次！　大洗女子学園！』
　それと、ステージ上からマイクで呼ばれたのは同時だった。
「ほら、西住ちゃん、引いてきてー」
　会長さんが背中をぽんとプッシュして、みぽりんを押しやる。わたわたしながらもみぽりんが、ステージの階段を上がった。
　そしてくじの箱に、手を入れて――。
『……大洗女子学園、８番！』
　進行係の人がマイクで、くじの結果を伝えてくる。
　すると後ろのトーナメント表の「８」のところに、『大洗女子学園』って書かれたプレートがかけられた。
　その対戦相手となる「７」のところは、まだ空欄で。
　ステージから降りてきたみぽりんが、ふらふらと戻ってきたとき――。
『サンダース大学付属高校、７番！』
　私たちの対戦相手が決まっちゃった！　すると「Ｙｅａｈ――――！」っていきなり、大勢の歓声が？

声を上げたのはステージに立つ、カーキ色のジャケットを着たコと、同じ恰好の人たちだよ。
たぶん、あれがサンダースなんちゃら校？
「サンダース大付属高校……初戦から強豪ですね」
そう言ったのは、持ってきた分厚いファイルを開く、小山先輩。
「そんなに強いんですか？」
ゆかりんが訊いた。「強いって言うか」って、小山先輩は胸を揺らして。
「……すごくリッチな学校で、戦車の保有台数が全国一なんです。チームも一軍から三軍まであって」
一軍、三軍？　確かに……ここに来てるメンバーだけでも、けっこうな数がいるみたい？　ふぇー。
はっ、とするのはみぽりんだった。
「公式戦の一回戦って、確か戦車の数が限定されてましたよね？　十輛まで、って……。
それに、砲弾の総数も決まってて」
「十って、う、うちの倍じゃん！」
私も単純な問題に気付く。それって……。
「うちは五台きりだから、五対十になっちゃうの？　そんなのっ」
勝てないいんじゃあ。その言葉だけはどうにか、喉の奥に引っ込められたけど。

同じことを、ゆかりんも思ったみたい。

「気負わずにいきましょう、西住殿〜！」

そう言いながらも肩に力が入った様子でトーナメント表を見上げて、なんだか拳を握ってた。

でも。

「全国大会……出場できるだけで、ワタシは嬉しいです。他の学校の試合も見られますし。大切なのはベストを尽くすことです！　たとえ、負けたとしても」

ゆかりんが楽しそうに笑った。

あ……そっか。

やるだけのこと、やるしかないよね！　私たちってばさ。

だけど。

「それじゃあ困るんだよね〜」

なんて言ったのは、ツインテールをぴっと指で弾いた会長さんで。えええ？

「絶対に勝て！」

河嶋先輩が目くじらを立てた。な、なんでー？

「どうしても勝たなくてはいけないんだ、我々は！」

「そうなんです。だって、負けたら……」

そこに小山先輩までもが続く。はい？

意味がわからず、私もゆかりんもみぽりんも、きょとんとしちゃうばかりだけど。

「そりゃ、負けたらまた、なにかやってもらうからね～」
にやにやしながら、会長さんが言った。
それって……まさか。また、あんこう踊りみたいなの!?
「や、やだあああああ！　もうあんな恥ずかしい思いはやだよぅ！　モテなくなっちゃう！」
「まー、すべては西住ちゃんの肩にかかってるから。そーゆーことで～」
ぽんぽん、って会長さんはみぽりんの肩を叩く。そして生徒会の二人を連れて、「んじゃ相手さんに挨拶だけして帰ろっか」って離れていった。
だけど残った私たちは、その場から動けなくて。
「だ、大丈夫ですよ。がんばりましょう！」
ゆかりんが、プレッシャーでうつむいたままのみぽりんを励ました。
あれ？　……違う、みぽりんはぶつぶつなにやら、真剣な顔で呟いてて。
「初戦だから、ファイアフライは出てこないと思うけど。でも、正攻法じゃ勝てない……数が多すぎる。なんとかして敵の裏をかかないと」
分析、してる？　私もゆかりんも、思わず目を合わせた。
さっすが、みぽりん！
けど、みぽりんたらすごく難しそうに眉を寄せてる。だ、だよね。そう簡単に対策が見つかれば、苦労しないよぉ。
「せめて、情報が。チームの編成くらいわかれば、戦いようも……」

「情報、わかればいいんですよね？　……考えがあります！」
ヘリコプターで帰る間も、ずっと悩んでたみぽりん。
その彼女に、大洗町でヘリを降りて……連絡船で学園艦に戻ってきてから、いきなりゆかりんが言った。ええっ？
「秋山さん？　どうするの？」
もちろんみぽりんが尋ねる。でも、そのときにはゆかりんたら、町のあるデッキへと登ったリフトから飛び出して。
「楽しみにしてくださいね！　成功するかはわかりませんが、いえ！　きっと吉報をお届けします！」
なんて、敬礼だけして行っちゃった。
夕闇が迫る中――生徒会の人たちも、私もみぽりんも、ぽかんと見送るしかなくて。

――ところがそのゆかりんたら翌日、学校に顔を出してないの！
クラスが違うからさー、戦車道の練習がある放課後まで、まったく気付かなかったんだけれど……。
「一名足りていないとは、たるんでいるぞー！　その秋山優花里本人からは、メールも電

話も返ってこないし。ええい、とりあえず捜してこーい！」

なんて河嶋先輩に怒られて、私に華、みぽりんと麻子は練習から追い出された！

と、いうわけで――私たち四人は戦車の走るグラウンドを離れたわけだけど。

「やっぱり、電話に出ないよ、ゆかりりん」

学校のメインストリートで立ち止まり、私は鞄からケータイを出して、今日何度目かの確認をしたけどさ。

うーん、ダメ。なんか、ずっと「圏外」って出るのよね。

麻子のときとは違ってて……やっぱり、なにかあったのかな？

「武部さん、メールは返ってきた？」

みぽりんも、自分のケータイ片手に訊いてくる。

ううん、って私は首を振った。

「ぜんぜん。なんでだろー」

「どうしたんでしょう、秋山さん……」

華がすっごく心配そうな顔をしてた。麻子もその後ろで、ケータイをポチポチいじってる。ゆかりりんにメールでも打ち直してるのかな？

信じられないよ。あの戦車道大好きのゆかりりんが、練習休んじゃうなんて！

風邪でも引いたのかな、なんて思ったけど、だったら私たちにメールの一つくらいはくるよね？

もしくは学校に、「体調不良で休みます」って連絡は入れるだろうし。どーなんだろ？

「考えがありますす、とかって、昨日別れ際に言ってたけどさ」
もしかしてそれが関係するのかな？　私はみぽりんと顔を見合わせた。
それって、と息を呑むのは華だった。
「抽選会より帰ってきてから、のことですか？」
そーいえば華と麻子には、あの後だいたいのことをメールした。
もちろん同じクラスの華とは、昼食時とかにもその話をしたんだけれど……。
「んー、とりあえずここで悩んでてもしょーがないし。こうなったらゆかりんとこ、行くしか！　……で！」
「秋山さんって、どこの寮に住んでるの？」
根本的なことを、みぽりんが尋ねてきた。
転校生のみぽりんが知らないのは、しょうがないよね！　で、華は？　ふるふると、首を横にふった。
もちろん私も、知らないよー。だって同じクラスになったことないもん!?
最後の頼みは麻子なんだけど。
……答えもせずに、まだケータイいじってる？　これは、知らないって反応だよね……。
「えい、じゃあまずは職員室に行こっ。ゆかりんとこのセンセーに訊けば、きっとわかるよ！」
「その必要はないぞ」

私がみんなと一緒に、普通科の校舎の中に行こうとしたとき――え？　麻子？
ほら、と麻子は私たちにケータイを見せてくる。
なに？　……画面に表示されてたのは、この町の地図みたいだけど。麻子ったらメールしてたわけじゃなくて、ネットに繋いでたの？
「！　えええっ、なに、ここっ？」
そして私はびっくりした。その地図の中心にあったのは――。
「秋山は寮制の大洗女子の中で、珍しく自宅組だ。お前たちと違って帰り道が近いから、そんな話をしたことがある。で、その家がここだ」
麻子の示したそこに、『秋山理髪店』って文字が！
って……床屋さーん!?

「あった。あそこだな」
「！　なんだか、かわいいお店～」
ケータイ片手に前をゆく麻子が見つけて、みぽりんが興奮気味に駆け出した。
おー。後に続く私と華も、発見する。『秋山理髪店』の文字！
「ほんっとに、床屋さんなんだ。ゆかりんちって」
「そうですね」
ほう、と華もちょっと見とれちゃう。
外観は、昔ながらの、って感じかな？　二階建てで、一階がお店なのね。正面についた

大きな窓から、中が見えた。
そこには理髪店らしく散髪台が二つあって、お客さんで埋まってる。一人はおばさんで、パーマを当ててる最中みたい。で、もう一人のおじさんは、ヒゲを泡だらけにされちゃってた。
そしてパンチパーマの男の人が、きらーん、ってカミソリを持ってて。
「すみません」
そこにドアを開けて、みぽりんが入っていった。おっと、ってな感じで男の人が手を止める。
「はい？　あんたたちは……」
「あ、あの。ここって、秋山さん……優花里さんのおうちですか？」
「ええ。優花里はうちの娘、だ、け、ど」
ごくり。みぽりんの言葉になぜか、パンチパーマの——ゆかりんのお父さんが、喉を鳴らした。へ？
「まさか、あんたたちって、優花里の？」
「？　友達です」
わかるでしょ？　って私は、大洗女子のセーラー服を示す。
すると——。
「と、と、友達⁉　か、母さーん！　母さん！　優花里の友達が来てくれたぞ！」
ちょっと怖そうだったお父さんが、ぱあっ、って明るい顔になって声を飛ばした。

蒸しタオルを持って、奥から細身の女の人が「あらあら」と出てきたよ。……ゆかりんのお母さん？

「お父さん、落ち着いて」

そのお母さんに蒸しタオルで顔を拭かれても、お父さんたら興奮が収まらないみたい？

「だってお前！　優花里の、友達、だぞ⁉」

だけどお母さんの方は、すごく穏やかで。

「わかってますよ。みなさん、いつも優花里がお世話になってます」

軽く私たちに、会釈してくる。そんなの、私たちも恐縮だよ～。

でも、お父さんの反応はそんなもんじゃなくて。

「お世話になってます！」

がばり！　ってお客さんも放っておいて、その場で土下座しちゃった！　ええええ？

「あ、あのっ」

さすがに、これは。華(はな)が見かねて、口を開きかけたけど。

「優花里、朝早くうちを出て、まだ学校から帰ってないんですよ。どうぞ、二階で待っててくださいな」

お母さんがふいにそんなことを告げて——はいぃ？　私たちはつい、なにも言えなくなった。

……どーゆーこと⁉

私たち四人が通されたのは、二階にあるゆかりんの部屋だった。
カーペット敷きの六畳ほどの空間なんだけど、うわー。戦車の車輪が飾ってあるし、ピカピカの砲弾まであるよ！　他にも戦車のポスターはもちろん、棚には戦車のプラモがいっぱい！
ついつい私たちは、見回しちゃう。
そこに「どうぞ」って、ゆかりんのお母さんが座布団とお茶菓子を持ってきてくれた。かりんとうとか、なんだか懐かしいのがいっぱい～。
で、その後ろからお父さんが、飲み物をお盆に載せて運んでくる。人数分のコップに注がれてたのは、サイダーかな？
「あの。どうぞ、お構いなく」
みぽりんがそう言って、私たちもぺこって頭を下げた。
んでも、お父さんったらそわそわして。
「あ、よかったら待ってる間に散髪、しましょうか⁉」
って、えええー？
「お父さんはいいから」
びっくりする私たちの前で、お母さんが笑顔でお父さんを追い出した。あ、あらら。
でもお母さんの方も、なんだかすごく恐縮してて。
「すみません。優花里のお友達がうちに来たのなんて、初めてなもんで……。何しろずっと戦車、戦車で。気の合うお友達がなかなかできなかったみたいで……戦車道のお友達が

できて、ずいぶんと喜んでたんですよ」
え、そーなの？　私たちは思わず、互いに顔を見合わせる。
「じゃあごゆっくり」
って、お母さんはそのままふすまを閉めちゃった。
……ゆかりん、いつも明るいけど、そんなことあったんだね。
でも。
「いいご両親ですね……」
華がぽつり。うん、だよね。私も頷く。
プラモが飾られてた棚の上には、写真が貼られたコルクボードもあった。そこには高校に入学したゆかりんが、ご両親と写ってるのとかがある。
それを見て、麻子はちょっとうらやましそうにしてたかも。
――私は幼なじみだからよく知ってるけど、麻子の両親、もういないから……。
この話は、触れないようにしてる。みんな、いろいろあるのよね。
そーいえば、華だって。昨日メールしたときに、ついでに「実家からの呼び出し、どうだった？」って訊いたけど。
どうも、ちょっとややこしいみたい。もともと華ってば、華道をやってるお母さんに、戦車道を始めたこと秘密にしてたようで。
それが、この前の大洗町での練習試合でばれちゃって。「家元を継ぐには必要ない」とかなんとか。

「大反対されたけれど、わたくしは戦車道をやります。もっと力強い、お母様が納得できる新たな花を、いつか活けられる気がするから」
華はそんなこと、言い返したみたいなんだけどね。
「ま、とにかく！　せっかくだから、いただいちゃおっか？　……って、ゆかりんほんとに、どこ行ったのかわかんないけどさ」
「ほんと、いったいどこに？」
みぽりんも首を捻ったけれど、どうしようもないよ。
だから私たち四人は座布団に座って、お茶菓子に手を伸ばして——。
うん？　なに、今の音？　がらって、窓が？
……あああああ！
「よいしょ、っと……わわ、み、みなさん⁉」
「ゆかりん！」
私は思わず声を上げた。だって、だって！
少しすかされてた、二階にあるこの部屋の窓。そこを開けて中に入ってきたのは、ゆかりんだもん！
それも、なに？　赤と青の組み合わさった制服着てる？　なぜかぼろぼろだけど、それって……。
「コンビニの、『サンクス』の制服じゃん？　えええ、いったいどーしてっ」
「みなさんこそ、どうしたんですか？」

「それは、秋山さんの方だよ！」
みぽりんがさすがに反論した。だ、だよねー。
「連絡がないのを心配して、みんなでおうちまで来てしまったんです」
華（はな）も言って、麻子（まこ）がうんうん頷（うなず）いてた。あ！　とゆかりんがさすがに察して。
「すみません、ケータイの電源を切ってて……」
「つか、なんで玄関から入ってこないのよ⁉　どーやって二階から？」
ほんと、びっくりしたんだから！　私は思わず噛みついた。
だけどゆかりんたら、しーっ、と人差し指を一本立てて。
「……いえ、そこの雨樋（あまどい）を伝って、ですね。こんな恰好（かっこう）だと、父が心配すると思って」
あ、確かに。私たちは納得する。だってなぜかゆかりんの服は、あちこちが汚れて、破れたりしてて。
「でも、ちょうどよかったです。見ていただきたいものがあるんです！」
そのゆかりんが、制服のポケットからなにかを出した。
ん？　メモ帳？　それを渡され、みぽりんが不思議がりながらも、ぺらぺらと何枚かをめくるけど。
すると、「！」って息を呑（の）んだ。な、なに？
「シャーマンA1型、A3型、A6型……これって、まさか！」
「あ、そっちじゃないです。それは保有車輌（しゃりょう）の走り書きで……。もう少し後の方に、出場車輌（しゃりょう）のメモがありますので」

「⁉　ファイアフライ一輌にシャーマンM4A1／76㎜砲搭載型一輌、M4／75㎜砲搭載型八輌の組み合わせ。それらで三輌ずつ小隊を組んで、フラッグ車のA1型は単独行動？」

　ゆかりんの言うとおりのところを読んで、みぽりんたらいっそう目を丸くしてる。

「サンダース大付属の、情報です！」

　笑顔になるのはゆかりんだった。って、ええー⁉

「ど、どーやったの、ゆかりん⁉」

「それは……これです。変装して、コンビニエンスストアの定期便に乗り込んだんです。ほら、あれは一日に何回か、頻繁に学園艦間を行き来しますから。この衣装、自作なんですよー」

　なんて、ゆかりんはぼろぼろのコンビニ服を自慢した。

「そうやって、サンダース大付属の学園艦に潜入してきました！　はい！」

「……なんという無茶を」

　さすがに麻子も呆れてる。当の本人は「がんばりました！」って、すっごく楽しそうだけどさ。

「いいの？　こんなことして⁉」

　私はそこが、すっごく気になったけれど。

「試合前の偵察行為は承認されてます」

　ゆかりんがきっぱり告げた。あ、あー、そうなの？

「もちろんばれて捕まった場合は、捕虜として試合が終わるまで解放されなかったりしますが……。やー、どうにか逃げてこれました！　途中でサンダース大付属の制服に着替えたんですけど、ばれちゃって。もーその後はコンビニ定期便に乗り込むまで、大変でしたよ～」

ほら。とゆかりんが、自分の恰好を改めて見せてくる。

なるほどー。ぼろぼろなのは、そのせいなのね？

「でも、有益なデータは得られたかと！　西住殿、どうか参考になさってください」

「そのために、わざわざ、危険を冒して？　……秋山さんっ」

メモ帳をぎゅっと握って、みぽりんがうるうるしちゃった。

「ありがとう……。秋山さんのおかげで向こうの構成もわかったし、がんばって戦術立ててみる！」

「昨日の今日で、すごいよゆかりん！」

「それはもう……兵は拙速を尊ぶ！　ですから」

褒めた私に、制服に着替え中のゆかりんがなんか難しいこと言ってきた。ううん？　たぶん、みんなもわかってないと思うよー。

でも、なにはともあれよかったよかった！

「それにしても、無事でなによりです、秋山さん」

華が心底安心してた。

「ケガはなさそうだな」

麻子(まこ)がゆかりんの体にぺたぺた触れて、確認する。
「心配していただいて恐縮です。わざわざ家まで来てもらって……」
くすぐったそうにしながらも、ゆかりんは嬉(うれ)しそうな顔になった。
でもきっと、一番喜んでるのはみぽりんだよね！
「一回戦……必ず突破しよ！　みんな！」
メモ帳を胸に抱いて、私たちの顔を次々見回した。
うん！　もちろんみんなの気持ちも、同じだよー。
「おー！」
私たちは元気に、ゆかりんの部屋で声をそろえた。
……そう。私たちは今度こそ、勝つんだから！



その日のうちに私たちは、ゆかりんをつれて学校に戻り——練習を終えた他のメンバーと合流した。

それは、「あること」をみんなで決めるため。

ううん。私たち五人と同じように、他のコたちも「強くならなきゃ」って考えてて——。

だから。

【蝶野教官様。どうしても勝ちたいので、徹底的に鍛えてください！　大洗女子学園戦車道選択者一同】

ってメールを、教官に送信したの！

おかげでやってきた教官ったら、鬼になっちゃったけどね……。

『砲塔の動き、遅いわよ！　もっとキビキビ回すー！　私が敵ならこの間に、すでに三回はキルしてるわ！』

『走って、止まって、ズドーンと当てる！　走りながら撃っても、まず当たらないわ。相手も動いてるんだから。でもこっちだって動いてればまず当たらないの！　ただし、単調な動きだと読まれてボカンとやられるわよ〜！』

『逃げる戦車は敵よ！　逃げない戦車はよく訓練された敵よ！』

『口から弱音を吐く前と後に、マムをつけなさい！　……なーんて、一度言ってみたかっ

たのっ』
　まむ！　いえす、まむ！　通信機越しに聞こえる指示に、もー私なんかいっぱいいっぱい～。
　でもそうやって毎日、教官が付き合ってくれたおかげで、五台の戦車の動きはなんだかキビキビしてきたみたい？
　第一試合を明日に控えた、練習最終日には——もう縦でも横でも、教習所のＳ字でも、ぴたりとそろって走れるよ！　わお。
「お疲れ様～。短期間ではあったけれど、最後までよくついてきたわ！」
　へとへとになりながらも、どーにか学校のグラウンドまで戦車で戻った私たちを、ヒトマル式戦車の上から蝶野教官がねぎらった。
「あとは試合にどーんと全力をぶつけなさい、どーんと！　私も今回、連盟所属の審判として参加することになったわ。もちろん公平にジャッジはするからね、よろしく！」
　え？　審判に？　とか、もう疲れすぎて誰も反応できなくて。
「あ、ありがとうございました～～」
　戦車の中から這い出してきて、くたくたの敬礼しながら、そー言うのがやっとだった。
　そして教官がいつものように、戦車に乗って帰ってく。
　私たちはしばし五台の戦車の周りで、やっぱりくたっとしてたけどね。うー、夕闇が迫ってくるこの時間……凪なのよねー。もちょっと学園艦に風が吹いてくれると、涼しくていいんだけどな～。

なんてことを、ぼんやりと考えてたとき。
「あのっ、戦車道のみなさん！　ぎりぎりでしたけど……人数分そろいました！」
わらわらと、グラウンドの端でへばる私たちの方にやってきた、女の子たちがいた。
へ？
数人で段ボール箱を運んできた彼女らの顔は、よく見たら知ってる。この間、私たちの採寸をしてくれた、被服科のコたちじゃん！
あ。ってことは——。
「どうぞ、納品の確認、お願いします」
ぺこりと頭を下げた被服科の一人が、段ボール箱を開けた。
中から取り出すのは……わ、わっ！
「パンツァージャケットです！　ワタシたちの！」
ゆかりんが一気に元気になった。ネイビーの上着に、スカートはまぶしいホワイト！
それらはもちろん、全員分が用意されてて。私たちは疲れも忘れて、わっ、て飛びついちゃったよー！
「なんだか、気が引き締まりますね」
自分の制服を手にして、華が言う。うん！
「……ついに、明日なのだな」
麻子は、いつになく緊張してる？
「また午前中に起きなければならないのか……憂鬱だ」

……。あ、あのねえ。一回戦の会場入りは、十一時からだよ？　十分余裕あるってば〜。

「でも、やれるだけのことはやってきたから」

みぽりんがさっそく、セーラー服の上から上着に袖を通してた。――ううん、通そうとして通らなくて、「あう⁉」ってよろめいてたけどね。

「み、みぽりーん。セーラー服脱がないと、着れないよ〜。あはは」

私は、明日にとっとこ！　制服を大事に折りたたんで、抱え持った。

そう――もう明日、私たちの大会が始まるんだね！

私はつい、紺色に染まってくる、風のない空を見上げた。

ううん。風が出てきたよ。かすかに足下が揺れた気がしたのは、学園空母がゆっくりと動き出したから？

明日の試合会場となってる、南方の小島へと……。

7　情報戦だよ！

ぱぱん！　ぱん、ぱん！

──『第63回戦車道全国高校生大会・第一回戦』の会場となった小島に、昼間から花火が上がったみたい！

プレハブの更衣室の中にいた私たちからは、音くらいしか聞こえなかったけどね。

というか……みんな、そんなの気にしてる余裕、ないかも？　セーラー服から、昨日できあがったばかりの制服に着替えるだけで、てんやわんやだよ～。

だって、だって！

「どーしよ～！　テレビ来てる⁉」

応援席の仮設スタンドを見てきた一年生の誰かが、そんなことを言ったから──そりゃみんな慌てちゃうってば！

「髪の毛、変じゃない？」「あたしのスカート、どこ⁉」「リップ持ってきてなーい！」

誰か貸して～！」「眉！」「眉整えてないよーっ」「やだっ、昨日寝れなくてニキビが‼」

「あたしの、スカート～！」

とか、もう大騒ぎ！

もちろん私だって、ネイビーのジャケットを着て、何度だってチェックしちゃう。

うー。このロッカーについてるミラー、小さすぎじゃない？

でもでも、グロスは完璧（かんぺき）だし。ばっちり、ナチュラルな感じに仕上がってるし！　えへへっ。
「はあ～、どーしよ！　テレビ見てたイケメンさんたちが私に一目惚（ひとめぼ）れしちゃって、ラブレターがまとめていっぱい来ちゃったら⁉」
「……一人、じゃないんですね」
つい漏らしちゃった呟（つぶや）きに、とっくに着替えた華（はな）が隣で苦笑した。
もっちろん、でしょ？
「って、うちのチームだけ、なんか落ち着いてない？　華はいつもそうだから、違和感ないけどさー。テレビだよ、テ、レ、ビ！　モテちゃうんだよ？」
「武部（たけべ）さん。も、モテるかどうかはわからないと思うけど……。それに戦車道の全国大会は、カメラが入るのが普通だし」
最後に念を入れて靴紐（くつひも）を調整してたみぽりんが、今更みたいな感じで言った。
へー！　あ、みぽりんにとっては当たり前のことだから、いちいちあたふたしないんだね？
そしてゆかりんは……一番に着替えを済ませて、もう更衣室から出てってたり。
「先にⅣ号（よんごう）に乗り込んでますね！」
って、あのコにとってはテレビより、戦車なのよねー。
で、それとは逆に麻子（まこ）ときたら。

「眠い……つらい。生きてるのがつらい……」
「麻子？　ちょっと、着替えの途中で寝ちゃダメだって〜！」
更衣室の隅で、下着姿になったまま、パイプ椅子にもたれて今にも寝そうになってる！
おーい。
「……あと二時間は寝かせてくれ。頼む」
「それ、試合始まっちゃうってば！」
「冷泉さん。着替え、手伝いますね」
華がさっと動いて、麻子の制服を取ってくる。うーん、こ〜ゆ〜気配り満点なとこ、私も乙女として見習うべきかな？
「しょーがない。ほらほら麻子、両手上げて〜。バンザイっ」
「子供じゃないぞ……」
ちょっと愚痴りながらも麻子が、かくんかくん頭を揺らしつつ、バンザイした。もー、やれやれ——。

ってな感じで、いっぱいいっぱいだった私たち大洗女子だったけど。
敵チームのサンダース大付属ときたら、すっごい余裕で？
「わ！　な、なにこの、なに⁉」
更衣室を出て、両チームの戦車が並ぶ、待機所って名前の広場に来た。
すると……もーなんか、格差社会⁉

更衣室はちょうど、待機所の横につくられてるんだけど。向こうはそこに、トレーラーとか乗り付けちゃってる！　それって……。

「救護車に、シャワー車。あれはヘアサロン車ですか？」

華も唖然とした。うん、びっくり！

ローライズジーンズを履いた相手の選手が、メイクまでしてもらってるし。ううっ、リッチな学校ってこーゆーこと？

「応援席もいっぱい……。ま、まだ一回戦なのに」

仮設スタンドを見て、みぽりんがたじろいだ。

ここから、この先の島内まで見渡せる、高くつくられたスタンドには――わ、わ！　サンダース大付属の応援団と、チアガールがいっぱい！

こっちの応援は、ぱらぱらとしかいないのに～！

「さすがはリッチな学校だな。いろいろ、規模が違う」

寝ぼけてた麻子まで、目を見開いちゃうほどだよ！

ううん、それだけじゃなくて。

「ヘイ！　アンジー！」

唐突に、私たちの方に声がかかった。

誰？　……それはサンダース大付属の方からやってきた、カーキ色のジャケットに、ローライズジーンズの人。

真っ直ぐに向かうのは、生徒会長の角谷先輩のとこ？　へ？

側にいた小山先輩も河嶋先輩も、「あんじー？」って目を丸くしてた。
だけど会長さんだけが、ふむふむと納得して。
「あー、なるほど。角谷杏だから、アンジーね～？」
「イエスイエス！　ユーがリーダーでしょ」
「そっちはー」
「ケイって呼んで！　サンダースの隊長よ！　陣中見舞いね」
そう言うと、そのケイさんったら、後ろに向かってウィンクした。
すると何人かがわらわらと、両手にケータリングを持ってやってきくる。わわわ、ホットドッグにピザに、アイスまで⁉
こ、こんなのまで用意してたの？
「試合前の交流ってことで、なんでも好きなもの食べて！　ＯＫ？」
……って、私たちがその中でも、一番びっくりしたのは——。
「ゆ、ゆかりん⁉　なんで、そこにいんの？」
「い、いえ、その。……つい向こうの戦車に見とれてたら、あの。見つかってしまいまして」
そーいえばさっきから姿の見えなかったゆかりんが、一緒にケータリングを抱えて戻ってくる。
ものすごくおどおどしてたけどさ。あ、そっか。ゆかりんってばサンダースに潜入して、追いかけ回されたんだっけ？

だから、なのかな。なんだか……ケイさんの隣に来た、ホットパンツの人が、すごく不満そうな顔してたし！

「隊長、なにもここまでやらなくともっ」

そしてつい、とがめるようにケイさんに言う。

けど、ケイさんときたら。

「なに、アリサ。うちはいつもオープン！　彼女はこの前、遊びに来ただけね！　今日は試合だけど、もーフレンドよ！　ね、オッドボール三等軍曹！」

なんて、笑顔をゆかりんに向けた。

おっどぼーる、ぐんそうぅ？

たはは、と赤面するのはゆかりんだった。

「あの、その。それは……もう勘弁してくださいよぅ。その名前は、ばれそうになって咄嗟に出た偽名ですし。しかもそのせいで、偽生徒だってばれちゃいましたし」

「あっはっは！　あれはナイスジョークだったよ！」

からから笑ってケイさんたら、ぐっと両手で二本、親指を立てた。

横にいたホットパンツの――アリサさんの方は、やっぱり不機嫌そうだったけどね。

だって、その。ケータリングを置いたゆかりんに、ケイさんたら「そーそーメアド交換しよう！」って、強引にケータイを出してくるし！

しかも押しが強くて、結局ゆかりんも、赤外線通信でアドレス交換しちゃったよ？　ふえぇー。

「アキヤマ……よし、地味だからオッドボール三等軍曹に変えとくね！　じゃ、いい勝負しよう！　バイ！」

そしてケイさんったら、来たときと同じように、颯爽と去っていく。後ろをアリサさんたちサンダース側の選手が、慌ててついてった。

その様子を私たちは、しばらく呆然と見送って。な、なんだったたんだろ……。

でも、そこは食べ盛りな女の子だもんっ。わっ！　てみんなで、ケータリングに群がった。

……。一番人気はもちろん、溶けるのが早そうなアイス～！

オッドって確か、片方、とかいう意味だよね？　で、ボール、だから。

けどさ、オッドボール、って。

うん、なんか……考えないことにしよ！

たぶん、乙女が口にできる言葉じゃない気がするよ――。

†

早めのお昼ご飯代わりに、アイスとピザとかを詰め込んで――ついに開始時間がきちゃう！

ぱーぱぱぱーぱぱぱー！

快晴の空の下。高らかに、ファンファーレが鳴り響いた。

待機場所から戦車を前に出して、向かい合わせとした真ん中に、私たちは整列してた。

もちろんケイさんをはじめとする、サンダース大付属の選手たちと一緒にね。
その間に、黒い制服に白タイツの人たちが割り込んだ。「ＪＵＤＧＥ」のプレートを胸から下げた、審判団だね！
そこには、蝶野教官もいて。おっと！　思わず私たちの何人かが、会釈した。
でも、教官たら反応しなくて。
あ、そっか。今日はあくまで審判で、私たちの教官じゃないもんね。
そして蝶野教か……審判が、試合の開始を告げた。
「それではサンダース大付属高校と、大洗女子学園の試合を開始する！」
『……説明した通り、相手のフラッグ車を戦闘不能にした方が勝ちです』
Ⅳ号戦車に乗り込んだ私たちの中から、みぽりんが喉につけたマイクでみんなに伝える。
ヘッドホンを付けた私には、肉声より通信機越しの声の方がはっきり聞こえた。
——現在、小島のフィールドの中を、スタート位置に向けて移動開始したばかり。
私はホワイトボードに貼った地図を確認してた。
今回は……ちょっとしたジャングル？　あったかい気候のせいで、木が多いみたい。戦車を動かすには邪魔だけど、隠れるにはちょうどいいのかな。
うー、でも、さっそく蒸し暑いよぉお。
Ⅳ号の中は一応、申し訳程度にエアコンはついてるけどね。あー、けど、どうしても汗

はかいちゃう。
そんなの構わず社長のみぽりんたら、真上の円い扉を開けて、暑い外に頭を出した。
肉眼でチェックするのは、別のスタート位置に向かう、サンダースの戦車かな？
こっちは五台で、向こうは倍の十台もいて……。
『事前に秋山さんが掴んでくれた、情報どおりみたいです。サンダース側は簡単には撃破されないと読んで、フラッグ車以外をオフェンスに投入してきます』
名前を言われて、ゆかりんが嬉しそうな顔で振り返った。
ただ、みぽりんの声は厳しかったけど。
『となると、全車輌でディフェンスラインを押し上げてくるつもりです。性能が、攻守ともにわたしたちより上ですから……とにかく、こちらは落ち着いて戦いましょう。一発も当たらないように。……それって』
でもみぽりんたら、くすっ、てなんか軽く笑った？
『この前の、聖グロとの練習試合と同じですよね。だから、できます。きっと、もっとうまく！　あのときは負けてしまったけど、機動性を生かして常に動き続けてください。そして攻撃力の高い、Ⅲ突の前に、敵を分散させて引きずり込めば』
すうっ、とわざと一呼吸空けるみぽりん。
『勝てます！』
そして、断言しちゃったよ。う。うわお！
だけどそれは、みんなの士気を高めるには十分で――。

『はい！』
『おーっ！』
って、威勢のいい声が返ってきた！
かわりにマイクを喉から外したみぽりんが、「ふうー」って長い吐息を、頭を引っ込めてⅣ号の中に出したけれど。
でも見上げる私たちと目が合うと、みぽりんたら笑顔を見せた。
……私、やっぱりみぽりんが隊長で、よかった気がするよ。うん！
そうこうしているうちに、麻子の操るⅣ号戦車が停止した。
ううん、フタのされた窓の隙間穴からは、他の仲間の戦車も停まったのが見える。ここが、スタート地点だね！
私はいそいそと、地図の上にマグネットを五個配置した。それらは今までのとは違う、新しいの。敵を示すのは、九個がブルーで一つだけをレッドにしたけど。私たちのマグネットは、生き物のヤツにしたんだ～。
それは、ね。
『試合開始！』
審判の、誰かの声が通信機から聞こえた。
同時に戦車の窓の外で、光が輝く。空に上がった信号弾！
始まったんだっ。
『ウサギさんチーム、右方向の偵察をお願いします。アヒルさんチームは左方向を』

みぽりんがさっそく指示を出した。
この大会から、五つのチームをそれぞれマグネットになぞらえて、呼び合うことになったの!
『……そのチーム名は、なんとかならなかったのか』
なんて、カメさんチーム——生徒会の河嶋先輩から、愚痴が届いちゃうけど。
『了解しました』
『こちらも了解!』
って、ウサギさん&アヒルさんチームから返事が来る。ええと、ウサギさんがピンクのM3戦車の一年生たちで、アヒルさんがバレー部のハチキュー式だよね! 私はそれぞれのマグネットを左右に動かす。
『で、カバさんと……我々あんこうは、カメさんを守りつつ、前進します』
続いてみぽりんが、生徒会の金色の38tを、カバさんこと歴女のⅢ突戦車と護衛するよう指示した。
そうそう、私たちはあんこうチーム、なのよね~。
……。たまたま大洗町の名物だから、マグネットが手に入りやすかったってだけだよ?
決して、あの悲惨な某踊りをさせられたから、じゃないよ? た、たぶん……!
『こちらウサギ! B085S地点、シャーマン三輌発見!』
なんてことを考えてた私の思考は、一瞬で吹っ飛んだ。……ウサギさんチーム、一年生から報告? わ、わっ!

「B0885S、敵発見！　シャーマン三輌、だって！」
どーにか繰り返し、Ⅳ号車内に伝達する。
『これからおびき出します！』
B0885S……って、ええと。私はあわあわしながらも、さっと眼鏡をかけて地図をチェック！
地図上には細かく、いくつかの番号で位置を割り振ってるのよね。そこはジャングルを流れる、川沿いのあたりだった。
ところが……。
なに？　どーん、どーん！　って、すごい音が通信越しに？
これ、撃たれてる？　同じ通信を聞いてるみぽりんが、『今のは!?』って聞き返した！
『ウサギ、完全に包囲されました！　ヘルプ、ヘルプです～！』
すぐに慌てふためいた返事が来る。って、なんで？　さっき、おびき出すって……！
「武部(たけべ)さん！　ウサギさんに近い、味方車輌は!!」
って、みぽりんがⅣ号の中に頭を引っ込め、私に叫んだ。わわわっ！　え、えーと！
「南西側に先行してるアヒルさんが、方向転換した方が早いかも！　それと、私たちあんこうか、カバさん！」
地図を見て、私はみぽりんに伝える。
そしてみぽりんが判断した。
『こちらあんこうチーム！　ウサギさんチームに、南西から援軍を送ります！　アヒルさ

んチームは北東へと転進し、駆けつけてください！　あんこうも単独で向かいます！』
たんっ！　って同時に、みぽりんはペダルを踏んだ。操縦手の麻子に、意思を伝える。
「あんこうチーム、右回りでアヒルさんと合流し、ウサギさんを救援します！」
「……了解だ」
麻子が答えて、Ⅳ号を加速させた。木々の大きな隙間を縫って、走り出す。
だけどみぽりんの仕事は、そこで終わらなくて。
『ウサギさん、北東側に移動しながら、敵を引きつけて！　南西から駆けつけた私たちが、背後から三輌のシャーマンを強襲します！　その砲撃と同時に、退避して！』
――要は、ええと。うまくやればウサギさんチームを囮にして、敵を挟み撃ちにしちゃえるってこと？
それがみぽりんの作戦みたい。おおお。
だけど。
『⁉　こちらウサギ！　……敵が、いなくなりました！』
いきなりそんな連絡が入った。え、え？
『攻撃してた三輌が、移動したみたいです！　な、なんでー？』
その答えは、嫌でもすぐにわかったよ。だって――。
「きゃぁああっ⁉」
ずどーん！　ってすごい音がして、Ⅳ号戦車内に悲鳴が起きる！
「て、敵ですー！」

ゆかりんが装塡手席で叫んだよ。え、えええええ？

「前方からシャーマン三輌！　間違いありません！」

「ウサギさんを囲んでた車輌っ？　そんな！」

みぽりんが息を吞む。こ、こっちに来たってこと？

それはⅣ号だけじゃなくて、一緒に駆けつけてきたハチキュー式も巻き込まれちゃう！

『こちらアヒル！　ど、どーすんの〜!!　向こうにサービスエース取られちゃった！』

「撃ち返しますか!?」

砲手の華も緊迫した声で訊いた。

けど、その前にみぽりんが私に尋ねてきて。

「……武部さんっ、近くに高地があったよね？」

「へ？　えーと、うん！　ここから……南南西の115に、高地ありだよ！」

私は地図に書かれた高低差の数値とにらめっこして、手近な高地の場所を告げる。

『ウサギさんもアヒルさんも、あんこうとともに散開して後退！　集結地点は……南南西115高地麓！』

その情報を元に、みぽりんが決断した。

『わたしたちあんこうが、しんがりを務めます！』

『ウサギ了解！　高地まで逃げまーす！』

『アヒルも了解〜。速攻でいくよ！』

「こっちはバックで後退しながら、撃って！　五十鈴さん！」
他のチームからの声とかぶせて、みぽりんはペダルで麻子に伝えながら、華にも命じた。「はい！」って華が了承して。
ずどおんっ!!　Ⅳ号戦車が火を噴いた！
それは……当たらなかったみたいだけど。白煙を振り払って、Ⅳ号はバックで走り出す。
「とにかく遮蔽物に隠れながら、逃げて！」
みぽりんの緊張が、嫌でも私たちにも伝わってきた。ううっ、いきなりピンチじゃん！
こんな偶然、あり？　ウサギさんから離れた敵と鉢合わせしちゃうなんて……とんだアンラッキーだよぉ〜。

でも、その原因を——私たちは意外と早く、知ることになる。
「囲まれた!?　撤退急いでっ、右の森、敵戦車と混ざって！」
高地に集結しかけたところを、私たちはまた、敵からの攻撃を受けちゃった。
それはどーにか、敵戦車とすれ違うようにして、振り切ったんだけど……。
そのときみぽりんが「！」ってなにかに気付いたの。
……敵戦車が反転して追いかけてくるには、ちょっとだけ余裕があって。
「秋山さん、あれって！」
だからみぽりんたら、閉じていた頭上の扉を開けて、ゆかりんに空を指した。

はい？　ってゆかりんも、自分の側にある扉から、外に身を乗り出して確認すると。

「あれは……バルーンですか？　アンテナ、ついてますね！　まさかっ」

な、なに？

「待って、秋山さん。……武部さん、これ、ちょっと外して？」

みぽりんが首輪型マイクを外しながら、私に言った。うん？　「これ」って、マイクのことだよね？　いーけど。

意図はよくわかんないけれど、社長で隊長のみぽりんがやることだから。私も首からマイクをとった。

でもこんなの、こっちの声が仲間に伝わらなくなっちゃって――。

「通信傍受機、ってことですよね！」

それを待って、ゆかりんが空を見上げて興奮した。

通信、傍受……はいぃい？

「それって、もしかして！　こっちの通信、盗み聞きされてるってことじゃん⁉」

「え？　そんなの反則じゃ」

華も目を丸くする。だけど麻子が「いや」って戦車を走らせながら否定して。

「確かルールブックには、記載されてはなかったな」

「どうりでこっちの動きが読まれていたはずですね！」

ゆかりんが怒った。そんなの、当然じゃん！

「ひどーい！　いくらお金があるからって」

「抗議しましょう」
絶対に許さない。そんな迫力をにじませるのは、華だった。
けれども――みぽりんたら、ちょっと考えて。
「……うん。だったら逆に、利用させてもらおっか」
え!? な、なに？ するとみぽりんが「あのね」って、私たちにある考えを披露する。
ううん。それは……主に、私のみに向けたもので。
あー、なるほど！
「できる？ 武部(たけべ)さん？」
「って、やるしかないよね？ 私！」
任せて！ わたしはみんなに笑顔を向けた。
そしてマイクを外したまま、まずは「準備」に取りかかって――。

† †

「全車、0985の道路を南進！ ジャンクションまで移動して！」
ついに、みぽりんの作戦が開始だよ！
Ⅳ号戦車(よんごうせんしゃ)から頭を出して、みぽりんが首輪型マイクに告げた。打ち合わせ通り、この小島のジャングル地帯を分断する、南北の道路を走るように。
リゾート計画の名残みたいで、建設途中で放置されたっぽいんだけど……左右をゆるや

かな丘に囲まれた中、中央にはつくりかけのジャンクションがあるのよね。
それはコンクリの橋脚で持ち上がって、途中で途切れちゃってるの。でも十分な幅と長さがあるから、戦車が身を隠すにはもってこい、かも？
だから。
「敵はジャンクションを北上してくるはずなので、通り過ぎたところを左右から狙って！」
みぽりんは待ち伏せを指示した。……うん、これで間違いないはず！
そして——敵がやってくる。
道路を北上してくるのが、たった、台。んで、それ以外の多数が、道路を左右から包囲するように！
ふっふーん。だけど、今私たちはそんな様子を確認できる、丘の上に集結してて。
「かかった！」
みぽりんが小声で、喉からマイクを離して笑った。
ううん、すぐに仕草で、戦車の外に出て様子を見てた私たちに指示してくる。ほいほい！　私も華もゆかりんも麻子も、他のチームのみんなも自分の戦車に急いで戻った。
ここにいないのは、生徒会のカメさんチームくらいで。
『囲まれた！　全車後退！』
通信席でヘッドホンをかぶり直すと、みぽりんの「嘘」命令が、私の耳にも飛び込んできた。

そう、嘘なのよね！　でもこれを合図に、ジャンクションにいたカバさんチームの38tが、飛び出すことになってるの。
戦車の後ろには、てきとーな木を引きずってて……それがうまく土煙を上げるって手はずだよ。
これで敵は、まさかうちの生徒会の、フラッグ車一台だけなんて思うわけなくて。
そして私たち、他のチームが予定ポイントに先回りする！
『……見つかったわ！』
38tを追いかける、敵の戦車を確認してか、満を持してみぽりんが演技した。
『みんな、バラバラになって退避！　38tはC1024R地点に隠れてください！　フラッグ車がやられちゃうと負けなので！』
うひー、みぽりん、真に迫ってるよう〜。
それでいて「フラッグ車の位置」を、しっかり伝えてて。
——だからC1024R地点に真っ直ぐ、一台の敵戦車が現れた。
でも、残念！　ここには38tはいなくて、かわりに私たちのⅣ号と、攻撃力の高いカバさんのⅢ突（さんとつ）がいて！
「今です！」
がくんっ！　みぽりんの声に、麻子（まこ）がⅣ号戦車（よんごうせんしゃ）を急停止させた。
その瞬間、華（はな）が動く。停車した状態から、確実に敵を狙（ねら）って——。
ずどんっ‼　Ⅳ号と、横にいたⅢ突とが、同時に撃った！　それは敵戦車に……当

たった⁉

「確認！　白旗ですっ！　やりました西住殿～！」

審判からの判定が届く前に、ゆかりんが叫ぶ。

確かに白煙が晴れたそこには、白旗の上がった敵がいて。……や、やったあー！

「作戦、大成功～！」

私は思わずはしゃいだ。うん、大丈夫。その声が通信に入らないよう、マイクはとっくに外してたもんっ。

かわりに私が使うのは、自分のケータイ！　もちろん今の状況を、ばばばってメールで打ち込んじゃう。

――そう、これがみぽりんの考えた作戦なの。

嘘の情報を通信で聞かせて、ほんとは私のメールでやりとりしてるの！

一斉送信できるように、最初にチームのメアドをまとめるのだけは、手間がかかっちゃったけどねっ。

でも、でもでも！　これで一台、撃破だよー！

「武部さん、気を緩めないでって、みんなに！　まだ一輌やっつけただけで、九輌残ってるから。それに今回は、フラッグ車を叩かないと勝ちにならないしっ」

って、みぽりんがマイクを離して私に言う。

はいはーい。私はそのとおり、新しいメールを送信した。

その間にもみぽりんたら、嘘の情報をマイクで流す。

『全車、さっきの115高地に集合してください。敵にファイアフライがあるかぎり、こちらに勝ち目はありません。115高地に陣取って、上からファイアフライを一気に叩きます！』

そして、続いて私に本当の作戦を伝えた。

「と、いうわけだから……武部さん。みんなには、115高地を包囲するようメールを！あとは、アヒルさんチームに斥候に出るよう、伝達も！　撃たなくていいから、敵フラッグ車の位置を確認して、って！」

「わかった！」

「でもたぶん、これでこっちがニセ情報を流してること、ばれちゃうから。勝負はそこからね」

ぽつり、と最後にみぽりんが呟いた。

やかましい戦車の中、私にそれは聞こえたけど……メールにはしない。勝負所だなんて、わかってるもん。

そして、信じてる。みぽりんとみんながいれば、きっと勝てるって！

【アヒル、敵フラッグ車発見！】

――その情報は、私のケータイに画像付きで送られてきた！

だから。

『全車輌、パンツァー・フォー！』

みぽりんが、通信傍受されてるなんて気にも留めずに声を上げた。
そう、チャンスはこれっきり！　偵察に出て、敵をおびき寄せてたアヒルさんのハチキュー式以外、四輌の戦車が飛び出した！
アヒルさんチームの情報どおり、教えてもらった地点には……いた！　敵の、フラッグ車！
確かケイさんに文句言ってた、アリサさん、ってのが乗り込んだヤツだっけ？
えーい、誰でもいいけど、四対一だい！
「行っちゃえ～！」
私は手に汗握った。慌ててサンダースのフラッグ車が、逃げ出した。
そこをみんなで追いかける！　38tもM3も、Ⅲ突もばんばん大砲を撃つよ！
あー、でも、当たらない？　ううん、それでよかったんだっけ。みぽりんの作戦では。だって敵戦車の装甲は厚すぎるから、すごく近づかなきゃ、弾かれちゃうみたいなのよね。だから、華がまだ撃たない。
他の三台が追い込んで、最後にⅣ号でトドメを刺すの！
だけど。
『きゃー！　サンダース、大量接近！』
はい？　いきなりそんな通信が入って……ひゃああ⁉
轟音が私たちを揺らした。う、撃たれたあ？
当たってないけど、土煙があちこちに！

「大丈夫、威嚇射撃だから！　まだ遠いっ！」

みぽりんが車内から外を見て、でも最後は声をうわずらせた。「八輌、全部⁉」なんて、一応喉のマイクを離して呻く。

つまりこれで四対一が、四対九に⁉　嘘ぉ！

『全車輌、攻撃の手を緩めないで！　８９式も戻って！　フラッグ車を狙い続けてください！』

みぽりんがすぐ、冷静に呼びかけた。うん、もうニセ情報なんて関係ない！　これで、どーにか五対九だもんっ。

でも、なりふり構っていられないのは、敵も同じで。

『サンダースのフラッグ車、反転！　こっちに向かって撃ってきます！』

また他のチームからの報告が入った。え、えええ？

この状況で、突っ込んでくるの⁉

「これは、挟み撃ちの形だぞ！」

麻子が珍しく慌てた。って、ほんとだ！　偶然、そうなっちゃった⁉

「……ここで撃ち合うしかない！」

だけどみぽりんが即断する。

『ウサギさん、カバさんは後方をお願いします！　とにかく、弾幕を張って！　アヒルさんと我々、あんこうチームは引き続き、フラッグ車を攻撃します！』

『ウサギ、了か……きゃあああ！』

ずどーん！　そんな音とともに、一年生の声が途切れた！　だ、大丈夫⁉
『ま、まだいけます！　……今度は、逃げないです！』
『この状況は天王寺の戦いに似ている！』
相変わらずよくわかんないこと言ってるのは、カバさんチームの歴女さんらだよね？
『撃て撃てー！　バックアタック！』
バレー部のアヒルさんたちも、こっちに合流したとたん、かなりがんばってくれてる！
私たちⅣ号と一緒に、迫ってくる敵フラッグ車に撃ちまくって――。
でも、あ、ああ――っ！　撃たれた⁉　明後日の方向から飛んできた弾が、当たったみたい！
窓の隙間越しに、白旗の上がるのが見えて。
『すみません、アヒルチーム、戦闘不能です！』
「……ハチキュー式が脱落しちゃったよ！　みぽりーん！」
私は通信手の仕事をする。残り、四台！　ホワイトボードに貼ってあった地図の上から、アヒル型マグネットを外した。
「ま、ますます不利じゃん！　これで」
「でもフラッグ車は、お互い一輌ずつ！」
残りのマグネットを数える前に、みぽりんが叫んだ。わわっ？
「まだ勝てるチャンスはあるはず！」
それは、ぜんっぜん諦めてない一声で。

『絶対にわたしたちが勝つんです！　そう信じて、落ち着いて、攻撃を続けてください！』
そして喉につけたマイクで、みんなを鼓舞した。
『絶対に……』
『勝つ!?』
『あたしたちがっ』
通信機の向こうから、みんながみぽりんの言葉を噛み締めた。
『そうです！　諦めた方が負けなんです!!』
って、みぽりん？　それって……私、知ってる。
――あきらめないこと。そしてどんな状況でも逃げ出さないこと、よね？
「冷泉さん、合図したら真っ直ぐフラッグ車に突っ込んで！」
みぽりんが、せわしなく戦車を動かす麻子に言った。それから「照準、正面に合わせて！」って、華とゆかりんに！
「えっ？　敵に合わせるんじゃなくて……照準の中に、敵を捉えるんですか!?」
ゆかりんが驚きながらも、装塡手として華のサポートに回った。
照準の付いた覗き窓から確認して――。
「要するに、照準内に飛び込んでくる一瞬に、合わせればいいのですね？」
華がふうーーっ、て息を吐いた。うん、頼むよ、華～！
「もーこーなったら、撃って撃って撃って撃ちまくってー！　下手な鉄砲も数撃てば当たるっ

て！　恋愛だってそうだもん！」
「……いいえ。一発でいいはずです」
「え？」
華の冷静な言いように、私はどきりとさせられた。
それは「今っ！」ってみぽりんが合図して、麻子が戦車を弾けるように前進させても、変わらなくて。
「花を活けるときのように、集中して……」
わ、わわわ！　華ってば、目を閉じてる⁉
ううん。——すごく、集中してた。見守ってるこっちにも、伝わってくるくらい！
そして……華が、目を見開いた瞬間。
「撃ちます！」
ずどぉぉんっ‼　久方ぶりにⅣ号戦車が火を噴いた。
白煙が舞い、視界のすべてが覆われた。だけどそれを突っ切ったⅣ号の前には、動けなくなった敵がいて。
私たちが真横をすり抜けたとき、その車体から白旗がぴょこんっ、て上がってた。
これって——。
『サンダース大付属高校のフラッグ車、沈黙を確認しました！　……大洗女子学園の勝利！』
無線から審判の、蝶野教官の声が聞こえた。

や、や、や……やったああああ――――――!!

エピローグ　私のモテ生活はどこ、だよ！

勝った。
ほんとに……勝っちゃった！
私たち大洗女子とサンダース大付属の戦車は、動けるぶんだけ待機所まで戻ってきたよ。
だけど、今日の試合はあまりにも、へとへとで。……Ⅳ号を前進させてる麻子(まこ)も、レバーを握りながらぐったりしてた。
華なんか、まだ大砲の引き金から手を離せてないし。ゆかりんも、もういいのに、新しい砲弾を抱えてた。
みぽりんはみぽりんで、真上の円い扉を開けたまま、空を見上げて放心状態？
それはきっと、うちの他のチームも似たようなもんだと思う。通信機からは一言も、誰(だれ)の声も聞こえないしね。
ただ――そんな私たちを観客席からの、拍手が迎えてくれて。
「勝った、んです、ね……」
ようやく華が口を開く。
それをきっかけに、みんなもどうにか我に返った。うん……勝ったんだ！
「うーーーっ、やったあ！」

私は思いきり、頭上の鉄の扉を開けて、バンザイした！
「シャーマン相手に、勝てるなんて！」
ゆかりんが、やっぱり砲弾を抱いたまま喜ぶ。他にも通信機から、『わー！』『勝っちゃった！』『まず第一歩だ！』とか、いろんな声が届いてくる。
そして――。
「おめでとう、みんな！」
戦車の外から、誰かが言った。へ？　私もみぽりんも、開けていた扉から顔を出すと……あ！　教官じゃん！
「蝶野教かーん！　勝てましたー！」
思わず手を振り返してたのは、私たちより先に、教官に気付いたコたち。壊れたハチキュー式のかわりに、わらわらとⅢ突戦車や38tの上にのってた、バレー部の四人だよ。
だけど教官は近くまで駆けつけておいて、観客席の前を指さした。うん、なに？
「凱旋しなさい！　応援してくれた人たちの前で、ゆっくりと！」
あ……。そっか、とみんなが顔を見合わせる。
みぽりんが頷いて、さっそくマイクに「一列縦隊で、スタンド前を微速前進！」って伝えた。
――私たち大洗女子の四台の戦車が、たくさんの観客に出迎えられる。
ぱらぱらといた、私たちの関係者だけじゃない。大勢のサンダース大付属の、応援団や

チアガールまで拍手してる？
うわっ。なんか……胸が、じーんって。
これ、なに？　まるで恋の始まりみたい！
気が付けば、戦車から顔を出した何人かが、その場でわんわん泣いていた。ううっ、私も泣いちゃいそう！　思わず目元をこすってしまう。
「これが、勝つってことなんだ……！」
そして私たち、大洗女子学園の初勝利だよ！
「みぽりん！　華、ゆかりん、麻子！　……すごいよ、私たちっ！」
うー、最高!!　満面の笑みで、戦車の中に引っ込んだりして、みんなと喜びを噛み締めた。
だけど、そのとき。
「？　……あっ、み、みなさん！　メールです！」
急にゆかりんが慌てた。なんで、メールくらいで？　通信席に戻った私は、きょとんとする。
でも、ゆかりんが「ほら！」とみんなに見せて回ったそれは。
【部下が勝手に無線を傍受していたようで、ソーリー！　こんな真似、二度とさせないので許して欲しい】
って、メッセージで。
んんん？　これ、送り主は……あっ、サンダースの隊長、ケイさんじゃん!?

そーいえばゆかりん、メアド交換してたんだっけ？
ケイさんって、ええと。私たちは戦車から頭を出して、外を見た。
すると、いた。サンダース大付属高校の、残った八台の戦車たちが、私たちから少し離れて整列してる。
その前でケータイを手にしてたケイさんが、こっちと目が合ったとたん――びしっ！　って敬礼をしてきたよ。
もちろん、他のサンダースの選手も。背筋を伸ばして、負けたのに、堂々と――。
なんか、すごい。私たちは見とれちゃう。
さらに、そんなケイさんたちにも観客席から拍手が起きた。……うん、だって、かっこいいもんね！
「やってくれるねー」
なんて言って、先頭の38tからぽんと飛び降りたのは、生徒会長の角谷先輩。「ヘイ、アンジー！」って、ケイさんが前に出て、うわ。ハグまでしちゃう？
「次も絶対、勝ちなさいよ！」
そして笑顔で、私たちを見送ってくれた。
一方、振り返ってサンダースの列に戻ったケイさんたら、アリサってコの肩をぽんと叩いていたけどね。
メールの内容がほんとなら、ケイさんは通信傍受を知らなくて。やったのはもしかして、あのアリサってコなのかな？

たぶん、反省会とかしちゃうんだろーなー。
でもそのアリサも、ショックを受けた感じだけど、私たちへの敬礼を崩さない。
これって……。
「みんな、いい相手と戦えたわね！」
ゆっくり進む戦車の横を歩きながら、蝶野教官が私たちに言ってくる。
「負けても襟を正す。なかなかできることじゃないわ。でも、それが真の戦車道なの！　こうした精神があってこそ、かつては戦争の道具でしかなかった戦車は、一つの武道に昇華されたのよ。だから」
ほら！　教官は沸き立つスタンドを示した。
「今こうして、みんなで盛り上がることができるの！　……なら、あなたたちのすべきことは？」
私たちの、やること？
それは……隊長のみぽりんが、すぐに察して。
「大洗女子、サンダース大付属に、敬礼ー！」
走る戦車から身を乗り出して、背筋を伸ばして敬礼した。もちろん同じように戦車の外に出てる者も、それに倣うよ。
戦車道は礼に始まり、礼に終わる、だっけ？　そっか、こーゆーことなのね！
ううん。戦ってくれた相手や、見守る観客ばかりじゃなくて。きっと戦車道をつくってきてくれた、いろんな人たちに向かっての礼儀で――。

「──って、わ⁉」
そんなことを考えてた私の顔が突然、スタンドの向かい側にそびえる、大きなスクリーンに映ったよ⁉
それは試合中の様子を、映し出すためのもので。今はさっきから、勝った私たちを撮る、カメラ映像が流されてたの。て、テレビに、ついに私が映っちゃったー！
あああ、でも、汗や油でどろどろだよ～！　ありゃー……う、ううん、しょーがないじゃんっ！
いつもなら恥ずかしくてたまらないけど──今日は、違うもん！　私は自然と、笑顔になる。それも、とびっきりの！
だって、だって。
精一杯やりきったからこそ、汚れたんだからね！
「やっほー！　テレビの向こうのイケメンさん、見てる？　武部（たけべ）沙織（さおり）、十六歳！　素敵な彼氏、募集中だよ～」
なんて声まではたぶん、カメラじゃ拾えてないだろうけどさ。
でもこれで、テレビに出ちゃったし！　私のモテモテ生活、始まっちゃうよぉお～！
ああんっ！

翌日の、私のモテ生活スタート日！

……そのはず、だったんだけど。

な、なんでー⁉

「どーしてっ、映ってないの？　私っ！」

——試合が終わって、翌日。生徒会からの招集で、私たち戦車道チームは、学校の視聴覚室に集められたんだけれど。

そこで録画されてた、『熱闘戦車道』なんて番組を見せられたのよね。

私は知らなかったんだけど、昨日の試合がそこで放送されてたんだって！

よーし！　じゃあ私のとびきりの笑顔も、ばっちり流れてるよね？　とか思ってたのに……。

大洗女子と、サンダースの試合が映ったのって——たった、一分くらいだったよ⁉

それもそのほとんどが、戦車の映像ばっかり！　ね、ねえー、凱旋パレードの様子は？

私の顔の、アップは～？

「って、ダイジェスト放送って……そんなのありなの⁉」

「い、一回戦だから。他にも試合はたくさんあったし」

隣に座るみぽりんが、嘆く私を慰めてくれた……。

「こら、そこー！　自分たちの試合だけじゃなくて、勝ち残った他の学校を分析するために集まったのだぞ！」

生徒会の河嶋先輩は、容赦なかったけどね。ううっ。

って、すぐ私じゃなくて、「そこも、寝るな！」って麻子を見つけて怒るけど。
あー、無理無理。午前中に来てるだけでも奇蹟なのに、映像を見せるために、カーテン締めて暗くしちゃうんだもん。
「む……眠い。つらい……」
麻子ったら一度は顔を上げたけど、今度はそのまま動かなくなる。河嶋先輩にはばれてないけど、これは、そのまま寝ちゃってるね……。
「やっぱり黒森峰女学園とプラウダ高校が、順当に勝ち進んできたねー」
それはともかく、視聴覚室の机に片肘をついて、干しイモを齧りながら会長さんがぶつぶつぼやく。なんかセーラー服にぼろぼろこぼしてるから、横で小山先輩が、胸を揺らしながら拭いてたけどね。
というか、みぽりんの言うとーり。全部で十六校が参加したから……一回戦って、八試合もあったんだっけ？ それをまとめてあちこちのフィールドで、やっちゃったみたい。
要は勝ち残ったチーム数が、一気に半分になったってことだけど。そっか、まだ試合は何度かあって――。
「ワタシたちは戦車道では無名ですけど、これでベスト8です！ 次も勝てば、ベスト4……準決勝ですよ！ 嫌でも注目されるようになります。いえ、むしろあのサンダース大付属に勝ったことで、もうネットでは少し話題になってましたよ？」
昨日の興奮冷めやらぬ感じのゆかりんが、嬉しそうに耳打ちしてきた。ふーん？
「あ。また勝てばいい、ってことだよね。そっかそっか！」

私はようやく納得した。……モテる機会は勝つほどに、高まっちゃうわけだねっ。
「二回戦は、アンツィオ高校に決まりましたね」
真面目に録画を見てた華が、とってたメモを確認する。あっ、そーなの？
「次も勝つよー」
干しイモを食べきった会長さんが、ふいに言った。
「もちろん、サンダース大付属のぶんまで、ね～」
それは……異論を持つ人なんて、誰もいないってば。
私はみぽりん、ゆかりん、華と顔を見合わせる。それと「ふがっ」って起きた、麻子とも。
ううん。その他、視聴覚室に集められたみんなと、やがて互いに笑みを交わして。
「おー!!」
私たち大洗女子戦車道チームは、声を上げたよ！
うんっ、勝って勝って、勝ちまくって——モテモテになってやるんだからねっ。うん！



あとがき

本書はアニメ『ガールズ&パンツァー』の、公式ノベライズとなります。
第一話～六話までの流れと、ストーリーは基本的に同じです。
同じ……のはず、なのですが。

●読みやすさを考慮して、「戦車を知らない」キャラである沙織(さおり)ちゃんを主役にし、その一人称視点で物語を再構築しました。
●というか個人的に、沙織ちゃんが一番かわいいと思うのです（笑）。
●ただし、沙織ちゃんと関係の深い主役五人以外の描写が、どうしても少なくなっちゃいました。すみません！　そちらはもう、アニメ本編をお楽しみください～。
●また、キモである戦車のアクションも、「動く」アニメには勝てないですね……。「大洗(おおあらい)町」をきちんと描いた聖グロリアーナ戦には、脱帽です！
●……アニメ設定で沙織ちゃんの部屋だけが決まっておらず、資料にあった「優花里(ゆかり)以外は寮生活」の一言に準じました。てことはこのノベライズが、彼女の公式設定に⁉
●副会長の過剰な巨乳描写は、私が勝手にやりました！
●教官のシーンを増やしたのも私の独断です。だって、椎名(しいな)へきるさんキャラですよ⁉
●ところで戦車内の描写ですが、微妙に、小説独自の解釈をしている箇所も？　なるべく

説得力のある方法を選択したつもりですが、戦車マニアの人はご容赦ください。たとえば「蹴る」シーンがそうですが、あれは調べれば調べるほど「届かない」ことがわかり……ええいもうっ、苦肉の策です（汗）。

●そういった箇所を、アニメや先に出たコミカライズ版などと、いろいろ見比べてみると面白いとは思いますよ。

●あ、コミカライズや公式サイトのサウンドドラマから、一部つまませてもらった部分があります。そこを見つけて、にやりとしていただくのもアリではないかと？　後発の強みを活かしてみました。

といった感じの一巻でした～。

さて、続く二巻はどうなるのでしょうか？　すでに資料をいただいており、私は目を通していますが……熱い！　熱すぎます！　これは間違いなく、盛り上がりますよー！

楽しみにしていただければ幸いです。それでは！

２０１２年11月　ひびき遊

著者

ひびき遊（ひびき・ゆう）

関西在住の玩具マニア。変形と合体ものをこよなく愛する。今回のノベライズオファーでも「戦車お好きですか？」「……変形するのなら！」というやり取りがあったとか。

イラストレーター

島田フミカネ（しまだ・ふみかね）

メカ少女に定評のあるイラストレーター。代表作に『ストライク・ウィッチーズ』など。『ガールズ＆パンツァー』ではキャラクター原案をつとめる。

本文イラスト

京極しん（きょうごく・しん）

滋賀県出身のイラストレーター。

代表作は『ほうかご百物語』（電撃文庫）、『もて？モテ！ある日突然モテ期になった！』（ＭＦ文庫Ｊ）など。

娘ＴＹＰＥ（角川書店）にて『ストライク・ウィッチーズ』公式コミックを連載するなど幅広く活動。

同人サークル「ＩＮＦＩＮＩＴＹ ＤＲＩＶＥ」を主宰。

ガールズ＆パンツァー

著者名……ひびき遊
発行者……三坂泰二
発行所……株式会社メディアファクトリー
　　　　http://www.mediafactory.co.jp/

２０１２年11月30日　電子書籍版　ver.1.0.1